
エリスの迷宮

くじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒリスの迷宮

【Zコード】

Z8349A

【作者名】

くじら

【あらすじ】

夢の中で聞こえてきた氣味の悪い闇の声。気に留めてはいたが所詮夢の話。お互いそんな話はせず、そのままいつものように生活していたコナンと哀。しかし闇の声はカウントダウンの宣告した。そして目も眩む光に包まれた・・・

1・闇の声

「Sherrry・・・秘薬を作りし悪魔よ。」

暗闇の中から声がした。

「薬で死んでいった者たちを尻目に生き続ける気分はいかがかな?」

闇の声は続けた。

哀の回りから不気味な笑い声も聞こえてくる。

「時間を捻じ曲げた重罪はソナタ自身で償つてもらう。」

そこは光の無い世界。哀が見回しても人の気配はない。

「いつたい誰なの!?」

哀は闇に問うてみた。

「我はずっと傍にいた・・・この世を去つた者たちの苦しみを忘れたのか。

ソナタは科人。ソナタの所為で世界のバランスが狂い始めたことを
氣にもかけてないからだろう。」

「科人・・・そうね。罪を犯したわ。それを忘れるはずはない。そ
してその償いから逃げるつもりもない。」

「刑の執行のカウントダウンが聞こえるかな。償いの刻が近づいて
いるのだ・・・。」

闇の声は消えた。

気がつくとベットの横にあるランプがいつもの部屋を照らしていた。
隣から博士のイビキが聞こえてくる。

「・・・またあの夢。」

初めは変な夢を見たと思っていただけ。

しかし、つして毎晩のように気味の悪い声を聞くことになるとは・・・

・ 哀は目を擦りながら起き上がつた。

夢にコナンが出てきたあの日から追いかけてるジンの夢はもう見ない。

しかしそれに替わつてこの闇の声が夢に現れた。

哀はキッチンに立つと水を一杯飲み干した。

「カウントダウン・・・明日はカウント0になる。いつたい何の前触れを示しているのだろう・・・。」

哀は眠れず朝を迎えた。

・・・・・・・・・

「コナンつ弱すぎだぜつ！」

元太の呆れた声が響いていた。

せっかくのお休みも雨でサッカーも出来ず探偵団は博士の家に集合。代わりにテレビゲームによる米花町カップをスタートさせた。

苦手なコントローラーの操作にサッカーゲームでさえ惨敗中。

刑事たちさえコントロールして難事件を解決するゲームメーカーもモニターに映る名選手をコントロールするのは至難の技。

計算されたはずのオフサイドトラップは歩美に簡単に突破され、光彦のカーテナチオにシャットアウト。

元太にはショート練習の相手にされて、

唯一接戦となつた哀との試合もPKを取られ、右か左かと読み合いの上じ真ん中に決められるとゲームが崩れてしまった。

とうとう勝ち点も取れずにお選敗退。

今日は特にひどいスコア。

コナンはキッチンの椅子に座り決勝トーナメント第一戦を眺めていたのだった。

元太と歩美の緊迫したゲーム。気合いの入った光彦の応援する声。その後ろでコナンはこつそり欠伸を手で隠していた。

「コナンも1週間以上変な夢が続いていた。

「時間を捻じ曲げた科人よ。その手で全てを償え。」

あの意味深な科白と氣味の悪い声が未だに耳に残っている。

初めて夢を見た日は父さんのナイトバロンシリーズの最新刊を読んだ夜。

きつとそのイメージが残っていたんだろうと思っていた。

それが毎晩続いている。

最近疲れてるのか?そんなことはないだろ?つ。

灰原はどう思うか聞いてみようか?

そつと振り向くと「一ヒーを淹れながら欠伸をしていた。そして歩美たちに隠していた浮かない表情を浮かべていた。今日はその声がカウントダウンと宣告するだろ?うなんて。こんなクダラナイことを聞く雰囲気でもないか?

コナンは気になるあの声の意味をもう一度考えていた。

「わあつ負けちゃつた。やつぱり元太くんは強いね。」「歩美も上手くなつたよな。」

「ナイスゲームでした。こんどは僕と灰原さんですね。負けませんよ。」

お互いの健闘を称えあう2人と哀を捜す光彦。

「ほれつオヤツたぞ。ゲームも一休みじや。」

博士がみんなに声を掛けた。

「わあつうまそう。」

「哀ちゃんお手伝いしていたんだ。ごめんね。」

「ゲーム中だつたんじょ。それじゃジュースを運んでくれるかしら。」

「ああつ僕も手伝いますよ。」

一斉に子供たちがキッキンに駆けて行く。

「・・・おいおい散らかしつぱなしじや踏んじまひやつ。」

コントローラーを片付けてたコナンは誤つてリモコンを踏んでしまつた。

「ホントに踏んじまつたぜ・・・テレビ・・・つくかな?」

踏んだリモコンを試しに押してみるとテレビはニュースを放送した。よく知る刑事たちの姿が映つている。

みんなもニュースを見つめていた

「昨日の事件の死因は心臓麻痺と確認されました。

しかし状況から不審な点が多く遺体遺棄事件として捜査を始めました。」

よく分からぬ説明をアナウンサーが戸惑いながら伝えていた。

・・・まさか・・・アポトキシン?

直感的にそう感じた。

しかしあの冷静なジンがそんな疑いを持たれる様な処理はしないだろひ。

そう考えるいつも冷静なコナンではいられなかつた。

全てはあの夢の所為。

思わずコナンは哀の顔を見た。

あいつはどう感じているのだろう。

まだ分からぬが薬が使われればあいつが苦しむだろひ。

しかし子供たちもいるこの部屋では努めてポーカーフェイスを保つていて。

おやつに楽しい会話を続ける部屋の中でコナンも苦しさを感じていた。

決勝戦はまた今度となり散らかした部屋を片付ける。

日が暮れ始め子供たちを家に帰るよう促す夕焼け小焼けのメロディ

が町の中に響き渡つた。

歩美たちはまた明日と手を振り家に帰つてゆく。コナンもみんなと同じように博士の家を後にした。哀もいつものように玄関でみんなを見送つた。

いつもの風景。いつもの仲間。

その中に偽りの存在が溶け込んでいる。

確かに時間を捻じ曲げコナンとして生きている。それが罪だと言うのならその償いはしよう。

しかしこれは約束の場所に戻るための仮初の姿。それを否定される訳には行かない。

闇の声よ。

その全ての罪を受け入れよう。

それでもオレは生きて元の姿に戻る。

あの日の誓いは変わらない。

街灯が灯り始めた。

チカチカとその青白い灯りがしつかりとした光となろうとする瞬間。

カウントダウン・・・・0

夢じやない。現実の世界で闇の声が聞こえた。

電線を飛び立つたはずのカラスが羽を広げたまま宙に浮いている。先を走つていた歩美たち3人が固まっている。元太なんて転びかけたままだつた。

すれ違う自転車がバランスを取つたまま停まつていてる。

そのハンドルを握る男のタバコの煙も漂つことを忘れていた。コナンを残してすべてが刻が止まつた。

「なつなんだつ！？」

いきなり目の前の景色を布のように切り裂き放たれた光が噴出し口

ナンの体を包み込んだ。

「科人よ。刻がきた。」

・・・この声は確かに・・・

「その手を汚しその心が引き裂かれようともその罪は償わねばならない。」

・・・まさか。正夢とでもいうのか・・・

「死を受け入れず生き残りし科人よ。その罪全てをその体で受け止めよ。」

コナンの姿は光に飲みこまれて消えた・・・

1・闇の声（後書き）

くじらです。
ゆっくりめですが頑張ってみたいと思います。
ヨロシクお願いします。

気が付くとそこは見知らぬ世界。

ゴツゴツした岩と赤く染まつた砂の大地。

強い日差しに照らされ草木が枯れている。

地面を触ると岩の欠片さえサラサラと砂に変わつてゆく。

「ここはどこなんだつ？」

「コナンは博士の家を出たばかり。

自分の家を通りすぎ電柱の立つ角を曲がりかけたはず。

一瞬にして博士の家から探偵事務所に向かういつもの帰り道が消えた。

た。

「博士……。灰原……。歩美つ元太つ光彦……。」

振り返つてもゲームをしていた博士の家も見送つていた哀の姿も家に向かつて走つて行く歩美たちの後姿も消えた。

みんなの名前を叫んでも返事は無くコナン1人きり。

とりあえずこの場所を調べなくては……

人はいるのだろうか？水も確保しないと。

いきなりサバイバル生活に放り込まれたよう。

まずは見晴らしの良さそうな高台にある岩を目指して歩く。

近づいてみるとその大きな岩は白い縄が張られ祭られていた。

「御神体？みたいなものか？」

彫つてある文字は崩れて解読できないでいると犬の遠吠えが聞こえる。

「犬？・・・散歩には似合わねえ場所だよな。・・・獵犬にしても狩りをするような場所には見えないし・・・あとは・・・野良犬？」

「ナンが振り向くと一匹の犬が見える。

愛らしくシッポをフリフリ。そしてその首には何かが巻かれていた。

「よしつ首輪なら飼い主もいるかもしないな。」

しかし辺りを見回しても飼い主の影がない。家を抜け出して遊んでいたのかも知れない。

「まあ飼い犬なら家に戻るだろ？し・・・。」

暢気に犬が近寄るのを待つていると田に映る光景に違和感を覚えた。そう岩以外比べるもののが回りにない所為だらう。

どんどん近くにつれて予想以上に大きく見えてくる。

「でかいすぎるっ！」

「ナンは気が付くと同時に振り返り走り出した。

後ろから象のよう大きな柴犬が追いかけてくる。

愛らしい顔のクセしてドスンドスンと重厚感のある力強いスキップ。サラサラとした山肌に足を取られる「ナンの一歩とそんなことに動じない犬の一歩。その差は歴然。

数秒後「ナンは犬に咥えられていた。

アマガミのつもりなのか噛み碎こうとする意志は感じられない。

しかし犬歯の間に「ナンは右足を挟まれていた。

「痛いっ離せっ。」

犬は満足するとスタッタ歩き始める。

「どこへ連れてゆくつもりなんだ・・・。」

噛み切るつもりなら体はとっくに引き裂かれているだらう。もがけば傷口は広がるだけ。

素直に連れて行かれるしかなかつた。

「おうつガキを咥えて何してんねん？」

男の声がした。

ウウウウッ・・・・・ワン。

警戒したのか犬が吠えると「ナンは地面に落とされた。

「もうちーとばかし手加減しろや。」

男は鎧のよつた防具を身にまとい腰には剣を差していた。

「ウウウ・・・ウウ・・・

「たまには遊んでやるからその子は返してくれへんか?」「犬は寂しそうな声を上げる。

「たまには遊んでやるからその子は返してくれへんか?」「犬は納得したのか名残惜しそうに」コナンを舐めるとテクテクと去つていった。

「ありがとうお兄さん・・・つて服部じやねえか!?」

助かったコナンは男の顔を見た。

「目上の者を呼び捨てにすなつ!そや俺は服部平次や。なんで俺のこと知つてるんや?おまえは何者やつ!」

平次はコナンに向かつて剣を突き出した。

その目は平次が犯人を追い詰めるときの目と同じ。

親友を見る目とは全く違う。

「ハハハ・・・ビビったか坊主?自衛団としてオレの名も知れ渡つてしまふたかもしねへんな。

まあええわ。それより傷は手当せんといかんな。どれ見せてみろや。

「平次はニヤッと笑うと小さな少年をその場に座らせた。

剣を突き出したそれは口の聞き方を知らない生意気なガキにお灸をつけるようなものだつたんだろう。

ぶら下げる袋から薬草を取り出した。

「あいつがケルベロスと呼ばれる番犬や。あつまだちつさいから社会見学に来てへんか?

国を訪れる行人が彷徨つて鬼に喰われることもあるやん。

行人を間違ひ無くベイカシティに辿り着けるよう護衛するのが使命やつてことも親や学校で教わつてなかつたんか?」

そんなこと言われてもコナンに分かるはずが無い。

黙っていると平次が続けた。

「ふう・・・馴れ馴れしいと思つたら急に黙りおつて。

そう言えれば御神体の山には特別な力を持つ玉が埋まつたると言ひ伝えがあるな。おまえもそれを搜してたんか？

学者先生が調査したんやで。こないなちつさい子供が簡単に見つかるわけへんや。危険やしやめとき。

・・・よし後は左腕や。出してみる。」

コナンは言われるままにシャツを捲り上げ差し出した。

「・・・ここはどこなんだ？」

コナンはおもむろに聞いてみた。

「へ・・・？」

平次は驚いた。

こんな幼い子供が記憶を失つているのだろうか・・・

「・・・行人なら記憶がないのは当たり前や。けどヘルメスの囁きに誘導されて町に向かうはずなんやけどな。」

「記憶ならあるし今は囁きなんて聞こえもしない。急に光に包まれ気が付いたらこの世界に倒れていたんだ。」

「そないなアホな。この国は俗に黄泉と呼ばれておる。ここは誰でも来れる所やないんやで。

この場所で生まれ育つた者。それ以外は天ノ国や地ノ獄の使者と行人。

あとは・・・科人と鬼。まさか・・・こないな子供が科人の訳あらへんか？」

平次は黙り込んでしまつた。しかしコナンの腕は手際よく傷口を手当していた。

「ありがとう。おかげで楽になりました。」

とりあえずコナンは丁寧な言葉を選んでお礼を言つた。

目の前の男は平次にそつくりであつて気の合つ西の高校生探偵ではないのだから。

「どこぞで頭を打つたとしか考えられへんな。」

平次はぼそぼそ言いながら考えていた。

「あの・・・。」

返事をしない平次にもう一度声をかけた。

「・・・あつわりい。それやこないなとこにこいたら危険やし・・・
坊主はオレについてこいや。」

「うん。」

コナンもそれに頷いた。

「よしよし素直が一番や。」

平次が指笛を吹いて何かを呼んだ。

「おうおうおちや。」

今度は牛みたいに大きなトラが走ってきた。

「トットラ！？」

さつきまで愛らしげに巨大ワソン口に咥えられていたコナンは自然と後ずさりした。

「俺の相棒や。怖がらず撫でてみい可愛いいで。」

平次は二口二口して顎の下を撫でている。

「それはちょっと・・・」

「あないに強くアマガミせんから大丈夫やで。」

平次は嫌がるコナンをトラの背に放り投げると2人で山を降りていった。

3・鬼の出現 その1

2人を乗せたトラはそのしなやかな身体を躍動させ痩せた大地を駆け抜けた。

コナンはだだた必死になつてその背中にしがみついてる。顔を上げる余裕はない。いつ投げ出されるか分からぬほど揺れていた。

揺れの激しさと正反対ののんびりした鼻唄が前から聞こえてきた。

「呑気な・・・」

「おうつ何ぞ言つたか？・・・」の曲か？ええやうつ今思いついたんや。なあハンシンもそつ思つやう？」

ハンシンは2人を乗せたトラの名前。名前を呼んだ』主人の声に答えるかのように吠えた。

町が見えてきた頃には平次の鼻唄は大きな声に変わっていた。

その熱唱ぶりにコナンの方が恥ずかしくなる。

気が付くとハンシンは耳を折つて塞いでいた。よく出来た相棒だ。この揺れといい小恥ずかしい歌といいコナンは全く考へることに集中できなかつた。

相変わらず下を向いているトライアはスピードを落としうつへつ歩き始めた。

「見ろや。あれがベイカシティ。黄泉の国の東の交易の中心なんや。」

「へえつこんな綺麗な町があるとは思わなかつたぜ。それでオレをどこに連れて行くんだ？」

「そう急かすなや。」

平次はトライアから飛び降りるとコナンを乗せたまま手綱を引き町の中を歩き始めた。

港町だからだらう。

いろいろな衣装を着た人々が集まっている。

威勢のいい売り子の声と值切ろうとするお客の声。

大きな声でおしゃべりしてゐる男子学生たちとクスクス笑う女子学生たちの声。

いろいろな場所で行われてるパントマイムやジャグリングを囲んで目を輝かせている子供たちの笑い声。

大きな樽やたくさんの野菜や果物を詰め込んだ牛車が道を空けてく
れつて叫ぶ声。

荒れ果てた荒野の先に賑わつた町があるなんて信じられなかつた。

するとその景色に似合わない不気味な黒マントの男が町の人々に見送
られている光景が目に入った。

「何かあつたのか？」

コナンは異様な壮行会の雰囲気に目を奪われた。

「行人が旅立つ日を迎えたんやな。」

「さつとも話にもでてきただけ行人つて何者なんだ？」

「行人とは前世で死を経験してこの国に現れた旅人のことや。彼ら
はヘルメスの囁きに導かれこの町にくるんや。

ちーとの間に滞在して神の裁きを使者から伝えられ天ノ国か地ノ獄
に旅立つてゆく。」

平次は不憫な記憶喪失の少年に説明した。

「それじゃ現世で死んだってことか？・・・

コナンがもう一度見ると港に向かつた黒マントの顔が見えた。

「テツテキーラ！？」

「ナンがトラの背から飛び降りようとするのを平次が制した。

「やめる。行人になりよつた時点でみなが決まつとるんやで。」
「立ち止まらせるな。」

「離せ。あいつには聞きたいことがあるんだ。」

「それも無理や。オノレが何をしたか生きてきたか分からへんのや。さつき話したうつ。彼らの前世の記憶がほとんどないんや。」

「えつ・・・・・。」

「名前やらなんやら生活に困らへん程度の記憶しかないんや。前世で殺された者もおるんやで。記憶があればフワツシユバックして恐怖に苛まれる者もあるんやろうな。」

黒い組織の記憶を聞きだすのは無理なのが。

ちよつと待てよ。・・・オレ自身がこの世界にいるところとは前世で死んだとでも言うのか？

体を幼児化させて薬による死を免れたのは束の間のことだったのか？あの闇の声がヘルメスの囁き・・・いや・・・あの声はオレを科人と呼んでいた。

オレが行人じやないならまだ前世で死んだとは限らない。

・・・戻らなくちゃ・・・前世に戻れるはず。

まだヤツラを監獄に送り出してもいないんだ。

そして・・・

「もう一つ教えてくれ。科人は何者なんだ？」

見知らぬ世界に圧倒されていたコナンもいつもの瞳の輝きを取り戻し始めた。

「科人つちゅうのは禁忌を犯したものという意味や。」

「禁忌？」

「詳しく述べわからへんが、この世界のバランスを崩した重罪や。」

平次は行人の名を知る少年が唯の記憶喪失ではないと感じていた。きつと何かを隠してゐる。この坊主は何者なのか？

勘みたいものかぶつきらぼうな返事をさせる。

「おめえも知らねえんじやねえか？」

「コナンも疑いながら聞いた。

「もう口に聞き方を忘れたんか！」

これから警備隊本所に行くからそこに分かるヤツがあるやつ。 さつさと歩かんかいっ。」

見抜かれたことを隠そつとする気持ちが平次の声を大きくさせた。

バリバリバリ・・・・・

ガガガガ・・・ガシャーーーーン

「町にまで現れたのかつ！」

「だめだー崩れるつ！」

「逃げるのよつ」

「お母さんー！怖いよー！」

「警備隊はまだかつ！」

建物が倒れてゆく。

崩れる音をかき消すほど無数の悲鳴。 泣き叫ぶ子供の声。

「鬼だつ！」

コナンと平次はその声の方を見た。

平次もハンシンに乗るとその声の方向に走らせる。

しかし必死に逃げ惑う人の流れに出くわし先に進むことはできない。先に飛び降りたコナンは人並みをぬつて駆け抜け瓦礫を駆けあがつたすると目の前に鬼が立つていた。

「でつでけえつ！これが鬼・・・！？」

コナンはそのグロテスクな風貌と威圧感に圧倒されてしまった。電信柱くらい高さにある鬼の額には闘牛のような鋭い角を蓄えその目は大きく紅く血走っていた。

鬼の視線に入ったのだろう。いきなりコナンに振り上げた拳が向かつてくる。

「あほつ！」

遅れて駆け上つてきた平次に引つ張られ鬼の一撃を避けた。コナンの後ろにあつた建物のベランダが吹つ飛んで消えた。「鬼は行人を食うんや。そのためには邪魔者を蹴散らして行く。ぼけつとしてたら殺されるで。」

コナンを征して平次は剣を抜いた。

「ここは俺に任せろや。おまえはみんなを避難させてくれ。」

平次は剣を構え鬼に向かつて駆け出した。

「任せたぜ。」

コナンは逃げ惑う人々の誘導に向かつた。

4・鬼の出現 その2

「オレが相手やつ。」

振り下ろした剣と鬼の手の鋭い爪が甲高い金属音と共に火花を上げる。

まともにパワー勝負はできるわけない。平次は鬼の攻撃を受け流しさらに一撃を加えた。

「ナンが避難する方向を大声で叫んで誘導していると声が聞こえる。

「諦めちゃダメ！誰かつ誰か手を貸してつ！」

瓦礫に足を挟んだ友達を助けようと髪の長い女性が必死になつて崩れた材木を押していた。

逃げ惑う人々は自分の事で精一杯。その横を走り去つて行く。

「もうだめつ。蘭は早く逃げて！」

「何言つてるのつ！」

彼女はただ一生懸命押している。

「蘭！？園子！？」

「ナンは急いで手を貸した。

「坊やありがとう。」

「さあ力を合わせよう。」

伸縮サスペンダーもだたのサスペンダー。腕にあるのはただの時計。靴もベルトもこの世界では自慢の道具として使う事が出来なかつた。コナンも掛け声を合わせて押してもびくともしない。

「わたしも手伝うわ。」

通りかかった黒マントの女性も手を貸した。

・・・黒マント・・・行人？・・・自分が鬼に狙われているのに・・

「・・・ありがとう。お姉さんはもしかして？」

「わたしが狙われることは知っているわ。でもこの町の人はそれでわたしを攻めたりしない。」

気にしてないで・・・だからわたしも困っている人を助けたいの。さあ力を合わせましょう。」

マントからその顔が見えた。

その顔を忘れるはずがない。この人は・・・
その名前が口から飛び出そうとしたときコナンの背中を突つつく者がいた。

「あっハンシン・・・そうか・・・手伝ってくれるんだね。」

避難する人波に流れ置いてきぼりをくつた平次のトラが手綱を咥えていた。

さつそく手綱を材木にくくり付け3人と一匹は声を合させた。

「せーのつ！・・・せーのつ！・・・せーのつ！あつ動いたつ！」

わずかな隙間で園子の足が抜けた。

「急いでここから離れてないとつ！」

「怖くないよ。3人とも早くこいつの背中につ。」

「坊やは？」

「平次兄ちゃんに避難が済んだことを伝えないと・・・ぼくは丈夫。怪我人がいるんだから急いでつ。」

コナンはトラのお尻を叩いた。

トラは瓦礫の山をものともせず駆け上がつていった。

コナンが振り返ると鬼と平次の死闘が続いていた。

鬼の動きが速い。しかしそれ以上に速い平次の俊敏な動きに惑わされていて。

だが鬼のパワーに底が見えない。ダメージが少ないのか平次の剣を受けても強烈な反撃を企てる。

何度も打ちこまれても鬼の手数は減ることはない。

「あかん・・・かな。」

鬼が動くたび建物が破壊され被害は広がるばかり。さすがの平次も苦笑い。そして肩で息をし始めた。平次に襲いかからうとする鬼の足元の石段が崩れ一瞬バランスを崩した。

鬼が倒れたときに飛び散った瓦礫が避難する3人へ向かって飛んでゆく。

大きすぎてハンシンのスピードでは避けきれない。

「間に合つてくれっ！」

コナンは思わず手を伸ばした。

「？？？」

その瞬間瓦礫は宙に浮いたまま止まった。

誰もが逃げるのが精一杯。もちろん3人もそんな事は気が付かない。ハンシンが走り抜けると瓦礫は運動の法則を思い出したように地に落ちゴナゴナに碎けた。

コナンも何が起こったのか分からぬで立ち尽くしている。平次の視界にもその信じられない状況が入ってしまった。

平次の動きが鈍つた。

鬼はこん身の力をこめて振りかぶる。

ギューン！

銃声が響いた。

コナンと平次が振り返ると鬼は目を押えてしゃがみ込んでいた。

「銃！？警備隊が到着したのか？・・・どこに？」

振り向いたそこにはイメージした屈強な男たちの姿どころか誰もない。

「えつ・・・あの銃声は・・・」

噴煙の上がるその向こう。離れた建物の屋上に銃を構えた人影が見えた。

「黒いニット帽の男・・・・赤井？」

「アイツもこの世界にいるのだろうか？
前世ではFBIの捜査員と聞くがどんな人物なのか不明。
この世界では敵なのか味方なのかも分からぬ。
彼のおかげで鬼の動きが止まつた。

「もらつたあ！」

平次は剣を構え直すと飛びかかった。
ここぞとばかりに鬼の死角に廻りこむ。
鬼も必死に腕を振り回し、切りかかつた平次を叩き落とした。
バランスを失つた鬼はそのまま横の建物に倒れると姿が消えてしまつた。

「助かつた・・・。」

コナンはホッとして座りこんだ。

「おつおまえ今何をしたんだ！？一瞬瓦礫が宙に止まつたぞ・・・
不思議な術を使うとは・・・まさか・・・こないなガキが科人！？」

「科人つて？」

平次は急いでコナンの左のシャツの袖を捲り上げた。

「やはりな。その腕に描かれた青い紋章が証拠や。こないな坊主が
そないなもの入れてるとは思わへんかった。」

紋章を確認すると急いで袖を下した。

「しつかり隠しておけよ。オレはおまえを突き出すことはせん。安心しどき。」

「突き出すつてどこにだ？」

「科人は災いを連れてくると言われているんや。誰にも見られてへ

んやろな？

急いでこのから逃げるぞ。科人はどないな罪を背負つとるのか分からん。おまえは何をやつたんか言つてみん。」

「大丈夫かつ！」

やつと警備隊が到着した。

「あかんな。いくぞ坊主つ。」

「えつ警備隊の本所に連れていくんじゃなかつたの？」

「おまえが科人ならそはいかんやろつ。」

戻ってきたばかりのハンシンに乗ると警備隊の反対の方向に走らせた。

・・・・・・・・

町の広場に設営された避難所では救急チームがケガ人の応急処置を施していた。

そこには国の軍部の人間の姿もちらほら見えた。ハンシンに乗せられた3人はここに届けられていたのだった。

「なんで警備隊が遅れたんだつ！」

民衆の怒りも爆発していた。

「ベイカ城でも警報が響いてたぜ。」

城に出入りしていた商人も鬼の被害を受けていた。

「それじゃお城にも鬼がつ！」

「鬼の姿は見てねえけどが警備隊が攻撃してるのを見たよ。」

避難民はお城が襲われたことを初めて知つた。

「それで防衛軍の制服を見かける訳か？」

「さあな。でも鬼が出るなんて十数年振りだぜ。あの時も軍部が動いてたじやねえか。」

「そうだつたな。でも今回は町にまで現れたんだ。非常事態だな。」

「ああ・・・」

人々の噂話は広まつてゆく。不安は搔き立てられるばかり。

「園子痛みはどう?」

「歩くのはちょっと・・・でも痛みは軽くなつた気がする。」

園子は足を押さえながら言つた。

「骨に異常はないそつよ。それにしてもやつきの坊やは戻つてこないわね。」

黒マントの女性が気になつて辺りを見回していた。

「私たちを乗せたトラをハンシンと呼んでいたし服部くんの名前を知つていたしあの子はきっと彼の知り合いね。」

「ああ新一くんの友達の・・・そういうえば彼はまだ戻つてこないわね・・・。」

「うん・・・でも必ず帰つてくるよ。信じてるもの。」

「その彼はあなたの恋人さんかな?」

「いっいいえそんなんじや。」

「違うのよ。ダンナよ。ダンナッ!」

3人が話していると軍服を着た男が黒マントの女性に声をかけてきた。

「我々は国家防衛軍のものです。今回出現した鬼についてお話を聞かせてもらえないませんか?」

「はつはい。かまいませんが。」

「ではこちらにお願いします。」

兵が彼女を連れてゆく。

「ちょっと待つてください。・・・ありがとうございました。おかげで助かりました。」

兵に断り足を止めた彼女に蘭は頭を下げた。

「いいえ。困ったときはお互い様よ。」

彼女はにこりと笑つた。

「お名前だけでも教えてくださいませんか?」

「明美。宮野明美といいます。ではまたお会いできたら・・・園子さんお大事に。」

彼女は頭を下げ兵の後ろをついてゆく。

蘭は黒マントの彼女が向かう先に立つ美しい女性と一瞬目が合つた。

「ねえ園子。あの人も軍の人？」

「ああ。パーティーでお父様に挨拶してたわ。防衛軍司令官の新しい秘書のクリスさん。確かクリス・ヴィンヤードさんだったかしら。」

クリスは薄笑いを浮かべゆつくりとその場を去つていった。

5・消えた2人

もう鼻唄などは聞こえてこない。

平次は後を追う者がいないか注意深く辺りを確認しながらハンシンを走らせた。

それだけ慎重にならざるえないということは鬼とはまた違った意味で科人も危険な存在なのだろうか？

街で遭遇した鬼は子供の頃に母さんに読んでもらった本に出て来る空想の生き物。

鬼門と言われる丑寅の方位の通り鬼は牛の角を持ち寅の毛皮をまとっていた。

しかしここ黄泉の国はハーデスが統治する冥界。

例え、ゼウスでもポセイドンでも自由に訪れ出て行くことはできない。それは鬼にとっても同じこと。

ならば誰がどうやってこの地に鬼を送りこんだのだろうか？

あの闇の声の仕業ならば科人と呼ばれるオレも同じなのだろう？

ハンシンが急にスピードを落として歩き始めた。

場所を確認するかのように平次の顔をときおり覗く。

町の中心から御神体に戻るよう走つて着いた場所は静かのんびりとした住宅街。

平次の視線の先は石で積み上げられた円柱のちょっと変わった建物があつた。

ドカ
ン！バリバリバリー！

門をぐぐるといきなりの爆発音。

また鬼が出たのかと辺りを見回すがその姿は無い。

音の発信源はやはり目の前の建物だと思えるがこの爆音に馴れているのか近所の住人が驚いて飛び出してくる気配も無かつた。

静まり返った建物の窓からだたたゆつくりと煙が上がつていった。

「・・・いつものことや。気にせんでええよ。」

平次も爆音を気にも留めていなかつた。

しかしコナンには不気味さは増すばかり。

平次の後ろについて玄関に向かつた。

ガチャーンッダダダダダ・・・・

「あちちちちつ・・・・・。」

いきなりドアが開き白髪でヒゲを蓄えた老人が飛び出してきた。焦げ臭い上着を一生懸命叩いている。

「博士?・・・・阿笠博士か?」

コナンはその顔に驚いて現世の知り合いの名を呼んだ。

「ん?いかにもわしは阿笠だが・・・見覚えのあるような無いよう

な・・・はて?・・・服部くんこの子は誰なんじや?」

「江戸川コナン・・・探偵さ。」

コナンはいつもように名乗つた。

「コイツを御神体の近くで拾つたんや。・・・まあ詳しきは中で話

そつか。」

「ふむ・・・何か込み入つた話じやな。」

博士は見知らぬ少年の素性も気にすることなく部屋に迎え入れた。

博士は招き入れた2人をテーブルに案内するとロウソクを灯した。

テーブルの横に旧式の大きなラジオがあるがさすがにパソコンやテレビは無い。

部屋のまん中には炉があり蒸留器が載せられ、

机にはフランソワ・ビーカーと一緒にガラス瓶に入れられた薬品が並べられている。

その奥には大きな本棚。それでも詰め込めない蔵書が床にたくさんの山を作っていた。

「こはまるで魔法使いの住処のよう。

「危ないから悪戯するんじゃないぞ。」

そう言つと博士は客人にコーヒーを淹れ始めた。

「じーさんは歴史研究家なんやけど爆発を起こすのが趣味みたいなもんや。下手に触ると唯じや済まんぞ。」

平次は笑いながら言つた。

「じーさんは止めてくれんかのつ。

これでも52歳。花の独身まだまだ若いんじや。服部くんは新一と同じで口が悪いからう。

・・・おおつそうじやつた・・・この子は新一の小さい頃に似てるな。」

「新一つてもしかして工藤新一?」

目の前に博士と平次に顔も声もそつくりで名前までも同じ人物がいる。

さつきの現場には蘭も園子もそして赤井も・・・

そんな安易な思いながらもこの世界にはオレと同じ人間までいるのかコナンは聞いてみた。

「おまえ工藤も知つているんか?」

「あついや・・・まあ。」

しかしこの世界の工藤新一は明らかに別人のこと。向けられた視線に重いものを感じるがそれは嘘じやない。

その問いにコナンは首を振つた。

「新一は隣の家に住んでおつたんじや。」

「工藤はオレの田の前で消えたんや。ちょうどおまえと会つたあの場所や。

そしてもう一人。ここでジーさんの研究に協力した宮野志保つちゅう姉ちゃんもや。

搜索を続けとるが未だみつからん。」

平次が悔しそうに言つた。

「わしの娘同然に暮らしておつた志保くんも見つからんのじや。」

博士は寂しそうに下を向いてしまつた。

「オレにも和葉つちゅう煩い幼馴染がある。

東に視察に来て離れて暮らしてるとわかるもんや。

オレの耳にあの声が染みついてるんやな。あの煩さはかなわんが静か過ぎて物足りん。

けどオレの目の前で消えちまつたアイツをそのままに西に帰るわけにはいかんのや。

必ず見つけてあの姉ちゃんの元に連れて帰ると約束したんや。」

その日は閉じたまま平次は腕を組み話した。

「彼女をそのまま残したままでいいのか？」

コナンは聞きづらい質問をした。

「いいと言えば嘘やな。でもオレのワガママかもしれへんけど工藤を見つけた後でもアイツと逢えるから。」

それは彼自身に言い聞かせていくように見えた。

「おおっそうじや。込み入つた話とは何じやな？」

「ヒーヒーを運んできた博士は椅子に座つて聞いた。

「これや。」

平次はコナンの袖をあげて博士に紋章を見せた。

「こつこれはつ・・・この少年は科人じやつたのか。」

博士はその紋章をレンズで拡大して詳しく確認した。

「ああ驚いたで。不思議な術を使いよるし。」

「確かに・・・間違いない。」

博士は平次の話に頷いた。

「・・・博士は科人について何か知ってるのか？」

コナンは恐る恐る聞いた。意味深な闇の声が頭の中を駆け巡る。

「科人は鬼と共にこの国に幾度と無く現れるが詳しく述べ分かつところのじや。」

古文書を調べてみても鬼については書いていても科人について記述が少ないのじやよ。

そのため科人に対して人々は鬼を呼び寄せる者とか災いを連れてくる者だとか言われてある。

さらに科人はあの鬼を操るという説がある。

もし君の正体を知った民衆は警備隊や国軍に報告して町から排除しようとするじやろつ。」

「そんな・・・。」

ため息が漏れた。それならなぜ服部はオレをここに連れてきたのだろつ。

コナンは表情を変えずに話す博士の様子を伺っていた。

「上の世界のことは下の世界のことと似ている。鍊金術の言葉じや。これは天と地。太陽と月。もしかしたら現世とこの黄泉の国も似ているんじやないかと思つんじやがコナンくんはどう思つつかのう？」

「どう思つて？」

全く知らない世界の常識に謎掛けみたいな質問にさすがに躊躇した。「きみは行人の名を知つておろつ。」

博士はコナンの表情を見た。

「そやつ確かコイツ・・・。」

平次も頷いた。

「・・・やはり知つておるか。これでもわしは歴史研究家じやぞ。おぼろげながらその正体を掴みかけてある。

科人は生きながら黄泉の国に送りこまれた現世の人間だと考えておるんじやが如何かな？」

「ああ。その通り現世の人間だ。・・・いきなり声がして。」

黄泉の国の阿笠博士はコナンを現世の人間だと答えを見付け出して

いる。このまま正体を隠しても意味がない。

「それはヘルメス神の声じゃ。そしてその腕の紋章はヘルメスの印。神殿に祭られている玉にその腕と同じ紋章が刻まれてある。その紋章は不思議な力を引き出す陣ではないかと考えられておるんじゃ。」

「これが・・・。」

コナンは腕に付けられた紋章を擦つた。

「ここの國の王は神のお告げを聞くことが出来る神官の代表。代々管理する神殿の奥底に鎮座する玉を通して執り行つておる。

しかしそんな玉を使わずに神と交信し不思議な術を使う科人の存在が神の代理で国を統治する彼らに不都合なのじゃよ。

鬼と科人の関係がはつきりしないまま民衆に情報操作を行つてているのじゃ。」

「・・・そんな。」

ため息が漏れた。

なんとなく分かる気もする。ここのは隔離された特別な世界。何か敵視するものが無ければ突然現れる鬼の恐怖に不安を搔き立てるだけなのかもしれない。

しかしこいつかその反動が現れるもの。ここのまで良い訳ではない。「だから工藤と自衛団を作つたんや。この国では自分の目で真実を探し出すしかないからつてな。」

「わしにはそんな説がどこから出てきたのか解らんし、研究家として根拠なしにそんな説に賛同できん。

学会から謹慎処分にされようともその考えは変わらんよ。

君を神がこの地に呼び出したのなら君がやるべき使命があるからだろう。

神が創造したこの世界を壊すために君を鬼を呼ぶなんて考えられん。わしは科人が危険な存在とは考えておらんし、ここの国で罪を犯した訳じやない君を突き出すことはしない。

もし居場所がなければここにおればよい。服部くんの部屋の隣が空いてるだろう。

ただこの巡りあわせも何かの縁。未だ見つかぬ新一と志保くんの搜索を手伝つて欲しいのじゃが? どうかな江戸川くん。」

「コナンでいいよ。そつしてもうえると助かるけど迷惑になるのでは?」

「かまわへんよ。」これだけ好き勝手に爆発をさせてれば役人なんか近寄らんしな。」

平次が笑いながら言う。

「・・・ それじゃ 2人を捜す手掛かりは何か残つていいのか?」

「残念ながらこれと言つたものは無いんじゃ。」

「科人なら出来ることがあるかもしれない。」

まだ自分に何が出来るのか分からぬけど捜してみるよ。」

「コナンは悔しそうな博士に手を差し伸べた。

「トントン・・・

「だつ 誰や!」

小さな物音に平次が叫んだ。

コナンはいつものクセで膝をつきこの世界では使えないキック力増強シユーズのくるぶしの辺りに手を当てていた。

平次も腰の剣の柄を握つてゆつくり動き出した影が出て来るのを待ち構えていた。

「・・・ ごめんなさい。お留守かと思つたから・・・。」

可愛らしい聞き覚えがある少女の声。

「だつてよ。返事がないけどロウソクの灯りが見えたからな。」

「火事になつたら大変ですしね。」

歩美を先頭に元太と光彦の3人が出て来た。

「おまえらか。脅かすなや。」

「歩美つ 元太、光彦つ !」

また知つてゐる顔の登場にコナンは驚いた。

そして3人が現世と同じように一緒にいることが嬉かつた。

「君は恥ずかしがり屋さんかな。隠れなくても大丈夫だよ。」

「見たことないやつだな。なぜオレたちの名前を知つてゐるんだ?」

「君は引っ越してきたばかりですか?」

歩美はコナンと視線を合わすように座つて、元太はぶつきらぼうこ、光彦は丁寧に聞いてきた。

3人は部屋にいた同じ年くらいの少年に興味津々。

「あつオレは江戸川コナン。」

「ハハハハ・・・変な名前つ!」

「ふんつ笑つてろつ。」

やはり初対面のときと同じ。聞こえないように呟いた。

「それよりおまえら大丈夫だつたんか。町に鬼が出たんやで。」

「ええつそつだつたの?」

「全く知りませんでした。」

「俺たち御神体に行つてたから・・・。」

「おいつあそこは子供だけで行つてはあかんつて言つたやろつ!」

「だつてケロちゃんとおやつ食べようと思つてお菓子持つてつてあげたんだ。」

「ケロちゃんやで?」

「うん。おつきいワソコ。一緒に遊んだんだ。大きな背中に乗せてもらつたりしたよ。」

「ハハハ・・・やつぱり。ケロベロスつて魔犬とか言われてなかつたつけ。」

コナンが平次に拾われた場所で思いつくものはただ1つ。

「まったくガキの菓子にツラレたんか。」

ケロベロスがコナンに絡んでいたのは子供たちが遊びに来るのを待つていたからだろう。

子供たちの冒険心に驚かされるやらケロちゃんに呆れるやら・・・。

「でも今日は可愛い女の子もいましたよ。」

「博士んとこにいる姉ちゃんに似てたって歩美が言つてたな。」

「かわいいの。そして緋色の髪も志保お姉さんと同じだつたよ。」

歩美はお友達になりたいなつて声をかけたかつたけど兵隊さんがいたし……。」

「そのまま連れていかれたんですよ。あれは軍のマークです。間違いませんよ。」

・・・灰原か？

「おまえの知つとるヤツか？」

平次がそつと聞いた。

「そうかもしけねえ。」

この世界の工藤新一が消えて江戸川コナンが流されてきた。そしてこの世界の宮野志保が消えた。この世界に流されてくるのは・

・

もし灰原ならばオレと同じ科人なのだろう。民衆は科人を排除する。・・このまま放つて置くわけには行かない。

「城を覗いてみるか？」

「ああ。付き合つてくれるか？」

「まかせろや。」

「ちょっと待ちなさい。」

ガタガタと家を出でていこうとする2人を博士は止めた。

その視線は興味津々の子供たちを見ている。

2人は仕切り直すしかないと立ち止まつていた。

「城が何者かに襲われたようじや。厳戒態勢じや追い返されるだけじやぞ。」

博士の言葉に子供たちもつまらなそうな顔をする。

「しゃあねえな。様子を見るか。」

コナンは白々しく諦めの言葉を吐く。

「それよりおめえらは家に帰つて両親に無事な顔を見せなくちゃダメだ

メやべ。」

「「「はい。」」

3人は良い返事をすると帰つていつた。

「じゃあな。」「気をつけて帰るんやぞ。」

子供たちを追い返すと博士は2人に話した。

「夜まで待ちなさい。わしの知る裏ルートを教えよう。」

5・消えた2人（後書き）

06.09.10更新に合わせて前話までの関西弁を修整して見ました。関西弁は難しいですね。勉強不足です。
byくじら

6・囚われの少女

きれいな月が昇っていた。

その崇高な光は街のシンボルでもある壮大な城をくつきりと浮かび上がらせていた。

目的を達成できずに後退した賊を警戒した多くの兵士の姿も映してだしている。

星の声が聞こえてきそうな静かな夜。

静寂を邪魔するように言葉を発するもの者もはいない。

兵士たちもただ決められた持ち場に立ち続けている。

その顔は白く無表情の人形の様。

月の明かりの所為だけじやないだらう。

そして彼らの荒い息遣いと手にした銃が震える音が絶えることは無かつた。

城内の一室では将軍の高笑いが聞こえていた。

「国王に天ノ国と地ノ獄の使者が接見したそうだ。やつらが疑おうとも証拠がある訳じやない。」

将軍は部下である司令官とその秘書官に深く座つていたイスから乗り出して言った。

シテヤツタリとまるで子供のように喜びを抑えきれないよう。

「でしきうな。国王が知るよしも無いこと・・・。全ては将軍の計画どおりです。」

司令官は将軍のご機嫌取りに終始していた。クリスマスもため息を殺して頷いた。

「ハハハ・・・あの国王じや計画が完了するまで気付くことはなかろう。氣の毒にあの地ノ獄の使者の冷たい目は心臓に悪いと溢しておったわ。」

「確かに凍りつくような視線のあの男は只者ではないですね。」

司令官はわざと首を窄めて見せた。

「国王はまだしも使者どもには注意を怠るでないぞ。」

「ははっかしこまりました。」

将軍の指示に司令官は慌てて敬礼した。

「それにしても無垢な科人を手に入れた。これで我々に新たな力が手に入るというものだ。」

クリスくんもご苦労であった。きみのような優秀な人材が埋もれていたなんて未だに信じられんよ。」

「恐れ入ります。ではわたしはこれで失礼します。」

「急ぐ必要はなかろう。どうだ、うまいワインが手に入つたのだが？」

一礼してドアに向かおうとするクリスを将軍が止めた。

「せっかくの将軍からのお誘いだぞ。急用もなかろう。」

司令官は上ずつた声で引きとめる。

「いえ。例の盗賊団がまた現れるかもしれません。」

「・・・そうだった。そうだな。多く兵が警戒していると言つて大将のワシが緩んでいては示しがつかんな。」

「夢が叶うアイテムが揃つためでたい日もあります。それも人の心。仕方が無いことです。」

「人の心か・・・そんなものがわしにも残つておつたか・・・。」

「将軍に人の心の無いあの鬼のようにならってはわたしくの職を失います。」

「ふむ・・・ではクリスよろしく頼んだぞ。」

「はい。」

クリスは将軍の執務室を出た。部屋からはご機嫌をとり損ねた司令官を戒める将軍の声が聞こえていた。

「どつちもどつち。」

廊下を歩くクリスはやつとため息を吐いた。

国王が何も知らないとも思えない。そして接見を申し込んできた使者どもが気づいてない訳がない。

潜りこんだネズミの一匹を内々に処理したばかり。

まだ声を潜めて覗き見してゐる輩が城の中を徘徊してゐるだろ。それを気付かずに浮かれてゐるなんて組織が緩みすぎている。だからこそ潜り込んでこの地位を手に入れられたのだが・・・。しかしアイテムが揃いつつある。

わたしに与えられた使命とは何なのだろう?

神はわたしに何をさせようとしているのだろうか?

そつと左の二の腕に触れた。

「ベルモット・・・。」

男がすれ違ひざまに声を掛けて來た。

「ここではその名を言わぬ約束でしよう。カルパドス。」

クリスは顔色も変えずに答えた。

カルパドス・・・FBIに捕まる前に自決を選んだ男。キヤンティーは彼がわたしに惚れていたと言つていて。組織には一筋縄ではいかぬ猛者が揃つてゐる。

捕まるなどそのプライドが許すはずがない。躊躇いも無く死を選んだ。

この世界でも頼りになるわたしの協力者。

「・・・そうだつたな。」

「油断大敵よ。城のヤツラは調子が良過ぎるからね。」

「それに腕はイマイチだな。」

「あの白いヤツはまた現れるだろ。神殿の玉が偽物だと気がついたようだからな。」

「ああ、今度こそ仕留める。」

「頼んだわよ。わたしは司令室に戻る。何かあつたら連絡してくれないかしら。」

「OK。」

男は持ち場に戻つていった。

カルパドスに2度目は無いだろう。

しかし気になるのは2つ。

カルパドスのスコープに収められながら逃げあおせた邪魔者の目的。そしてあの坊やまでこの世界に巻き込まれていないこと祈るだけ。

哀が気が付くと大きなベットに寝かされていた。

どこかの王朝の王様や妃様が使うみたいなベットはその脚が上に伸び専用の屋根まであつた。

頭の奥に鈍い痛みを感じる。

気を失つたのは途中で嗅がされた薬の所為だろう。

哀はぼんやりとした小さなろうそくの灯る部屋を見渡した。そこには誰もいない。哀ひとり。

アンティークな家具に囲まれタイムスリップしたかのよう。

一つ一つが丁寧に漆のよつた独特の光沢が時代を感じさせた。

私は確か・・・

・・・・・

哀は夕焼け小焼けのメロディを博士の家の前で聞いた。

「ばいばい哀ちゃん。」

「また明日。さよなら灰原さん。」

「じゃあな。」

夕焼け空のした少年探偵団はそれぞれの家路についた。ちよつと遅れて工藤くんも探偵事務所に帰つていった。哀はそれを玄関先で見送つた。

その後気味の悪いあの声がカウントダウンの宣言した。見慣れた景色が布のように切り裂かれ光に包まれた。

気が付いたときには荒れ果てた見知らぬ土地に1人座り込んでいた。甲冑をまとつた男たちが現れ囮まれていた。

その屈強な男たちの銃口は明らかに哀に向けられている。抵抗することはできやしない。

ただその銃口が小刻みに震えているのが不思議だつた。こんな小さなしかも女の子に何を懲いているのだろう? その中の1人が上ずつた声で哀に車に乗るよう指示した。黙つて従う哀の後ろから手が伸びて・・・

・・・・・

「あのまま連れて来られたのね。」

闇の声は罪を償えと言つた。

しかしこの部屋を見る限り丁重に扱われている。

果たしてここはどこなのだろう?

ドアの向こうに人の気配を感じる。

監視付きで幽閉するなら部屋の窓に鉄柵がないのが不思議に思えた。恐る恐る窓に近づき外を見た。

「・・・なるほどね。」

ここは大きな城の高い塔。

誰もがここから逃げるなんて考えないだろ。しかし死を覚悟した人にはあまりに無防備。

「少し前のわたしなら状況によつて・・・。」

そんなことをふと思いついた自分はまだまだなのかもれない。

窓から眺める街並みは絵本の世界のよう。

「歩美ちゃんがいたら・・・。」

この世界に来てから彼女の声を聞いたような気がした。彼女が隣にいたら楽しそうに眺めているだろ。

でも安らぎをくれる友達はない。

訳も分からないうちに飛ばされた見知らぬ世界。

そして哀は科人。この世界でどんな償いを求められているのだろうか。

罪は罪。償いはもちろんのこと。

でも哀には哀にしかできない使命がある。工藤くんを元の姿に戻すこと。

心の中には早く元の世界に戻らなければならぬ気持ちとやつと誰かに裁かれるホツとした気持ちが同居している。

気持ちちはふらふら空を飛んでいた。

扉の向こうからの金属片が交わる音に飛んでいた気持ちが戻つてきた。

それは甲冑の男たちの腰にあつた剣なのだろ。外に立つてゐる番人の交代の時刻なのかもしれない。

大きな号令と規則正しい足音が響く。

そして話し声が聞こえてきた。

「異常なし。部屋は静かなもんだ。あの娘はまだ眠つてゐるようだ。」

「了解。そう言えばおまえさんは聞いたか？昼間に城を攻撃したの

は鬼じやないようだぜ。」

「ホントかよ。 いつたい何者なんだ？」

「白い盗賊団って呼ばれる例のドロボウや。 なんでも国王の神殿の玉が狙われたらし。 今回はクリス秘書官が連れてきた男が死守したそうだ。」

「やはり噂通りの凄腕か。 それにしても他の警備の連中はどうしたんだ？」

「薬で眠らされてたんだと。 内勤の連中は油断してるからな。」「でもなぜ玉を狙うんだ？ 神官でもなければ使うことは出来ないのに？」

「さあな。 ドロボウの考えることなんてむづぱりわからねえよ。」「今夜は緊急配備だから呼び出しがあるかもしけねえから注意しろよ。」

「ああつそつするよ。 お先に休ましてもいいはず。」「交代して1人の男が去つていった。

この世界には鬼がいる？

そして続いて聞こえた国王の神殿、玉、盗賊団。

男たちの会話からも絵本に出て来るよつた言葉が並ぶ。

そんな世界でわたしなんかを幽閉する意味があるのだろうか？ 更に訳が分からなくなる。

また窓際のイスに座り直して外を眺めていた。月がとてもきれいだつた。

お姉ちゃんが読んでくれたピーターパンのお話。ティンカーベルが現れそうな静かな夜。

星が流れた。

哀が目を奪われていると声が聞こえた。

「お嬢さん。風邪引きますよ。」

「気が付くと窓の外に白い影が立つていた。

「怪盗キッド！？」

「せひつそんな呼び名は初めてですね。」

その姿はキッドに間違いないはずなのに・・・改めて違う世界にいることを実感した。

「もしかして白い盗賊団は怪盗キッド。あなたのことがなのね。」

「白い盗賊団と呼ばれてますがわたしとしては氣に入らない名前でしてね。」

更に一人のドロボウを捕まえられないと非難を浴びるので団を付けているようです。

それより・・・ふむ・・・怪盗キッド。その呼び名は氣に入りました。

予告状を届けに来たのですがイマイチしつくつ来なかつたので使わせていただきますよ。」

「まあ・・・いいんじやないかしら。」

「それではお礼をしたいのですが何かご要望はありますか？」

「・・・別に。」

「お嬢さんはこの部屋に閉じ込められているのでしょうか。外へ出して差し上げましょ？」

「わたしは罪を償つたためにこの世界に飛ばされた科人なのよ。」

「科人？お嬢さんが？うむ・・・それでは本当かどうか腕を捲つて見せていただきたい。」

哀は言われるままに腕を捲くつてみた。

「えつ！いつの間に・・・」

そこには知らぬまに癌のよくなものがあつた。

「まさしくヘルメスの印。」

「ヘルメス・・・死神の？」

「ここには黄泉の国。ハデス神の統治する冥界ですよ。この地に導く

ものは死神でも可笑しくはないでしょ。」

「

「ふふ・・・ふ・・・・・。」

哀は自分の愚かさを笑つた。

黄泉の国では死んだのも同然。やはり死でしか償えなかつたのか。それは逃げてしまつたことになる。

彼との約束を果たす前に逃げてしまつた。

もう工藤新一が戻ることは無い。

彼にして彼女に謝ることも出来ない。

「いろいろ抱えているようですね。」

「いくら泥棒でも人の心を覗くのは遠慮してもらいたい時もあるわ。」

哀のポーカーフェイスも限界に近い。

「失礼しました小さなレディ。しかし科人は現世の死者である行人とは違います。」

わたしも詳しくは知りませんが科人はこの世界で特別な存在だと聞いています。

「特別と言われても私自身何も分からぬ。」

「思い詰めると体に悪いです。」

ヘルメスは死神とも言われますが旅行の神とも言われています。そして我々ドロボウの神とも。

わたしは仕事をしてきますか。また伺いましょう。そのときまで願いをとつておきましょうか。」

「そうしてもらえると助かるわ。」

「お疲れのようです。今夜はふつくらしたベットでゆっくり休まれた方がいいかもしません。ではご自愛下さいませ。失礼つ。」

白い影は月の照らす夜空を舞つた。

7・黒い再会

白い訪問者を見送った哀の後ろの扉で物音がした。振り返ると「ガチャガチャ」と扉が悲鳴を上げる。

「だつ誰か居るんだろつー?」

慌てた見張りの兵が剣を抜き部屋に飛びこんできた。しかし辺りを見渡しても部屋の中は哀ひとり。

「見たとおり誰もいないわよ。隠れるところなんかないでしょう。」

哀は手を広げ目を閉じ洋画で見るようなオーバーなポーズを見せた。「そんなんはずはないつー! 確かに話し声が聞こえたんだつ。貴様匿つてるな。」

そのポーズは返つて兵士を怒らせた。

クローゼットの中やベットの下はもううん人が入れそうもない家具の隙間まで覗いた。

必死になつて部屋の中を捜しても隠れるような場所は無い。窓枠にぶら下つているのかと窓から顔まで出していた。

優しい光で城を照らす月。

その光が解き放つ静寂は息を殺して隠れることも許さない夜だつた。「この部屋に入るのはその扉からでないと難しいんぢやないかしら。あなたが居眠りでもしてたんぢやない。」

「なつなんだつー! 小娘が生意氣な口を利きやがつてつーおまえなどい。」

子供に生意氣な言葉を使われ激怒した兵士は持つていた剣を哀の首筋にあてた。

でも哀の視線に負けてない。兵士の目を睨みつけた。

「・・・えつ?」

兵士の剣が震えているのに気が付いた。

男の息が荒くなる。

男の表情が険しくなる。

・・・兵士が怯えてる?

小学生相手に屈強な兵士が怯える理由などビビリにも無い。でも目の前の顔に滴る汗は尋常ではない。そう言えばわたしを拉致したときも薬をかがしていた。誰もいないあの場所で使うとは念を入れすぎている。その力で強引に連れ去るなど他愛ないこと。

・・・科人・・・このことに何か関係あるのかしら? 緊迫した状況下ではその言葉しか見あたらなかつた。

「うわああああっ。」

哀が掌を握り締めたとき突然兵士が叫んだ。

剣から手から落とし急いで部屋の壁に体を押しつけた。

「さあまは訳の分からん術を使おうとしただろつ! ? ふふふつオレは騙されないぞ。科人が悪魔だろつとやられてたまるかつ! 息を切らしながら言葉を吐き出す。

「・・・何のこと。」

どうしても1人芝居にしか見えない哀は首をかしげた。

「ふざけやがつて。そうかつそつやつてオレを弄んで殺す気なのかつ! 子供だろうと容赦はせんつ! 」

兵士は怒鳴りながら小銃を抜くと躊躇わざに引き金を引いた。

バシュ　ン

銃声と共に煙があがり弾丸が放たれた。

哀の目はその軌道をしつかりと捕らえていた。

死を覚悟して視線が小銃に集中した所為か弾丸がスローモーションに映る。

黄泉の世界でも死んだと思つた。

これが運命。生きている必要のない者だと神が判断したのだと思つ

た。

しかし顔を背けながら腕を顔のあたりまで挙げてもまだ弾丸が身体に到達していない。

不思議に思いながらも哀は体を反らした。

避けられた・・・そう思った瞬間弾丸は視界から消えた。

窓の外に向かつて突き進む空気の震えが哀の横を走り去った。

避けた?なぜ・・・何が起こったの・・・?

「・・・止まつた・・・弾が・・・宙に止まつた・・・悪魔の力・・・」

兵士の顔は生氣を失いその体は硬直していた。

哀はどうしていいのか分からず立ち尽くしていると廊下からコシコシと足音が響いていた。

「どうした?」

部屋の外から女の声がした。

「しようがないヤツだ・・・」

女は部屋に入ると兵士の頬を叩いた。

「あつ・・・秘書官殿つ。小娘が術をつ!」

数発の鈍い音と共に兵士は我に返つた。

「心配するな。氣を確かに持て。先ずは銃を納めよ。」

・・・秘書官?・・・この匂い・・・鳥肌が立つようなオーラ・・・

急に体が震えだした。

この押し潰されるような異様な感覚は初めてじゃない。

哀は言葉が出て来ない。

目も合わせらずに俯いてしまった。

「何をしている。部屋の外で監視するように指示したはずだが?」

「しかし・・・話し声がしたもので・・・。そつそれに秘書官殿も氣を付けてください。この科人も悪魔の術を使います。」

「案ずるな。科人も万能ではない。貴様もレクチャーを受けてるで

「あらう。」

「しかしつ。」

「もつよい。緊張の連續でおまえも疲れてるのであらう。監視を他の者に替わつてもらえ。それまでこの小娘は私が見ていよう。」

「はつ・・・もつ申し訳ありません。」

兵士が部屋から出て行くとクリスはドアを閉めた。

「久し振りねシェリー。こんな世界で逢えるとは思わなかつたわ。」「ベルモット・・・なぜあなたがこの世界にいるの・・・わたしを追いかけてきたとでも言うの。」

「あら、ここに着たのは私の方が先よ。何度この世界に飛ばされたことかしら。あなたこそあの坊やとは一緒じゃなかつたの?」

クリスはゆっくり歩いて窓際に立つた。

「坊や・・・知らないわ。」

「いまさら隠さなくつても、招待状を送つたわたしが坊やの正体を知らない訳がないじゃない。」

坊やの正体は工藤新一。ジンが始まつたはずの腕利きの探偵坊や・・・。

あなたが彼とつるんでいたの知つたときは驚いたわ。かわいい坊やが必死になつてあなたを守るから手が出せなかつたじゃない。」

「・・・私は罪を償うためにここに連れて来られたのよ。・・・彼は被害者。わたしの所為で人生を狂わされた彼が来るわけないわ。罪を犯したのはわたし。」

工藤くんは巻き込まれただけ。そんな彼を黄泉の世界にまで付き合わせたくない。

「被害者は坊やだけじゃない。薬の存在、その研究を引き継ぐ者を許せない私もそこに加えてもらえないかしら。」

しかし坊やとの約束どおりあなたを諦めた。でもこの世界ではその約束もどうなるわかる?」

「「」は黄泉の国。わたしなら覚悟は出来ているわ。好きにしたらいいでしょ。」

「いい心がけね。」

クリスはフンと鼻で笑った。

「償いなんて言つておきながらあなたがさつきの兵士に術を使ったことをわかつているかしら。」

「術？・・・さつきの・・・」

わたしの目に弾丸が止まつて見えた。あの兵士も放心状態になるほど驚いていた。

「薬で時の流れを逆らつて姿を変えた。今度は「」の世界に流れてる時を狂わせた。

悪魔の力でこの世界の住人に恐怖を振りまいて償いが出来ると思っているの？

悪魔の薬を服用した者の宿命なのよ。まだ使いこなしてないようだけど科人としての能力に目覚めてくるわ。

現世では歳をとらない化け物。

子供なら可愛らしく魔法使いとでも言つのだろうけど「」の世界でもあの鬼と同じ化け物なのよ。

人の口に戸は建てられない・・・「」やつて科人は悪魔の力を持つとこう噂はこの国に広まつていぐ。

償いは現世に対してのもの、この国の住民に何をするつもつなの？」

「それは・・・まだ分からない。」

「でしううね。そしてあなたが坊やにこの世界に来て欲しくなくても薬を服用した坊やが飛ばされていないなんて否定できないわ。それにまさか私と再会するとも思わなかつたでしょ？。気まぐれな神のやることは分からぬじやない。」

「・・・そんな。」

「私は好きにさせてもいいわ。運命の選択はあなたも自由。・・・その額を動かしてござらんなさい。」

哀は言われるままに飾つてある絵画の額を動かした。

そこには小さな窓。

そこから隣の部屋が見えた。ベットに座る女人がこぢりを見た。

「おっお姉ちゃんっ！」

「もう宮野明美。残念だけじ向こひまむてひはあなたの声も聞こえないし姿も見えないわ。」

「でもなぜ？お姉ちゃんはジンに殺されたはず。」

「死んだからこひの黄泉の国にいるのよ。彼女の傍に居たければ私に協力してアポトキシンを作つてもらえないかしら。」

「悪魔の薬を作れつて言つの！・・・組織に協力は出来ないわ。」

「この世界に黒の組織は存在しない。」

アポトキシン・・・組織では出来そこないの名探偵と呼ばれていた秘薬。作るか作らないいか・・・まあ考えるのね。」

クリスは交替してやつてきた兵と何か小声で話すとまた扉が閉められた。

お姉ちゃんに逢いたい。

しかしあの薬を造るなんてことはできない・・・

ベルモットは何を企んでいるのだろう？

罪を償えるなら何でもする。それで私をこの世界に飛ばしたんじやないの。

お姉ちゃんは組織からわたしを助けるために命を落としたのに・・・ベルモットに協力したら合わせる顔が無い。

でもお姉ちゃんはこの壁の向こうにいる。

逢つて・・・話すことは沢山ありますきて・・・この手で抱きしめた

い。

もう一度抱きしめられたい。

哀はベットに横になつた。

これ以上お姉ちゃんの横顔を見るとベルモットの条件をそのまま受け入れてしまいそう。

答えをすぐに見つかるものじゃない。

哀は毛布を頭から被つた。

・・・・・

「秘書官殿これが玉座に。」

クリスが廊下を歩いていると兵士が走り寄つて來た。

『十三夜の静寂の中。本物の玉を頂きに参上します。

怪盗

キッド』

「面白い坊やはいるんだといふているのね。」

「はっ?」

「神殿に向かう。兵を5・6人を連れて来るよ。」

「はいっ。」

あの白い盗賊のことだらう。予告状とは洒落た真似をしてくれる。まるで現世の怪盗のよう。

それなら昼間の奇襲は下調べのつもりだったのだらうか。今もどこかで何か仕掛けを準備を進めているかも知れない。果たしてどこまでできるやうなのか。見てみる必要もあるだらう。「あの・・・司令官への報告はどうしましょつか?」「あなたから伝えておいてくれないか。」

「秘書官殿からでなくても良いのですか?」

「予告状の存在は先に伝えた方がいいだらう。わたしは現場を確認してから行くとする。よろしく頼んだぞ。」

「はっ。」

クリスは兵を集めて暗い廊下を国王の玉座のある大広間に急いだ。

コナンと平次はハンシンを走らせ夜道を急いだ。

街中には城に行けば警備兵の検問に引っ掛る。

博士の教えてもらった通り2人は提向津川に沿つて下り海岸線を走っていた。

岸壁に秘密の国王専用の船のドックがあり、そこから城に続く秘密の通路があると言つ。

いざと言つ時ため予ねてから極秘にドックが造られていたと聞いた。この国の民がそのことを知つたらどうなるだろ？

鬼の恐怖に曝された一部の民が暴れだすかもしけない。

しかしこんな重大な秘密を知る博士が束縛されない生活を続けてい

モードも監視する事が一応のかも。」では一。

でも今は考える時間は無い。2人の行動は警備兵はもちろん民の目

気が付くときれいな月が昇つていた。

コナンはフツと吹いた。

今回は探偵といふよりもまるでエロホウはなつた気分の言葉が多かった。出でてから。

あの氣障な姫の姿を思出してしまった

別の御神体のあるという祠が崖の中腹にあるという。
そこには、**トトロ**に続く秘密の扉が隠れないと博士から聞か

「うーんやなつ。なあ・・・ハンシンストップや。」

「人にはハンミングの聲から隠りると速から外れ崖に触れてみた
じつじつした岩肌に手を掛け足を引っ掛けでみる。

「ここからなら崖を登れそうな手応え。

「さてと。ここからは自分の足が頼りやな。」

「ああっ、ハンシン留守を頼んだよ。」

「ほな行つて来るで。」

月明かりの照らし出された崖を2人は両手両足を駆使して這い上がる。

祠の入り口を月明かりが照らしている。

ぴんと張り詰めた夜に荒い吐息と小さな岩の破片が崩れる音が聞こえた。

こんな所で立ち往生するような主人様ではない。

キツイ勾配をゆっくりと着実に登つてゆく。

ハンシンは丸くなつて月灯りに浮かぶ2人の姿を眺めていた。

・・・・・

「ここやな。シッ・・・中から灯りが漏れてる・・・。」

「誰かいるのか?」

急に小声になつた平次を先頭にゆっくりと覗くとそこには祭壇が祭られていた。

誰かが火をくべているのだろうか松明がたかれている。

「こんな辺鄙なところに誰が?」

「そんなん神宮に決まってるやろ。」

「でも服部と出会つたあの場所の御神体はこんな風に祭られてなかつたぜ。」

「そやな?なんでやる?・・・」この祠のどこかに秘密の扉があるんやつたな。かえつて目立つもんやのに・・・。それより扉を捜そつや。時間が無いで。」

御神体に手を掛け松明から火種をもらつた平次が足との辺りを照らした。

灯りが欲しいだけじゃない。小さな火種から昇る煙で空氣の動きを探つていた。

「おまえは壁のほうを頼んだでつ。」

「高い壁に小さいオレが届くわけ無いだらうつ。」

「御神体に乗つかれば届くやろつ。文句言わんとちやつちやつとやらんかつ。」

平次はコナンに背を向け扉を捜し始めた。

科人は何を目的に現れたのか分からなければ、不思議な術を使うやつかいな存在。

その言伝えを知る者が見たら、そないな少年に背を見せ隙を作るのは危険なことだと言うやう。

科人を敵だと疑えば山のような言伝えが伝承されとる。

せやけど言伝えは時の指導者の田を盗むため真実を隠して伝えとる。そやから阿笠博士は研究意欲に掻き立てられると言つとつた。

真実はいつも1つしかないんだぜ。・・・あいつの言葉。

その真実を見つけ出すのがオレ達の仕事。やからこの街に来てアイツと自衛団を作つた。

博士がアイツの子供の頃に似ると言つとつた。

子供のクセに物怖じせん度胸と冷静さ。

やけに馴れ馴れしく話してくる少年がどにじやアイツに似た雰囲気をかもし出してるからやうつ。

アイツの面影を感じるこの少年の本性を知りたくなりよつたつていのが本音かもしれへん。

「へいへいつ・・・。」

苦笑いを浮かべながらコナンは御神体に手を合わせ礼をする。

「ほう。礼儀正しいやんか。」

平次はコナンを背にしたまま声をかけた。

「一応な。知らない世界に投げ込まれワソコに呑えられ鬼に襲われ・
・その上オレ自身が正体不明の存在だなんて。

さらに神にまで祟られたくないからな。」

「ははっ、そりゃそうや。そんじや早よツ扉を見つけて城に乗り込
もうぜ。」

平次は鼻で笑つた。

「・・・まつたく。」

コナンは不貞腐れた顔を見せた。

しかし平次の仕草に嫌味を感じたわけじゃない。この状況下であつ
さりとした言い回しが返つて嬉しい。

鬼まで出現するSF小説のような世界に飛ばされて最初に会つた人
物。

彼は親友と同じ姿をしていた。彼の行動は熱いハートを感じた。
同じ顔をした別人と理性では分かつていても感情では現世の相棒が
いるように思えていた。

コナンはよじ登るのに良さそうなヘコミを捜すため御神体に触れた。

ピカ　　ツ

その瞬間に御神体が光りだした。

目もくらむような光が落ち着くと岩肌が水晶のように透き通つてゆ
く。

曇りがとれ御神体の中に入影が浮いている光景が見えた。

「えつ？」

平次は目を擦つた。・・・間違いない。

岩肌に触れた所為なのか意識が薄れていくコナンの瞳に工藤新一の
姿が映つていた。

「くつ、くどー！」

平次が叫んだ。

しかし新一は周りを気にする素振りをするだけ。

「工藤つオレや。分からんのか？」

「その・・・声は服・・部？」

「そいや、服部平次やつ。ん・・・今の工藤の声は頭に直接響いたような？」

平次は辺りを見回しながら違和感を覚えた。

「・・・どこ・・に・・・姿・・が見え・・・ねえが・・・。」

「やつぱり生きてたんやな。ここから出してやる。待つてろや。」

平次は御神体を前に構えると剣の柄を握り目を閉じる。

「とりやあつ！」

居合い抜きの剣の閃光が走った。

しかし手ごたえはない。

「刀が通り抜けた・・・？」

「オレはどこか広い空間を漂ってるんだ。宙に浮いてるといつが・・・

・宇宙と言つところはこんな感じなのかもしねえな。」

「おおつ声がちゃんと聞こえるようになつたな。宇宙やと・・・。

そこはエーテルで満たされてるのか？ その場所はどこなんや？」

「ははは・・・エーテルなんて見たことねえから分からぬいがな。

でも信じられない力を感じるぜ・・・あれつ？」

「どうした工藤。何か見えるんか？」

御神体から周りの様子を気にする新一の姿が映る。

「霧が晴れて人が見えた。・・・人が一列になつて河を歩いてゆく。

足を滑らせながらも無心で・・・

あつ1人が列から外れていく。でも・・・周りはその人を無視して

先に進んでゆく。

「そいつらから話は聞けんか？」

「ダメだ。近づこうにも体が浮いたまま。近づくとすると逆の方

に流される。彼らの話し声がしない・・・

いや・・・遠くでケロベロスの鳴き声が聞こえる。」

「向こうの御神体か。あれつおまえはあれにも触れたんやろ。お坊主?どうしたんや?」

平次は座りこんでいるコナンに気がついた。

「だつ・・・大丈夫だ。・・・捜す手掛かり・・・を聞き出すのが先だ・・・ぜ。」

その額から冷たい汗が流れていった。しかし平次を新一と話すことに優先するように仕向けた。

「服部・・・そこに誰かいいるのか?」

「ああ。ここにコナンつちゅう坊主があるんや。こいつが御神体に触れたらおまえの姿が見えたんや。」

このチャンスを逃すわけには行かない。平次はコナンを抱きながら話を続けた。

「御神体?・・・行人が現れると言つあの・・・そつか・・・そつなんだ。」

「そつやつ工藤のいる場所は三途の川かもしだへんな?現世とオレ達の世界との境界線。ならばその先に流されたらあかんで。」

「ああ、例えゼウスでもオレ達の世界は入ることは出来ても出ることは出来ない。その心配はないぜ。」

それより御神体を触れた少年の正体が気になるんだが。」

「なんでや?こうして工藤と話すことができたのは御神体の力やろ。」
「神官が神と交信するために玉を使つていて博士から聞いてないか?」

しかしここが神の領地なら御神体と玉は同じモノなのか?違うモノならその少年が謎の鍵を握つていてるんじやねえかって。」

「そやつ、三途の川は特別な者しか通れない神の領地。(工藤は坊主の正体に気が付いているのかも・・・?)

エーテルはアナガチ外れと限らんかもな。御神体自体が第五元素な

のかもしだへんし・・・。」

科人も神と交信出来ると言う。博士から神官と違つて玉を使わないと教えてもらつていたが方法までは不明だつた。

「御神体と少年が接触することで第五元素になるつていうのはどうかな?つまり御神体は不完全な結晶とも考えられねえか?」

「なるほど・・・それじゃあの坊主が完全な結晶を精製するための鍵と言うことか。」

「あくまでも仮説だがな。第五元素は偉大な力を持つと聞く。彼がいれば鬼から街を救えるかも知れねえ。」

「ああ、そして工藤と富野を連れ戻すこともできるはずや。」

「富野・・・アイツもいないのか?蘭はどうなんだつ?大丈夫なのか!?」

御神体が曇り始めた

「安心しい。煩い姉ちゃんがそばについてる。早よつちに戻ろうな。」

「よかつた・・・オレはこっちで富野を捜す。服部・・・は彼のサポート・・・現世の・・・オレ・・・蘭を・・・」
声が途切れてくれる。

「工藤う!?

「もし・・・捜す・・・頼む・・・は・・・・」

途切れ途切れの声が聞こえなくなると同時に御神体は元の岩に戻つてしまつた。

その袂にコナンが氣を失つて倒れていた。

9・エリスの番人

御神体に平次が触れても新一の姿は映らなかつた。手は無常な岩の冷たさを感じるだけ。

「やはり科人は不思議な力をもつておるんやな。」

平次は腕の中のコナンの額をなでた。

工藤にコナンが科人だと正体を明かさなかつた。

悪魔と言うイメージが定着しとる科人が傍にいるなんて余計な心配をかけたくなかったから。

しかし工藤のことやから気が付いとるやう。

オレ達はこの世界から。工藤は閉じ込められた神の領地から。必ず謎を解いて元の生活に戻る。

そのためにはこの坊主の協力が不可欠や。

オレはどこまで坊主を信じられるのやううか。

心のどこぞ、きっと1欠片くらいは科人を疑つとるのも事実。せやけどこの特別な力に頼らざる得ない部分もあることも同じ。

冷静沈着に行動してこそ真実への近道。

工藤と話せたこの不思議な体験をしたことで揺れ動く心をユートラルにしていられるんか。

それがオレの力量を試されてるような気がした。

コナンの体温はまだ高めのようだが脈は落ち着いてきている。汗もひいてきたようだ。

「しつかりせいや。」

平次はコナンの頬を軽く叩いてみた。

「あつ・・・御神体は?」

「ナンが気が付くまで時間はかからなかつた。意識はしつかりしているが体はまだダルそうに起き上がつた。

「工藤は消えてしもうた。オレは扉を捜すからオマエは休んでろや。

「もう一度触つてみれば……。触れた瞬間何かが頭の中を走つたんだ。」

「御神体で工藤と交信出来たつづことは御神体と科人はなんか関係があるんやろ。調べてみる必要があるが今は無茶したらあかん。平次はそう言つと「ナンに横になるよつに勧めた。

「いいアドバイスだ。安易にわたしから楽しみを奪う出ないぞ。」
気が付くと御神体の上から声がした。

「科人よ。貴様には罪を償つ使命があるのだ。」

振り返ると黒マントを纏いその顔は白い仮面に隠している男がいた。コナンはその姿を見たことがある。

それは現世に存在する人物ではない。小説の中に生きている男。

「ナイトバロン！？」

「何者や？」

「何者つて言われてもヤツの格好はオレの父さんが作つた物語のキャラクターなんだ。」

「へつ、おまえのおどんは物書きなんか。現世のコスプレしてんつづつことはこの仮面男は現世の人間の可能性もあるつてことやな。」

「現世を知つてゐる人物には間違ひない。罪を償えつて言つたあの声にも似てゐる。あんたは何者なんだ？」

「ふふふ。これは君の為に用意した姿なのだよ。わたしはヘルメスの使いとでも言つておこづ。」

「ヘルメスの使いも神つづうことや。工藤を解放してくれへんか？」

「それは出来ぬ相談だ。工藤新一が同時に2人も存在出来るわけがない。そこに現世の工藤新一がいるのだから。」

仮面の男はコナンを見た。

無表情の仮面が薄笑いしたように思えたコナンはうつむき、平次は辺りを見回した。

しかし他に人がいるわけではない。考えられるのはただ一つ。

平次はコナンに会ったときの博士の言葉を思い出していた。

「こいつの名はコナンって言つてたで。工藤がこんなチビすけの訳ないやろ。」

「この世界に鬼が現れたということは現世のバランスが崩れた所為なのだよ。こうして時の流れを無理に捻じ曲げた者がいるではないか。」

「どうこいつこいつちや？」

「・・・服部、実は・・・オレの本当の名は工藤新一。訳あって偽名を遺つてゐる。」

コナンはゆっくり話し始めた。

共に行動する以上隠していられる」とではない。搜索が進まなくなる可能性もある。

それはこの世界の服部平次を信じると言つ意志の表明でもあった。

「ほんならもう1人の工藤新一なのか！？」

「ああ、ある薬を飲まされて体が幼児化しちまつた。」

「ふつ。黄泉の世界の男が現世に飛ばされなかつただけでも救いだつたのでは。なあ工藤くん。」

もし入れ替わつて工藤新一が現世に現れていたら・・・

工藤新一が生きていたと組織から命を狙われるだろう。
周りには顔見知りの別人の蘭がいる。園子も博士も大阪から服部も
やつてくるだらう。

そして組織にFBIとの関係を疑っていたおつちゃんがいる。
何も分からぬまま一網打尽にされてしまつただらう。

「貴様は元の世界に戻りたいのか？」
「当たり前だつ！」

「ならば工藤新一を殺せ。この世界に工藤新一は2人も要らない。そつすればこの世界に貴様の分身が実体となって現れることが出来よ。江戸川コナンは晴れて現世に戻れるぞ。

・・・無論この世界の工藤新一が死ねば現世の工藤も消えざる得ないがな。」

「なにつ！ それじゃ戻ることにならないつ。」

「では勝手に彷徨うがよい。」

「ああ、そうさせてもらうさ。他の方法を探しだして元の世界に戻る。」

「過去にそう言ってこの世界の工藤を殺した科人がいたな。運命に逆らえるか貴様もせいぜい頑張るがよい。」

仮面の男は冷たく言い放った。

「1つ助言してあげよう。

科人の使う術は時間操ること。己の特技に利用すれば計り知れない魔法を使うことが出来る。しかしその術は諸刃の剣。

貴様の寿命をエネルギーに発するものだ。使い果たせば貴様は死ぬ。どう使うかはよく考えるのだな。

まあ貴様が死ねば無条件でこの世界の工藤新一は戻つてこれるぞ。

「なぜ術の秘密を教えたんだ？」

コナンは目を見開いて聞いた。

「貴様は己の命をどう使うか。わたしが楽しむためだ。」

「誰かの命と引き換えに工藤が戻りたいと考えるかつ！ コイツが現世の工藤なら信じるぞ。」

今まで聞き手に回っていた平次が言った。

神の使いに言いたいことは沢山ある。しかし情報を得るチャンスがほとんど無い以上邪魔せずに喋らせるのが得策だと考えていた。もういいだろうとガマンしてた口を開いた。

「服部つ。」

「工藤もオマエも生きてなきゃ意味がないんや。最後までオレと付

き合つてもらつで。」

「科人でもか？」

「ああかまへん。その代わりもつ隠し事無しやからな。工藤もおまえに期待しておつた。鬼から街を救えるかも知れねえつてな。」

「この世界のバランスを戻すためにはオレが現世で工藤新一に戻るしかないぜ。」

「ああ工藤と宮野を取り戻してオマエを現世に返すしかあらへんな。」

「2人の進む道が重なつた。」

「行くがよい。」

仮面の男が壁に指をさすと魔方陣が浮かび上がつた。

魔方陣は光を放ち扉が出来上がつた。

「城に繋がる道が扉の向こうにある。貴様らの彷徨つ姿を楽しく拝見させてもらおう。」

「ああ、オレ達のやり方を楽しんでや。」

2人は扉を潜つていつた。

仮面の男は再び指をさすと扉は元の岩肌に戻る。

「科人よ。その意志を貫け。」

仮面の男が消えると同時に松明の火も消えた。

9・エリスの番人（後書き）

更新する予定が所用のためパソコンも使えず遅れてしまいました。
今回で何かが見えてきたと思います。

う～む、解説してゐる会話ばかりになつちつた。それにしても神話と
中世の物理がゴチャゴチャマゼさ。（苦笑）

今まで辻褄が合わない部分があつたと思います。
ここでやっと彼らの本格的な捜査（冒険？）がスタート。
楽しみにして頂けたらと思います。ではでは～　byくじら

扉を潜つた2人は石を積み上げて造られた地下道を急いだ。

この扉を造るために岩肌に映つた魔方陣は博士の話していたヘルメスの印。

コナンの腕に刻まれたものと同じだった。

あれが術と言うものの力なのなのだろうか？

しかし魔法のような術を目の当たりにした驚きよりもその事実を呑み込んで2人は前に進む。

端から見れば感覚が麻痺していると思われるかもしれない。麻痺していると言うよりは今やるべき事に集中して落ち着きを取り戻しているのだ。

『冷静、沈着、かつ慎重に・・・』

幼児化して愚痴を溢してたときに博士が思い出させてくれたホームズの姿。

不思議な世界にいようとモコナンの頭の中はしつかりと切り替えていた。

暗い地道に所々に灯りが焚いてあり空気の流れを感じた。潮の匂いが強く感じる方向にはドックがあるはず。

進む方向はその逆だと推理できる。

それに灯りを焚いているならばこの通路は人が利用している。

ならば先程の祠に松明が焚いてあるのも不思議ではない。城までの一本道。誰かと出くわすかもしない。2人は慎重に前に進んだ。

しかしヘルメス神の使いと名乗った不気味な仮面の男の言葉だけは引っかかっていた。

男はコナンの償う罪には一言も触れてなかつた。

「どうしたんや？」

先を歩く平次の声が聞こえた。

「なんでもねえよ。」

「・・・そうか。」

平次はそれ以上は聞かなかつた。

隠し事じやない。何を考えていたか分かる気がする。

「今は進むしかあらへんな。」

お互いの目的は同じ。進む道も同じ。

心を隠そつとしなければ言葉にしなくても通じ合ひつことがあると思つた。

「そうだな・・・つて行き止まり？」

「いや・・・繩梯子が腐つて落ちてある。天井に出入り口があるんやろな。」

古びたロープを手に平次が言つた。

「天井か・・・肩貸してくれないか？」

コナンは平次の肩に乗り壁を調べた。

積み重ねた石の壁に比較的きれいな場所がある。

「これだな。」

押すと隠されていたハツチが現れた。

そのハンドルをゆっくりと押し開けるとコナンは辺りに人がいないかを見回した。

「どうや？」

「人の気配は無い。大丈夫だ。」

2人が入ったフロアも地下道のように薄暗い。檻で囲まれた狭い部屋が両サイドに続いていた。

「ここは牢獄やな。過去の歴史で政治犯を閉じ込めていたって聞い

たことがあるで。」

「この国は神が統治しているんだる。その神と交信する国王が神官の代表なら取り巻くのブレーンも神官なのかな？」

「神官って誰でもなることができるのかい？」

「昔は特別な修行とか鍊金術を極めた者。または神からの啓示を受けた者やつたらしい。」

今じゃその血筋の中で能力がある者が受け継いでいるんや。」

「やはりそれじゃ幽閉されてた政治犯もやはり神官だったのかな？」

「神官だけが神と交信できるんや。だから神の教えに背き歪めて伝える者もいたようやで。」

「確かに民は正確な情報が掴めない。権力者の使う手だな。」

「でも暗黒の時代を民が次の時代の幕を開ける。」

「歴史は繰り返す・・・だな。」

2人は檻に囲まれた廊下を歩き続けた。

突然先を歩いていたコナンが立ち止まつた。

「おいつ。」

檻の中に白骨化した遺体があつた。

「背は高くないがこの仏さんは男やな。それにしては大腿骨が異常に細いな・・・怪我でもして歩けんかったかもしねへん。」

「ん・・・この腕の辺りに落ちてる物はなんだろう?..」

コナンは落ちていた小さな豆粒みたい物を手にした。

「これは神官が祈りを捧げる時に使う数珠やないんかな?..」

「それじゃ遺体は神官の可能性があるな。」

あの地道に人が出入りしていると考えられるとなるとこの遺体に気がつかない訳が無い。

過去の歴史に係わる遺体ならばとつて供養されているだろつし、そんなに古いとは思えねえぞ。」

出入りしてゐる連中ならこの遺体の名前を知つてゐるかもしねえな。」

「ああ、ちょつくら聞いてみるしかあらへんな。」

この先は身を隠して探るだけでは済まない。

平次は剣の柄に触れながら言つた。

「IJの国で何かが起きているのは間違たそだぜ。」

2人はまた突当たりの階段を上る。

このフロアの天井にも隠れたハッチが備えられ牢獄を隠していた。さつきと同じように扉を開け忍び込んだ部屋もまだ地下室のよう。今度は鉄の扉がつけられた2つの部屋があつた。

しかしどちらのドアの鍵も壊されている。

とりあえず近くのドアをそつと開け中の様子を探つてみた。

「誰もいないか。ここは書庫のようだな。」

「大事な書物なら鍵が壊れたままにはせんやろつ。ん・・・何か気がついたなんか？」

「ああ。蔵書は埃を被つてゐるのに床は掃除されている。出入りしたのは最近だぜ。」

「それじゃ書物のどちらかに調べた形跡があるかもしねへんな。せやけど持ち去つたつちゅう可能性もあるで。

これを全部調べるには時間がかかり過ぎる。今は先を急いだ方がええんとちやうつか？」

「服部・・・おまえが知つてゐる限りでは科人が現れたつていつ話はいつ頃か覚えてないか？」

「そやな。10年くらい前に現れたと聞いたな。丁度国王が替わつた頃やで。」

「ならば神官が議題にしているだろつ。その頃の議事録に残つてつないかな。

この棚は整理して並べてあるみたいだし残つていれば調べて損は無いぜ。」

「なるほどつ。それにしてもどれも埃被つて汚れとるな。」

とりあえず下の棚はコナン。上の棚は平次。2人は本棚をチェック

してゆく。

「書かれた年が違つて言つても汚れ具合はあまり変わらねえか。」

「あつ 10 年前といえばこの辺りやな。」

試しに 2 冊取り出して読んでみた。

「おい！？」

平次は一冊の蔵書を手にコナンに声をかけた。

「これ見ろや。議事録に参加者の名前がある。」

平次はコナンの背にあわせてしゃがむと手にした書を広げた。

「気になる名前もあるのか？」

「大有りや。鬼対策についての議事録なんやけど・・・阿笠博士の名があるんや。」

「この会議に参加してゐることは・・・博士は。」

「ああ神官やつたんや。博士は富野つちゅう神官の推薦で鬼対策委員会に召集されてたんやな。」

議事録によると鬼対策の作戦に反対して 2 人して委員を外される。」

科人のこと聞いたような素振りでコナンや平次に話していた博士が城にいた神官だつたとは思いもしなかつた。

考えてみれば博士の研究室にあつた器具は鍊金術の道具。

ただの歴史研究家と言つには違和感がある部屋だつた。

「それにあの姉ちゃんのおとんまでが神官だつたとは・・・。」

「もしかして富野つていう神官は城から追い出されたとか？」

「ちょっと待てや・・・ふむ・・・あつ除名処分が下されどるな。よく分かつたな。・・・もしかして城に連れてかれたかも知れへんおまえの仲間つて？」

上の世界のことは「上の世界」と似ている・・・平次の頭に阿笠博士の言葉が浮かんできた。

「ああ現世の宮野志保だ。オレと同じ理由で偽名を使つてゐる。」

「ナンはあえて灰原哀というの名前を言わなかつた。」

「そんなことまで現世と同じなんだ。彼女の親父さんは学会から追い出されたと聞いてる。」

その後鬼対策の作戦はどうなつたんだ？」

「そうやつたんか。作戦は科人を利用した方法みたいやな。・・・

残念ながらリンクが擦れてこれ以上は解読不能や。」

「・・・読めないか。」

「こんな報告も載つてるで。」

現世の記憶を失つてゐるはずの行人が現世で強い想いがある科人と出会うと行人の全ての記憶が蘇つたんやと。

黄泉の世界に現世の記憶は邪魔だと地ノ獄の使者が行人を射殺したとある。」

「仮面の男が話し・・・。」

話している途中で2人は目があつた。示し合わせて黙りこんだ。

ガタ・・・・ガタガタ・・・

「・・・何の音や？」

2人は息を殺して耳に神経を集中させた。

物音は隣の部屋のよう。

「行くか？」

「もちろん。」

2人は隣のドアをゆっくり開けた。

そのスペースは物置に使われていた。

何かの式典につかうような装飾のあるテーブルやイス。

山積みにされた箱の後ろでロープ縛られ口を塞がれた男が這つていた。

男は床の突起部分を使って必死に口を塞いだ布を外そうとしていた。長い時間もがいていたのだろう。

男の自由を奪つたロープは緩み始めていた。

「あれ……」

コナンは兵士の格好をした男の顔に見覚えがある。しかしこの世界では敵なのか味方なのか……コナンが声をかける前に平次が這つていた男の体を起こした。

「ふあつ……はあ……ありがとう服部くん。」

口を塞いだ棒切れを外された男は平次の顔を見ると安堵の表情を浮かべた。

「何があつたんか？ええと……誰やつたつけ？」
平次は本気のかワザとなのか名前を忘れた素振り。助けられた男のほうが慌ててる。

「あのね。高木です、高木。忘れないで下さいよ。」

「おおうそうやつた。でつどうしたんや？」

「ちょっとつとね。そつそれよりも……君こそこなせこんな所につ。」

まさかこんなところで遭うなんてと驚きを隠せない表情。

助けてもらつたけれど答えたくないのか話題をすりかえるように高木は言つた。

この世界でも高木と自衛団の平次とは顔見知りらしい。
緊張する現場だがコナンにとつてホッとする出会いでもあった。

「そやな……散歩の延長みたいなもんや。それより警備隊の人間が捕まつて閉じ込められてたなんて言いふらしてもええんか？」

平次は意味の通じない言い訳で話題を戻そうとする。

「それはっ・・・君たちこそ散歩だなんて言つて城の中に侵入して
るなんて知られたら困るんでしょ？」

「そりやな・・・そんじやお互に困らへんようにするしかあらへん。
・・・しゃあない。元通りにもう一度口塞いでオレ達は先を急ぐわ。」

「

平次は外したばかりのボロ雑巾を手にした。

「ちよつちよつとー！」

仕方なさそうに高木は顔を背けた。

「油断したわけじゃないけど・・・後ろから・・・後ろから何か固
いもので殴られたようで・・・。」

高木は苦笑いを浮かべながらボソボソ話し始めた。

「黙つてくれないか。恥ずかしいたらありはしない。坊やも頬
むよ・・・坊や?・・・なぜこんな小さい子供がいるんだい?」

平次の周りにいる人物はよく知っているはずなのに。
いや・・・この雰囲気はどこかで会つたことが有るような無いよう
な・・・

独特的の雰囲気を持つ少年は誰なんだろう?

高木はマジマジとその顔を覗いていた。

「僕は江戸川コナン。探偵や。」

「こいつはオレの相棒や。」

「探偵・・・ねえ?」

この世界では聞かない初めての言葉に高木は納得できないでいた。

「警備隊の高木さんが軍属の格好して城にいることも疑問なんやけ
ど?」

「それは警備について研修を受けてこいつて言わせて・・・。」

「ほんまか・・・?」

軍部と警備隊との不仲は西も東も同じこと。

研修ならば参加を許可されるが軍には極秘事項がテンコ盛り。よそ

者を自由に行動させるほど規律が緩やかではないはず。

「それじゃ今度はしつかり柱にくくりつけて先に行くわ。」

「そんなあつ。」

「ちゃんと説明してもらおうか?」

「・・・極秘の検査なんだ。だから。」

しぶしぶ答えた。

「高木さんが何かの疑いを掛けられてたら牢屋に入れられてたどろうね。

でも鍵も掛けたままで隔離されていただけでしょ。それに逃げられないように監視する人もいなかつた。

極秘に検査しているのを知った城の悪い人たちが検査を指示した黒幕を捜そうとしてるのかもしれないね。」

「そうやな。顔も割れどるし普通ならスパイ活動やと判断されたらとっくにあの世やつたやううし。」

考えられることはそれだけじゃないはず。

でも情報が欲しい。ここは強引な手法で聞き出すしかなかつた。

「うへん・・・まだ何も掴んでないのに合流する事も検査を続ける事も難しくなつたかもしねないな。」

「オレ達にも教えてくれへんか?協力するで。」

2人は示し合わせたように顔がにやけてきた。

「服部くん。まだ小さなコナンくんがいるんだ。君たちは早く城を抜け出したほうがいい。」

2人とは対照的な表情で高木は言った。

返ってきた言葉はやはり期待外れ。

現世の高木さんなら多少の検査情報を流してくれただろう。名探偵毛利小五郎と同行する小さな名探偵に信頼と期待を寄せてくれた。

しかしこの世界ではコナンもただの幼い少年にしか見てもられない。
もちろんこの世界でも自分の正体を明かすことも出来ない。
もう一度ゼロからのスタート。

「オレと坊主は運命共同体や。後戻りはせん。」

「服部くんが危険を承知のうえで忍び込んだってことは捜査の為だ
と思ってるさ。でも僕だって警備隊としての立場があるんだよ。」

高木は一人の無謀な行動に困ったように答えた。

少しの沈黙が流れた。

高木は目を伏せた。

「・・・しかしここから引くことも難しいよね。その運命共同体に
僕も入れてくれないか。」

高木は言葉を続けた。

「それじゃ。」

「今は捜査内容について話せないよ。」

僕は服部くんと仕事をしたことがある。君の真っ直ぐで強い気持ち
と推察力はすごかった。

僕は君を信じてる。しかし幼い子供がいると相手はどんな手を使つ
てくるか分からぬ。まだ知らない方がいい。

まずはここから抜け出す方法を考えよう。君も僕を信じて無茶はし
ないと約束してくれないか。」

「手ぶらで帰るわけにはいかへん。情報を仕入れるために無理はし
ても無茶はせんよ。捜査のことはあとで教えてや。」

「協力してくれるならね。」

「もちろん。・・・ところでどこまで覚えてるんや?」

平次は縛られたロープを外した。

「僕はチーフから交替を指示されて玉座の警備に向かう途中だった
んだ。」

うへん時間はどの位経つたんだろう。気がついて這い回つて1時間くらい過ぎてると思うな。」

縛られてた腕を揉み解しながら高木は言った。

「高木さんが来なければ他の警備の兵たちが気が付くでしょ？」
「ナンからもつともな話。

「警備する連中がみんなグルとか。理由をつけて研修を止めさせようとしてるのかもしねへんか。」

平次は冗談のつもりで言った。

「研修をやりたくないでも受け入れざる得ない。軍部が研修を受け入れたのは緊急事態だつてことさ。

鬼が出現してたときに城も襲撃されたと聞いてる。僕が行方不明どころの問題じやないつてことかもしねないな。」

「襲撃つて城にも鬼が出たんか？」

「いや。白い盗賊団だつて聞いたよ。」

「ああつ白い装束で現れるつちゅう噂の盗賊団か。軍がある城に現れるなんて大胆なやつちや。」

「玉座の間の警備だけど1時間毎に警備位置を交代して部屋の五つの入り口を5時間かけて一周するんだ。

一箇所に2人。つまり周りには10人の兵が立つてゐる。全員に気付かないなんて考えられないよ。」

「閉じこめた犯人の目的は何なんやろうな？」

今夜はキレイな月が昇つていた。

白い盗賊団・・・警備の厳しい城に現れるなんて大胆不敵などいざの口ソドロのよつ。

コナンにはあの男の姿しか思い浮かべられなかつた。

「高木さんを監禁した犯人は高木さんそつくりに変装してたりして。」

「そつくりなんてそんなの無理だらう。」

国立劇団の女優さんが変装したのを見たことがあるけど背の高さから声まで似せるなんてできることじゃないよ。

それに僕は城の中じやよそ者として目立つからね。普段からいろんなところでチェックされてる。

警備の兵はもちろん、城に常駐する軍部の者で知らない人はいないと思うよ。」「うん・・・」

白い盗賊団に続いて国立劇団の女優。身近にいた女優と言えば・・・。

コナンの頭にまた引っ掛るキーワードが増えた。

「考えれば切りがないで。捜査は足でが基本。推理は情報を集めてからや。急ぐで。城で何かが起こっているのは確かなんやから。」

平次は言った。

「警備体制は頭に入ってる。ここからは僕が先導しよう。」

高木を先頭に3人は地下室から抜けだした。

クリスは兵を従えて玉座の間に急いだ。

白い盗賊団・・・今回からヤツは自らを怪盗キッドと名乗った。予告状を送りつけてくるとはこの世界にもあの気障なドロボウのようないい男がいたものだ。

そう言えば組織の情報部からビッククジュエルについての興味深い噂話を聞いた事がある。

この世界のキッドが狙う玉も神のお告げを聞く以外に利用方法があるのだろうか？

ヤツは捜し出せなかつた真実を知つてゐるかも知れない。

「秘書官殿。どうかしましたか？」

「・・・いや別に。」

クリスの表情に違和感を感じたのだろう。兵に悟られるわけにはいかない。クリスは気を引き締めて玉座の間に続く最後の扉を開けた。

・・・・・

「秘書官殿も参られたか？」

玉座の間には警備を担当する部隊の隊長が部屋の周りを兵に囲ませていた。

隊長は将軍の甥っ子。戦闘に関する評価は高く裏表の無い真っ直ぐな男。

部下から信頼されているが、特に司令官は部下に甘いとその人気ぶりに嫌悪感を抱いていた。

しかしクリスにとって腹の読み合ひの必要の無い分扱いやすい男でもあった。

「警備隊長殿。状況は如何か?」

「直接予告状を見つけた兵に報告をせむ為連れてくる様指示したところだ。ん・・・・ちょっと待て貴様は誰だつ。」

隊長はクリスの後ろにいる兵を呼び止めた。

「見知らぬ顔だな。名前と所属を言え!」

「第三救援部隊、魚塚三郎准尉であります。城が急襲されたと警備の応援要請の連絡があり急遽合流しました。」

男は戸惑いながら姿勢を正し声を張つた。

「・・・確かに。了解しております。」

副長が隊長に言った。

「そうか。白い盜賊団が警備に紛れこんでるかもしねんでな。氣を悪くするなよ。貴様のようなベテランは力なるはず。馴れない仕事だらうがよろしく頼む。」

「はつ。」

隊長が去つても准尉は緊張した面持ちを崩せずにいた。

「気にするな。」

副長が准尉の肩を叩いて緊張をほぐしていた。

・・・ネズミに警戒されでは野放しにした意味が無くなる。クリスは小さなため息をついた。

玉座の間の警備を担当した組長が2人の兵を連れてきた。

「失礼します。」

丁度私が玉座の右手前の扉に移動したときに一緒にいた者が変な音が聞こえたと言い出しど、

他の警備のものと2人で玉座の間に入りました。」

敬礼を済ませた兵たちが報告を始めた。

「その間は他に警備担当部署から離れたものはいないのか？」

「どこから侵入者が現れるか分かりませんので、

部屋から外へ出る者はもちろん入る者がいないか各扉に1人は立てて警備を続けました。」

「異音を聞いたのはどっちだ？」

「その男は高木と言いまして軍の兵ではないので玉座の間には入れませんでした。」

兵たちは隊長の顔色を見て落ち着かない。

「司令官殿が軍で警備の研修させよと連れてきたあの男か。」

クリスが言つ。

余計な者を押し付けやがつてとでも思つた出来事だったのだろう隊長はしかめつ面を隠していた。

城の警備さえも軍内部で処理できないことがプライドに触つていたのだろう。

「急に風を切るような音が頭の上を通り過ぎたと言い出しまして。わたしは気が付かなくて・・・申し訳ありませんでしたっ！」

兵は説明を続けた。

「まだ終わつた訳ではない。これから行動で取り戻せ。」

「はつ！」

兵たちは隊長の戒めの言葉を直立不動で聞いた。

「侵入者を逃がさぬよう城門の警備を強化するよう要請しましょう。」

「間を割つてクリスが言った。

「秘書官殿には並外れた洞察力をお持ちだ。それは副長に司令部へ行かせてこの現場に留まつて頂きたい。」

「わかりました。お願ひします。」

「貴様等が玉座の間に入った時のように行動して見せてくれ。組長はその男も連れて来い。」

隊長はそう言つと護衛の兵を含めた7人で玉座の間に入った。

「2人で辺りを確認しながら玉座のほうにやつてきました。

国王の座を前に一礼してから近づくとあの予告状が落ちてました。

この辺りです。」

「わたしはまだ宙を舞つてゐるときに気がつきました。

慌ててこいつに言い天井を見ましたが人の気配はありませんでした。もちろん窓も全て鍵がかけられておりました。間違いありません。」

「なるほど扉には警備の兵がいる。これでは密室ではないか?神でもない限りそのようなことはできぬ。」

「その異音を聞いた男はまだ来ないのか?」

「彼は部屋に入つてないのでは?」

「予告状を一礼した時に落とすように着衣にでも引っ掛けたければ外に居ても済むことだらう。」

「そのような方法がうまくいくとは思えぬが?」

「可能性があれば残しておいた方がよい。証言によつて後で削除すればよいのだから。」

実況見分は続いていた。

地下室を抜け出した3人は城の中を進んでいた。

警備することになつていた玉座の間は3階。高木を先頭にコナン平次と続く。

高木にとつて行方不明の自分は忘れ去られてるのではないかと思えるくらい城内は静かだった。

気がつかれないよう細心の注意をして進むが通常の警備体制のまま変わつた様子は見れなかつた。

よそ者と言ひながらも現場の兵士の心は違つて見えた。

確かに口は悪いし、すぐにひっぱたくし……でも笑い、歌い、仲間として扱ってくれていた。

鬼が出現すれば恐怖を隠し直ちに向かって行かなければならぬ一線の兵士たち。

限られた時間だけでも命を賭ける仲間として扱われていると思っていたのに。

みんながグルじゃないかって言つ平次の科白が頭の中を駆け巡つていた。

「ストップ。・・・角を曲がったところに警備がたつてゐる筈だ。」

高木の言葉にその後ろにいたコナンがそつと覗いてみた。

「・・・誰もいない。」

「ほんまか？」

シンガリの平次も覗いてみた。

誰もいない・・・

「高木か？今は警備についているはずじゃ？その男は誰だ？」
いきなり後ろから来た兵に声をかけられた。

「襲われて監禁されてたところを彼に助けてもらつて。」

「こいつは何者だ？見たこと無い顔だし・・・兵ではないな。」

銃を構えた兵は二人の影に隠れた小さなコナンの存在には気がついていなかつた。

平次と高木はそれをいい事にコナンを隠し警備のいない方に隠れるよう誘導した。

「オレは服部平次。自衛団副団長や。」

「民を城にいれるなど無用心じやないか。」

「しかし彼が僕を発見してくれたんです。状況を知るもの連れて隊長に報告しなければならないでしきう。」

高木は捲くし立てたて言った。

彼が城に潜入していただなんて言えるわけが無い。

それに何があつても疑いを掛けられるのは必至。

勢いで突き通せば新たなチャンスが訪れるだろうという一心だつた。「本来なら僕は警備にあたつてゐる時間。城には何も異変は起きてませんか?」

何も問題がないと言つなら理由を説明して頂きたい。

「おつおい。問題が無いなど言つてねえぞ。警備に穴を開ければ連帶責任でぶん殴られてるさ。」

大人しい高木の勢いに押された兵は怯んでいた。

数人の足音が急ぎ足で近づいてくる。

「騒がしいぞ! チーフから指令を聞いてないのか!」

たつた今特別警備体制に入つた。待機の兵も玉座に集まり隊長の指示に従うようにな。

急げ・・・ん?・・・なぜ高木がいるんだ?」

「襲われて警備部所を離れてました。」

「なんだとつ! それじゃ向こうにいた高木は・・・?」

2人を部屋に閉じこめておけ。警備の者を1人を残して他のものは玉座の間に急げ。賊は高木に化けている。」

「閉じ込めるんですか?」

「本物の高木がどちらか分からぬだろう。それに民間人はなあさら自由に行動させられない。」

もつともな指示。

仕方なく高木と平次はその場に残らざる得なかつた。

閉じ込められた部屋は普段兵士たちが待機しているいつもの談話室。カードが散らばつた長いテーブルと丸い腰掛。

ブツブツと途切れた音がするスピーカーが壁に掛かっていた。

入り口で部屋の外で見張りに立つ兵士と高木がなにやら話をしてた。

「坊主はうまくやつてるだろうか・・・まあ、あいつが現世の工藤なら心配はいらんか。」

平次は窓から見えるキレイな月を見ながら呟いた。

「お待たせしました。」

玉座の間の7人は聞き覚えのない声を耳にした。
呼び出した男の声とは違う。

振り返ると白い影が立っていた。

「いついつの間に？」

「あの男はどうした？」

「彼なら少し休んでもらつてますよ。監視ししながら使つている割には入れ替わつていることに気が付かないものですね。」

高木と思い込んで共に警備していた兵は下を向いた。
隊長も言葉が出なかつた。

「賊が分かりましたっ！」

玉座の間の外が騒がしくなつたと思つたらいきなり扉が開けられ兵たちが雪崩れ込んできた。

「これはこれは・・・ふむ・・・もう本物が戻つてきたようですね。少々彼を見くびつてましたか。」

多くの兵に囲まれても男は信じられないくらい冷静だつた。

言葉通り計画に小さなミスがあつたとは思えないくらい落ち着いている。

「改めまして。初めまして秘書官殿。」

「貴様が怪盗キッドか。兵たちが騙されたお主の変装術を1度見てみたいものだ。」

「ありがとうございます。お褒めの言葉喜んでお受けしましょう。」

「なぜ危険を犯してまで予告状を送り届けた？」

「素敵なレディにご挨拶伺いました。秘書官殿。

予告状は何方が処理されるのか行方を見届けようと思いましたね。あなたと少し話がしたかったのですが、残念ながらもうタイムアップのようです。」

キッドは丁寧にお辞儀をした。

「何がタイムアップだ。おまえがホールドアップするんだよ。」

気障な科白に兵たちは苛立ち銃を構えた。

「ホールドアップ・・・ですか？」

キッドはポケットに入れたその手を上げようとすると何かが落ちた。

「閃光弾！？」

クリスの言葉は間に合わなかつた。

それは一瞬にして目の眩む光を放つた。

「目がつ！」

光の残像が消える頃にはキッドの姿も消えていた。

「ええい 捜せつ！城内から出られぬばず。ヤツの変装に騙されぬ様お互いを確認するんだ。」

隊長の大きな声がする。

兵たちは混乱して声が届いていない。

「・・・やられたな。」

クリスは苦笑いを浮かべた。

あの光の中で兵に変装したのである。う。

雪崩れ込んだ兵たちの人数など分かるはずもしない。玉座の間の扉は全開のまま。

これでは城内から逃げおおせるのも時間の問題だ。

ならばこの騒ぎを利用してもう一つしよう。

「IJのまま野放しには出来ぬ。司令部に行き増援を要請しよう。」

クリスは隊長に言った。

「かたじけない。よろしくお願ひする。」

「わたしは司令室に戻り態勢を整えたら玉座の間の警備に合流する。」

「了解した。城門の警備は強化されている。我々はヤツを上に追い込む。二班は副長に一班は我に続け。」

「「「おうー。」「」「」」

「氣勢を上げた兵たちは合言葉を確認すると一斉に動き出した。

「敵陣に堂々と乗り込んでくる男が合言葉程度は調べがついてるだろつこ・・・」

賊を追いかける兵たちがさらに混乱するのが目に浮かぶようだつた。

「ありがとう。状況が分からないと・・・」

「お互い様だ。殴られ損はいやだからな。」

見張りの兵から現在の状況を聞きだした高木が平次の傍に戻つてき

た。

「僕に変装して白い盗賊団が犯行予告状を届けに來たようだ。」

「軍部の人間が変装が見破れないなんて。それにしても予告状をわざわざ届けるなんて。いったい何を盗むつもりや?」

「宝玉を奪うと書いてあつたらしい。」

「そんなん神官しか扱う事が出来へんのやろ?コレクションにでもするつもりなんか?」

平次が言い終えると高木は唇に人差し指を立てた。

「君たちの年齢じゃ神からのお告げを聞く儀式が民の前で行われていたなんて見たことないだろ?」

「10年位前から非公開になつて軍部が警備にあたるようになつたんだ。」

高木は外に聞こえないよう小声で話し始めた。

「そやな。昔は軍部から鼓笛隊が参加するのみで警備隊がやつとつ

たって聞いた事あるで。

しかしそれも鬼が頻繁に出現するようになつて沢山集まる民の避難についても問題があるから非公開になつたんや。」

それに合わせて平次も声を小さくする。

「確かにそういう公式発表なんだけど・・・儀式に使われる宝玉が偽物じやないかという疑惑があるんだ。」

今回宝玉が偽物だというタレコミもあった。」

「それって極秘捜査の・・・話してもいいんか？」

「今の状況だと知っていた方がいいかも知れない。」

城内に不審な動きがあるのは薄々気が付いていたんだけど我々警備隊は城内の捜査に入れない。」

それだけ軍部の力が強くなつてしまつた。強くなりすぎたんだ。国王の威儀がどれだけ働いているかも分からぬ。」

今回は鬼の出現で軍が各地に散らばつたため、城の警備が薄くなつてしまつた。

そこで上司が軍の警備体制について勉強させるという名田で研修を打診したらしぶしぶ受け入れてくれたんだ。」

ということで僕が参加する事になつたんだけど、久しぶりに見たお告げの儀式は昔と変わつていたよ。」

「宝玉が偽物やとなると・・・言つちゃ悪いがあんた1人に荷が重いんとちやうか？」

「まだ内密に捜査してる人間もいるさ。それに研修つて名田で乗り込むのは駆け出しの僕が適任だろ。」

「なるほど。ボテツとしたあんたの相棒じやきついだらうしな。」

「ダイエットにはいいかもしけないけどね。」

「はは・・・そんじや、ここからどうやつて出ようか?」

「そうだね。賊が侵入したのにわざわざ予告状を届けて盗まないなんて気にかかる。」

「それは直接聞いてみんと分からんもんな。」

2人の口元が緩んでいると部屋の外が騒がしくなつた。

「出るつ！賊が変装を解いて城内を逃げている。直ちに一班に合流して賊を捕らえよ。」

急にドアが開きチーフが叫んだ。

「オレは一般人やろ。」

「構わん非常事態だ。協力しろ。」

「しゃあないな。」

心の中と口から出る言葉は正反対。

堂々と城の中を探し回れる。坊主の仲間の存在も。

2人は部屋を出され、言われるままに兵の後ろに続いて走つていつた。

クリスは司令室に戻り司令官と対面していた。

侵入者の知らせに司令室も緊張が走る。

賊を追いかける兵からの調査報告が逐一届けられていた。

「もう報告は受けておられるでしょうが例の盗賊団が侵入しました。司令部を占拠されでは一大事。

ヤツラは変装術にも長けてます。部屋の周りを兵で固めこの部屋に出入りを制限しましよう。

念には念を。司令官殿もご注意くださいませ。」

「君はここで補佐してくれないのか？」

司令官は明らかに落ち着いているように装つていて。

「警備体制の変更で兵を動かしたため玉座の間が手薄。神からのお告げを聞く大事な宝。わたしはそちらに向かいます。

できれば警備を増員していただきたいのですが？」

「こらんつ！・・・いや・・・警備はどこも手一杯だ。兵たちは賊

を追い込んでいるはず。現状でしのいでくれたまえ。」「

・・・ 気の弱い男。銃の腕前より風見鶏の如く頭でこの地位までやつてきた。

軍にいてスピード出世するなど功績を立てなければ難しいもの。それ相応の窮地を経験してきたであろうにこの程度の状況でボロをだす。

鬼の恐怖にさらされる民よりも権力争いしかなかつた城内の方が平和すぎたのかもしれない。

他の兵たちをどこに警備に当らせているのだろう?

予告状の通り本物の玉は別の場所にありそうだ。

この司令官が独自の思惑で隠しているとは思えない。やはりタヌキ爺（将軍）が仕組んでいるのだろう。

「では兵に開発したマシンガンを用意させよ。」

「あれをですか？」

「この部屋に侵入できる輩がそれほどいるとは思えぬ。例えやつて來たとしても蜂の巣にしてくれるわ。」

「ただいま準備させます。」「

クリスが司令室を出ると警護する兵に新兵器の準備するよう指示をした。そして賊が変装して現れるかもしないから入室を制限することを指示をした。

特に信頼できる地位の者ほど確認を簡略化されて危険だと付け加えておいた。

玉座の間に戻る途中辺りを気にしながら通り過ぎる兵の後姿を見た。ネズミもドサクサに紛れて動き出したか・・・

策を練つているとと男の声がした。

「昼間の男が現れたんだって？」「

「カルパドスか。兵どもがヤツを上に追い込んでいる。ヤツにひとつては上に引き連れていると言つたところかな。」

「空から逃げるつもりだな。兵たちとは別行動の方がいいだろ。オレはどこで待機すればよいか?」

「西の塔に誘い込んでいるのだろう。おまえは東の塔で待機してくれぬか。」

「東の塔から西の塔だと距離がある。さすがに俺でも打ち落とすのは難しい。」

「ヤツには聞きたいことがある。今回はこの騒ぎを收拾する為に追い払うだけでいい。ここは堪えてくれ。」

「くつ・・・了解。」

カルパドスは銃を手に階段を上がって行つた。

それだけじゃない。

兵の中に地ノ獄の使者が混ざつている。行人のカルパドスと使者を接触させないためにもその方がいい。しかしスナイパーとしてのプライドが邪魔しないだろうか。指示に従つてくれるよう願いながらクリスはその背中を見送つた。

城内は賊を捕らえるため、5人の兵で1組になつてグループで搜索を始めた。

一般人の平次も副長に指示され高木と見知らぬ3人の兵士と城内を搜索していた。

城の廊下にずらつと並ぶ部屋の扉。

先頭の平次が賊が潜んでいるかもしれない扉を開ける。

賊が撃つたら1番危険な役目を押し付けられていた。

その横に高木が並び、兵たちはその後ろに控えていた。

信用しろっていうのは無理な相談なのか・・・

後ろの兵は平次と高木の背中に銃口を向けている。

賊は一度高木に変装した。また同じ手を使うとは思えない。

しかし裏の裏は表。同じ手には騙されないと兵たちは疑いを解かなかつた。

平次が最初に部屋の中を調べられることはプラスの要素もあった。張り詰めた緊張が続き兵たちはナカナカ自分達から部屋に入ろうとはしなかつた。

誰にも邪魔されず高木と2人で室内を物色することができる。

どうせ搜索を指示された部屋に坊主の仲間がいることはないだろ？

しかし手掛かりがあれば間違いないこの手に触れることが出来る。

そして緊急事態は何が起こるかわからない。

少女を非難させるなどの指令があるかもしれない。

その少女が科人となれば危険は計り知れない。

危険な指令ほど平次が使われる可能性が高い。

今はそう割り切るしかない。

「一田隊に戻るぞ。」

後ろから兵の声がした。

異常がなくてホッとしたのか3人の兵は先を急ぐ。

「まったく肝つ玉が据わっておらんな。」

平次は怒りを通り越して呆れていた。

「服部くん。・・・コナンくんは大丈夫かな?」
隣を歩く高木が不安そうに声をかけた。

「アソシはオレの相棒。心配あらへん。」

平次は安心させるよう笑みをつくつて言つた。

「彼はまだ小さな子供だよ。」

「山椒もピリりと辛いってな。」

平次はやはり同じような反応をした。

「・・・ごめん。」

はっと気が付いた高木は下を向いた。

しつこく言い過ぎた。彼の心の中はその表情と裏腹。彼が心配して
いないわけがない。

「早よう賊が見つかるとええな。」

「そうだね。・・・きみは部屋を回つて何か見つけたかい?」

「いや、今のところおかしい所はあらへんな。」

「どこに隠れているんだろう?..」

「運命共同体・・・その言葉に一言はないな?」

「あつああ。一言はないさ。」

「坊主はもちろん、城に連れ去られた少女も捜しとるんや。協力して
てくれるやろ。」

「それは・・・協力するよ。しかしどんな事情があるのか教えてく
れないと?」

高木は質問した。

誘拐なら警備隊の仕事。城の中で捜査権がなくても自分の正義は曲

げたくない。

「『ひりつ遅れるな！何コソコソ話してるんだつ！』

先を急いでいた兵が急に振り返った。

「いや城の中はこんな広いのにトイレは少ないんやなつてね。」
平次はすらすらと言い訳を作る。

「こんなときにらクダラナイことを。」

兵士は呆れて歩き始めた。

「話せば長い話やから。後でな。頼んだで。」

「ああ。」

・・・・・・・・・・

隊に戻ると副長とクリス秘書官と話していた。

「先程の救護班から派遣された男もそつちで城内の捜索に入れてないか？」

「魚塚とか言つたベテランなら少し前にもう一人の兵と玉座の間の警備に戻しましたが。」

副長が説明していた。

「こつちには戻つてない。」

「えつ戻つていない！？」

「司令部から戻つて警備の報告を受けた。」

「國家の警護、神官の警護、そして城門と司令部の警備の強化に取られこつちの警備に数が足りんのだ。」

「残念ながら司令官殿には増員は断られ、恥ずかしながらわたし自ら問い合わせに来るしかない始末。」

「ここから玉座の間は階段を降りるだけ。本日付で派遣されたとは言え道を間違うことはないだろつ。」

「隊長が歩み寄つて言葉を挟んだ。」

「まさか・・・」

いやなイメージが頭を駆け巡った。

「隊長つ・・・兵が殺されました。」

高木に変装したキッドと警備していた兵を含む組が急いで報告した。
・・・不安敵中。

魚塚と同行した男の遺体を捜索した部屋から見つかったのだ。

「非常事態に油断していたとは思えん。賊は何人いるんだ?」

クリスが言う。

「あの白装束に意識を持つていかれてたかもしません。何人もの賊が軍服を着て紛れていたら・・・」

副長が下を向きながら言った。

「このことはここにいない探索中の兵どもにも話したのか?」

「いえ。わたしはあの変装を見破れなかつたので直接隊長に。知つてているのは一緒に捜索したメンバーのみでまだ誰にも。

遺体は部屋に残したままです。手厚く弔つてあげたいのですが今は非常時。」

「そうか。それは間違いないな。すると賊はまだ魚塚に化けている可能性があるな。」

「魚塚・・・応援で合流したあの男ですか?」

ならば副官の指示で行動しているところの下の廊下で会いました。」

兵士は言った。

「本当か!」

「城門の警備は万全だ。賊は門から外にはでられない。」

クリスは言う。

「上に行くと見せかけて下から逃げようとしてたのか・・・しかしここに我々が待機しているのを知つていいはずだな。」

「・・・閉じ込められた賊が考えるとしたら・・・混乱を起こすために情報操作。」

クリスが呟いた。

「なるほど脱出経路を作るのはその手が考えられますね。すると狙いは司令部。」

「よしつわたしが行け。」

隊長が言つた。

「隊長自らですか？賊討伐の大将が動くのははつ」

「司令部を占拠されてはならない。しかし状況は刻々と変化するだろつ。

状況を把握することが先だが報告から指示を待つ余裕がないかもしない。

大人数で動くと賊に察知されるだろう。

わたしを含めた小人数で動く。副長はひそかに兵を集結させわたしの一斉攻撃命令に備えよ。」

「はつ！」

副長は敬礼をした。

「キャンティはいるか？」

「やつとアタイの出番？」

部屋の壁に寄りかかっていた女兵士が歩み寄つてきた。

「おいつその口の聞き方は隊長に無礼だぞ。」

副官が急いで女兵士の前に立つた。

「かまわん。おまえの腕に期待してる。上から逃亡を企てる賊を仕留める。いいな。」

「OK。あたしのスコープに捕らえられたら死あるのみか。」

自信たっぷりの女は愛用のスコープを覗いて見せた。

「頼んだわよ。キャンティ。」

「クリスつ邪魔しないでよね。スコープに割り込んだらあんたでも撃つよ。」

クリスの声に女兵士のテンションが激高する。

「おいつ秘書官殿にまで。」

副官がまたたしなめた。

軍部は縦社会。生意気なキャラを多少の多めに見られていてもソウ

ソウ許されることではない。

キャンティは大人しく下がつた。

愛用のライフルにスコープをセットし隊長に敬礼をした。

「Good Luck.」

クリスが言葉を送る。

キャンティは舌打ちで返し兵を連れ出て行つた。

「すまない。あいつの腕は確かなんだが。」

隊長はクリスに気を使って謝つた。

「気にしていないわ。女同士はいろいろあるのよ。」

クリスは笑みを見せた。しかしその目は冷たかつた。

・・・・・

「危なそうなやつちやな。」

その光景を離れて見てた平次は高木に言つた。

「ああ。彼女は腕利きのスナイパー。そのうえ早撃ちの達人なんだ。科人でさえ術を使う暇を与えないだろうと言つ評判だ。

だいぶ隊長に目を掛けて貰つていて、周囲も扱いに手を焼いてるようだよ。

それに女性や子供でさえ容赦はしない。賊もスコープに捕らえたら最後だらうな。」「そうなんか。でも自分勝手なヤツの自信は命取りになるで。そやつ何でこのフロアに兵が集められるスペースがあるのやろか?」「このフロアは城が攻められた時の国王を守る最後の戦場になるんだってや。」「しかしここまで城に侵入されたら守りきれんやろ。」「そうなつたら最後の最後だね。」

高木の答えに平次はため息をついた。

「こじが最後の戦場になるとは国王を逃がすための罠と言つての意味だらう。

このどこかにフロアを縦断する隠し通路があるのだろう。

まだ坊主が見つかったと言つ報告もない。

これだけ兵士が捜しても坊主の姿を見つけられないのは、その通路を見付け出したのかもしれない。

しかし問題はその出口。

オレ達は地下通路から進入して来た。坊主が下に向かう筈はない。兵に囲まれたら上からでは逃げられない。

さらに危なそうなスナイパーが向かっている。いざとなつたらどうやって脱出経路を作るか。平次はこつそりとフロアを探索することにした。

・・・・・・・・

隊長は部隊の猛者に司令室のあるフロアまで別々に集まるように指示した。

「ではわたしはこれで。」

「必ず賊は討つ。吉報を待つてくれ。」

隊長は自身満々の顔でクリスに警備に戻るよう促した。

クリスは階段を降りて行つた。

しかし玉座の間には戻らない。

クリスは辺りに人がいないことを確認すると先程と同じように右手を左腕にあてた。

科人の紋章に意識を集中させる。

すると一瞬にして魚塚三郎准尉に変わつていた。

科人の術は時間を操ること。変装術に長けている科人ならば一瞬に変装を完了させてしまう。

「・・・変装は白い彼だけのものじゃないのよ。」

集められた兵たちより先に司令部へと急いだ。

「・・・賊は見当たらないな。」

「ああ、じじじじゃねえみてえだ。・・・あの気障野郎め。今度逢つたらあの口を2度と使えなくしてやるつー！」

兵たちは賊と接触しなくてホツとしたのか急に強気な言葉を吐いて部屋のドアを閉めた。

ここは玉座の間から2つ上のフロアにある大広間の隣にある控え室。先代の国王の妃様の肖像画が飾られ、格調高い暖炉の前にゆつたりとしたソファーが向かい合つていた。

誰が部屋のドアを開けるか？誰が1番最初に中に入るか？

モメタ末に調査を始めた部屋の中でも兵たち5人が寄り添いビクビクしながらソファーの周りを一周しただけ。

しつかりと調べず、そそくせどドアを閉め出でていった。

「・・・見つからなかつたか。」

暖炉の中に隠れていたコナンは安堵のため息をついた。
しかしうつくりもしてられない。

ホコリを叩くと部屋のドアに耳をあてて廊下の様子を確認した。

兵たちの会話の意味は理解している。

今まで聞いた会話を繋げてみると賊は高木さんに化けていた侵入者。
・・・銃を手にした兵士が恐れる賊はどんなヤツなのだろう?
しかし玉を盗みに来たドロボウには興味はない。

今は城のどこかに捕らえられているだろう灰原を捜し出さなくては。

ドアの向こうの話し声が遠ざかってゆく。

隙間から兵士が廊下の角を曲がったのを見届けると、急いで廊下に

飛び出し隣の部屋のドアをゆっくりと開けた。

ここも人の気配は無い。

慎重にドアを開け中に入ると廊下の状況を確認しながら静かにドアを閉めた。

服部たちと別れたコナンは入り組んだ城の造りは迷路。

困惑しながらも一人で城の中を調べまわっていた。

兵士が集まつて騒いでいた玉座の間をうまくすり抜け、辿り着いたこのフロアもたくさんある部屋が並んでる。

そちらにフロアに接続するたくさんの階段の上から下から部屋の中からも兵士の声や足音が聞こえてくる。

さすがのコナンも身動きが取りづらくなつていた。

それでも慎重に探索を進め、やつとこのフロア最後のドアを開けた。

部屋は物置代わりに使われているのだろう。

部屋の奥から幾卓かのテーブルやイスが隙間無く並べられていた。

この部屋は兵たちによって調べられた後なのだろう。

窓から差し込む月明かりは長い間放置された備品たちから舞い上がつたホコリも照らしていた。

「隊長が上のフロアで報告を待つていてる。早く報告してしらみつぶしに調べていかないと。」

「ああ、あの男に城の中をウロウロされでは腹が立つ。でもよ。階段を登つたり降りたりオレはもう脚が張つてるぜ。」

「階段がこれだけあるとキツイよな。

変装術の使い手だからって俺たち兵士同士が何度もかち合つよつて回つて捜索するなんてな。増員は無理なのかな?」

「だろうな。報告の内容も七掛けにして判断しているつていう噂だぜ。俺たち現場の声は大げさだつて言つてたらしい。

あの司令官はキャリア組。現場を知らないし視察さえイヤイヤだつてと聞くしな。いくら秘書官が言つても難しいのかもしないな。忍び込んでいた部屋の前ですれ違つた兵士たちの会話が聞こえてきた。

「ツシユン・・・上のフロアにも兵士が集まつているのか・・・それにも・・・ゴホゴホ・・・」

舞つているホコリを吸い込んだコナンは彼らが通り過ぎるまで必死にガマンしていた。

新鮮な空気を取り入れるため窓を開けると城の中庭が見えた。

これだけ捜してもまだ4階。上方を見ると窓が小さく見えた。

「かなりの部屋が残つてゐるな。このままじや朝になつちまうぜ。」

時間は待つてはくれない。

上のフロアには兵士達が集まつてゐる。しかし進まなくてちやならない。

焦るな・・・

もう一度城の全景を思い浮かべ考えてみた。

高木から城の全貌を簡単に説明してはもうつてゐる。

中庭を囲んだ巨大な四角い建物の四隅に塔が天を指して伸びていると聞く。

現世から飛ばされた灰原は科人。それを知つてのことならば人の目につかないところに幽閉するだつ。

人の目に付かないと言えば1番最初に思いつくのは地下室。しかし地下室は服部と見て廻つた。

そして目に付く最上階の塔。

城の全景が見渡せる場所に見張りがいて当然の場所。
しかも普段から誰もが通る場所ではない。

調べに登つてゆくしかないが兵に見つかれば逃げる場所はない。
しかも塔は4箇所ある。

身につけている物に武器になりそうなものはない。

例え剣のような物を持っていたとしても使いこなせないのは京都の事件で分かっている。

できる限り兵と鉢合わせになることなく進まなくてはならない。

さらに隠し部屋もあるだろう。

しかし人目につかないといえども恐れている科人に警備をつけていないとは思えない。

必ず最低限の見張りはついている筈。

賊の騒ぎでも彼らは持ち場を離れるはないだろ？

同じように国王家の寝室や財宝を入れた金庫室等のような部屋も兵たちも警備を解くことはない。

外からの判断はかなり難しい。

オレは何か感じていなかつたか？何か見落としていないか？

窓から入るひんやりとした空気がオーバーヒート氣味の頭を冷やす。月明かりを見ているとふと気が付いた。

下から見て遠くなるほど窓が小さく見えるのだが窓自身が小さくなつてないかな？

1つ上のフロアの窓のサンの数が少なく思える。すると窓の作りが違う。部屋の作りが違うのだろう。

さらに視線を上げると決定的なモノひとつ。

もしや・・・

コナンは廊下をすり抜け、前に確認した部屋に急いだ。

窓から城の屋根に煙突が見えた。

あの下は大広間。格調高い暖炉にはマキがくべてあった。

しかしその隣の部屋の暖炉の煙突がない。

さつき隠れたとき感じたもの。それは・・・

コナンは急いでその冷たい石の囲いに頭を入れた。

ここで服についたホコリを叩いた。しかし服やその叩いた手は黒く汚れることはなかつた。

やつぱりススを被つていない・・・そしてりつぱな蜘蛛の巣。ここは使われていない・・・

捜していたもうひとつ可能性。

それは上層部しか知らない抜け道。

阿笠博士から聞いた緊急脱出用のドックに続く地下道を使って城に侵入した。

いざと言つ時に使う避難経路が城の中に隠されていてもおかしくなかつた。

積み上げられた石の隙間に手を掛けようにもきつちりと積み上げられ余裕は無い。

コナンは壁面に足を伸ばし背中をくつ付け、躰を突つ張つて通気口をゆつくりよじ登つた。

壁と同化していた蛾が一斉の飛び立つ。

暗闇の中、小さな吐息の周りに羽音をたて怪しく踊つていた。しばらくすると頭に鈍い音。

上には行き止まり。そして横穴があつた。

「見つけたぜ。」

さてどこに出られるのか？王の寝室かそれとも・・・

コナンは暗い通路を空気の流れる方向に進んだ。

大人が通るように作られているため幼児化した体には余裕があつた。

しばらくすると行き止まり。しかし隙間から石の向こうの方が明るいのが分かる。そして空気が流れている。

音はない。誰かいたら・・・

コナンは慎重に石の板を押した。

ゴーパー・・・ゴーパー・・・ゴー・・・

一旦止めて様子を伺う。室内ではない。

この向こう側は外。テラスのようない部分なのだろうか。兵士たちの話し声も足音もない。

さらに石を押す。

「うわっ。」

石が重みで落ちた。

「やべっ。」

一瞬コナンが手を伸ばすと石は宙で落ちるのをやめた。科人の術。自分で使用する機会を制御できないのだろうか？ 命を削つて使うならその方法を見つけなければならない。石はコナンの意志によってゆっくりと地面に降りた。

人の気配はなかった。

コナンは辺りを見回しながら通路から這い出た。

月の位置からしてここは東の塔の下の踊り場あたり

「子供の寝る時間は過ぎてるんじゃないのか？」

「・・・しまつたつ。」

気配に気付かなかつた。しかしこの声に聞き覚えがある。

「キッドつー？」

ゆっくりと振り返つたそこに白い影がいた。

「まう・・・その名を知つてゐるとはね。」

月を背にした白い影はゆっくり近づいてきた。

「ナンが身構えると歩みを止めた。

「まだ力を操れないじゃないのかい？」

「・・・」

「こいつは石版を浮かしたといひを見ていたのか。
もつ正体がばれている。

「科人の少年に興味があつても戦つ氣はないさ。」

キッドは手を広げその意を示した。

「何か盗んだのか？」

この顔を見るとそう思つてしまつ。

「いや。今日は予告状を届けにね。ただ厚いもてなしに断りきれなくてね。」

素直に答えた彼の後ろであのひの窓に浮かぶ灯りが兵たちの影を映していた。

「盗まれるとと思うとやたら厳重に警備するらしい。あれじゃビルに隠してあるか教えてるようなものだな。」

城の中においては警備の状況は把握できないが城の外から見れば灯りの様子で一目瞭然。

「おまえがいることは知つてゐんだらう。罷・・・とは考へないのか？」

「もてなしてくれた相手次第だらう。」

「これからまた行くのか？」

「いや、今夜は終わり。坊主は何をしてるんだ？」

「人捜しさ。」

「警備の田を盗んで城を駆けずり回つて・・・彼女でも捜してゐるのか？このオマセさん。」

「そんなんじやねえよ。」

「ふうん。お互に追われる身。坊主のジユリエット捜しに付き合つてもいいぜ。」

「オレの名は江戸川コナン、探偵さ。ロミオじやねえよ。」

「へえ～「ナン」というのか。面白い名前だな。」

「悪かつたなつ。」

「親のつけた名前をけなしたつもりはない。一度聞いたら忘れないと思つただけや。」

なんならオレの名付け親も紹介しようか?」

キッドはこの世界のキッド。同じ科人ならばオレの本名を知つていいるはず。

「モノクルで素顔を隠したコソドロさんの名付け親に逢わせてもらえるのかい。面白いじゃねえか。」

「赤みのかかった茶色い髪は坊主の好みじゃないかな?」

「名付け親つて・・・」

「囚われの科人の少女。興味深いだろ?」

「ああ・・・ん? その口癖は・・・。」

「氣にするな。」

キッドはコナンを連れて階段を上つていった。

「ここから先は予定外の行動。オレは西の塔に向かつつもりだったのでね。」

兵がいるかもしれないから氣を抜くなよ。」

キッドはコナンに背を向け歩き出した。

両手をポケットに入れて先を歩くその振る舞いに隙がない。

コナンの正体。科人と知つてゐるだけに当然のことだろ?」

そして灰原のところに連れていってくれるといつ。

彼も追われてゐる身。ゆっくり寄り道することに意味があるのだろうか?

白い怪盗は何を考えているのだろう?

何を狙つてゐるのだろうか?

コナンが考えながらついてゆくと一字路でキッドが立ち止まつた。

2人が歩いてきたテラスからの通路の先には塔の屋上に続く階段。その手前に下からの階段からの通路と合流してゐる。

「おでました。」

キッドは胸元からトランプ銃を抜き出した。

コナンは武器になるようなものは持っていない。防御する盾もない。人が人を殺す事は理解が出来なかろうと接触は避けられない。

現世のキッドは殺しはしなかつたがこの男はどうなのか？

近づいてくる足音に緊張が高まるばかりだった。

隊長が自ら銃の点検し始めると集結した兵士たちは浮き足立つていた。

その銃は普段腰に収められている物とは違い、数々の逸話を残すスナイパーの愛銃だったと聞く。

窮地に追い込まれながらも怪我を負った仲間を救出し盜賊団を蹴散らしたという語り継がれる伝説を作り上げた相棒でもある。あの銃はいくら名手でも重くてクセがありなかなか使いこなせない。しかしその精度は高く、どんなに離れていてもターゲットに収めた通りに撃ち抜き奇跡を起こしてきた。

伝家の宝刀と言つてもいいその銃を手にした隊長の顔はにこやかに変わつていく。

返つてその方が恐ろしく見える。

「静まれ！命令が下されるまで待機だ。今のうちに貴様等も銃の点検を済ませよ。」

副官の指示が飛ぶ。

それでも兵士が集まつた広間はヒソヒソ話は止まなかつた。

一人二つそりと抜け出し捜索を始めた平次はフロアを歩き回つていた。

捜索を続けている「ナン」と合流することもある。彼の仲間を捜すこともある。

しかしこれだけの兵が賊を捜して歩いて歩き回つて見つからないとなると・・・

あいつは隠し通路でもみつけたんとちやうやうか？

まずは自ら捜索していないフロアをしらみつぶしに調べるしかあらへん。

もしかしたら賊もその通路を使っていたかもしれへん。

坊主は大丈夫やろか。急がなくちゃ・・・

賊といえば兵たちが殺人に気がつかなかつたのはなぜやろつ?

殺人現場はこの上のフロア。男の目撃証言はこの下のフロア。フロアに捜索中の兵士がうろうろしてようとも隊に合流して間もないベテランが極秘任務と言えば信じてしまうだろう。

しかし殺人まで計画的だったとは考えられん。

玉座の間から消えた賊を当ても無く兵士たちが捜しに飛び出した。しかし人が消えるはずは無い。

わざわざ田立つ高木さんに変装してまで予告状を届けたのが目的ならば、

また変装して隊の中にいるかもしれないと疑心暗鬼にさせて逃げる機会を作る計画なのやろつ。

それなのに・・・殺人をしなければ逃げられない状況にあつたのやろか?

いや・・・遺体を隠さずに変装した姿を見せるのは大胆な計画といふより不用意な行動。

まだ平次の勘でしかないが賊と殺人者は別のような気がした。

緊急事態のため殺人現場はそのまま残されているはず。

調べれば高木さんの係わる捜査の手がかりが見つかるかもしれへんな。

平次が歩いていると冷たい目をした男がいた。

先程の女性と同じスナイパーなのだろうか?

軍服ではなく黒いロングコートを羽織りつていた。その裾から銃の先が見え隠れする。

その醸しだす異様なオーラは戦場を感じさせる強烈な緊張感を押し付けてきた。

「・・・」

「あつ・・・いやトイレを探してん。」

平次は何も話さない男の雰囲気に飲まれていた。

「・・・」

男の視線から突き刺すように身体を突き抜ける。

「ああ見つかった。すまんのう。」

平次は仕方なくトイレの方に歩いていった。

・・・・・・・・

その頃一階では先鋭部隊が揃い隊長からの命令が伝えられた。

「皆を集めたのは他でもない。賊が10年前のあの男ではないかといふ疑念がある。我々はヤツを捕らえ葬り去る。」

隊長が話し始めた。

「10年前と言えば・・あの男は死んだのではないですか?」

「ヤツの遺体は見つかっていない。

あの装束といい予告状を届ける手口といい共通点が多い。
しかし模倣しているとも限らない。捕らえればはつきりするだらうがな。」

その男の話は軍の誰もが聞いたことがあること。

現在の将軍が大佐の頃に直属の部隊に指令を出していた事件。その部隊に隊長はいた。

未だ詳しいことは公開されていないが十年くらい前に国王の行った儀式にクレームを着けたと言われている。

当時は国王にたてついた極悪人として國中の話題をさらつたが、男が姿を消してから時間が経ちすぎた。

言われるまで誰もの記憶から消え去っていた。

「見つからなかつたのは国王の祈りを神が受け入れ迷宮に葬つたと聞いておりますが？」

「そうだつ。神官の調査での男はこの世界に初めて現れた科人だとか言つておつたな。」

「確かに科人が相手となると術を使いますからな我々先鋭部隊の出番となつたわけですね。」

でも・・・本当に同じ人物ならば偉大なる国王の術を破つたことになる。そんなこと考えたくは無い。」

「科人が相手なら不足はない。我々の腕の見せ所じゃないか。」

先鋭の兵士たちも動搖を隠せない。

「王を崇める気持ちは分かるが、鬼が出没する今となつてはその目で事実を確認しなくてはならん。」

ヤツが例の男ならば以前も協力者の影がちらついていたから1人は限らんぞ。」

もちろん模倣していても同じこと。気を抜くなよ。」

「はつ。」

集められた先鋭部隊の皆は頷いた。

「賊が司令部に向かつているのを目撃と報告がありました。」

伝令から状況を聞いた兵が言つた。

「やはり秘書官の読み通りか。司令部の警備は万全か？」

隊長はため息をついた。

「はい。それが妙なんです。」

司令部よりこちらの警備は万全だ。周りに兵を並べ厳重に警戒していましたが我々には戻るよう指示が出てるの一点張りでして。」

司令部と連絡を取つた兵が言つた。

「まったく実戦経験も大した事無いのにプライドだけは高いのかつ。」

「

1人は吐き捨てるように言つた。

「あの司令官のことござとなればすぐに心変わりするぞ。しかしあの男が他の誰かと接触したという報告はないが、城の中を自由に行動できるとはどんな完璧な下調べをしていたとしても信じられない。」

城内に手招きしている者がいるのでは？」

「共犯者は追い詰めれば炙り出せるさ。」

それよりも現状打破だ。窮鼠ネコをかむと言つだらう。

例の男は人の命は取らないと言っていたが追い詰められ殺しまで犯した。

こうなればたとえ一人になつても玉碎覚悟で司令部を襲撃するだろう。」

「司令部を占拠されたら城の伝達経路がすべてヤツの手に落ちる。軍はバラバラにされば賊の思つまま急がないとならぬな。」

「先鋒部隊の腕の見せ所だな。副官に状況を見ながら行動するよう指示を出してある。存分に暴れてくれ。」

隊長が言った。

「ヤツの仲間が城外からの侵入を企てても秘書官が警備を強化している。」

我々は司令部を占拠される前にヤツを確保する。最悪の場合ヤツが口が聞けなくともよい。いいな。」

「了解であります。」

兵たちは司令部に向かつて移動を開始した。

・・・・・

テラスから塔に向かうコナンたちは兵たちの足音を聞いた。

「来たな。」

聞こえる足音は十人も居ないだろう。

だからといって一戦交わう余裕などはない。

それにコナン達の方が不法侵入者。彼らはその職務を全うしているだけでは罪はない。

「それでは。」

キッドは廊下に飾られている花瓶を撃ち抜いた。中に仕込まれていた油が流れ出す。

「うわっ！」

階段を駆け上ってきた兵が足を滑らせた。

後に続いた兵士を巻き添えにして転がり落ちた。

本当に彼にとつて予定外の行動なのだろうか？

「時間を稼いだまでだ。先を急ごうか口ミオくん。」

コナンは笑みを浮かべた。どの世界にいてもキッドはキッド。人を喰つたような手を用意している。

「ああ。」

コナンは後ろを走った。

しかし追いかける足音が無くなることはない。

別の階段を使って追つ手が迫っていた。

「まずいな。」

「その部屋に入るぞ。」

コナンはキッドに言われるがまま入つていった。

「こには・・・？」

「備品倉庫さ。」

この部屋にはテラスに使うテッキチェアーやパラソルが置いてあつた。

まるでアウトドアのショッピングのような品揃え。

「このガラス板は・・・この鉄骨に繋げて温室でもを作るのか。」

「科人の坊やは知らないだろう。黄泉の国は陽の光が弱い。

行人の現れるあの大地はもう痩せこけて草木が生えてこないのさ。生きるもの誰もが光に当たることを欲しているんだ。それが一番の

療養とされている。

「そうなのか。」

コナンが見てきたベイカの街は活気があふれ人々の声が溢れていた。牛車で青々とした野菜や果物が運び込まれていたのを見ている。

ではあれはどこから運ばれてくるのだろうか？

ハデス神はブルトンとも呼ばれている。それは富の象徴。それなのに住人は・・・

それが軍の存在理由なのかもしれない。

「その陽さえも拒まなくてはならない存在が行人。黒マントを頭から被り判決が決まるのを待つ。

それが神の決めた事だから彼らは受け入れている。そしてこの世界の住人も彼らを受け入れ送り出している。

しかし鬼が現れてその神の決めた連鎖が崩れた。誰が壊したのか神は何も暗示しない。

連鎖が崩した者が自覚しているからだと言っているようなものだ。ならばそれを元に戻すのも人の力でやるしかない。」

「課された罪・・・おまえはドロボウなのか？」

コナンは呟いた。

「坊やが科人だから教えたままでさ。この奥に隠し扉がある。その先に塔の階段が見えるはず。」

キッドが邪魔なデッキチエアーを蹴り飛ばすとコナンはテーブルに飛び乗った。

そしてその先のかくし扉を開けた。

「先に様子を見てくれないか。」

「ああ。」

コナンが潜りこむと2人のいる部屋の扉が開いた。

「ネズミ一匹になに時間かかっているのぞ。」

兵たちを割つて1人の女兵士が出てきた。

「腕利きのスナイパーのお出ました。」

「あの声は・・・確かキャンティ?」

「コナンは現世で盗聴器で聞いた声を思い出した。

キッドは潜つているコナンが出て来るのを止めた。

「あたいのスコープにロックした獲物は逃げられないよ。」

「ほう。」

キッドはトランプ銃を撃つた。

キャンティも引き金を引いた。

しかし飛び出したカードは彼女の放つた弾丸に撃ち落された。

「お見事。しかしわたしは撃ち抜けませんよ。」

キッドはガラス板の後に立つた。

「次は心臓を撃ち抜いてもいいわよ。その方が楽になれるからね。」

「ほう。しかし仕留めそこなわれて苦しむのは耐えられませんね。外さないようここに印をつけておきましょうか。」

キッドは自分の心臓の位置に合わせてガラス板を指で叩いた。

「あたいの腕を見損なうな。」

「チャーミングな女性がそのような言葉は頂けませんよ。」

「ふふふ・・・先にその口から撃ち抜いて差し上げるわ。」

キャンティのスコープにキッドの顔がロックされた。

銃声と共にガラスが割れ飛び散つた。

ガラスが粉々に割れ埃舞う中に人影が浮かび上がった。

キッドは倒れていない。

そしてその口は弾丸を咥えていた。

ゆっくりと手を伸ばし弾丸を取るとその場に落とした。

カラーン・・・カン・・・カン・・・・・

金属音が床に転がる。

「そんな・・・。」

残りの弾丸も全てキッドに向かつて撃ち込んだ。

やはりキッドは倒れない。

そして掌から弾丸を見せると兵士に向かつて放り投げた。

「なつなんなの・・・さ・・・」

キヤンティは声にならない言葉を発した。

「弾丸まで素手でキャッチした。・・・あの男は科人だ。やばい。科人には銃なんて通用しねえんだ。」

兵士達はキヤンティを残し蜘蛛の子を散らすように消えて行つた。

・・・負けた。

キヤンティは身体の力が抜け座りこんだ。

予備の弾はジャケットの中に残つていて。

例え賊が時を『えてくれたとしても震えたこの手では詰め込むことさえもままならない。

初めての負けゲーム。

失敗は取り返せても負けは『THE END』

「・・・殺せ。スナイパーは殺し屋。他の連中のようには捕虜にはならない。生かしておいたら危険なことくらい分かるだろ? ・・・」内紛の地で捕らえた敵のスナイパーは丁寧に銃を置きそう言った。

「何か言い残す事は無いか?」

隊長は静かに言つた。

「この銃に罪は無い。引き金を引いたのは血で汚れた俺だ。なかなかの逸品だぜ。」

「私が貰い受けよう。」

「ありがとう。」

あのスナイパーは命乞いもせず嬉しそうに笑った。
煙が上がる戦場に一発の銃声が鳴り響いた。

あの日の記憶が蘇ってきた。

あのスナイパーのプロ魂など理解出来ず、負けるヤツは自分の腕を呪いなど高飛車な言葉しか思い浮かばなかつた。
引き金を引くその手が血で汚れる事は無い。だからスナイピングは命を賭けてゲームだと言い聞かせてきた。

追い込まれてゲームの恐ろしさに気が付く愚かさ。

・・・あたいはまだ死にたくない・・・

無様な姿を見せて隊に戻ることもできない。

キヤンティは目で訴えた。

「わたしは軍人ではありませんから。」

キッドが彼女を置き去りにして奥の隠し扉を潜つていった。
キヤンティはうな垂れたまま。もう軍に居場所はない。

「計つたな。」

1番近くにいたコナンは気がついていた。

「・・・一発は実弾を入れないと相手にばれてしまうからな。

残りは空砲、火薬の音だけさ。あの銃だけは実弾を抜いておいたからね。」

「銃の腕は調査済みだつたんだな。」

「ご明察。・・・元々この世界に魔法など無いのさ・・・。」

キッドの言葉には何か隠されている。

コナンはこの言葉の続きを気になつていた。

「さあ行くぜ。」

キッドはコナンの肩を叩いた。

「ああ。」

南の塔の階段は目の前。
2人はまた走り出した。

司令室に続く廊下に辺りの気配を気にする兵士がいた。
誰もいないことを確認すると近くにある機械室の扉をゆっくり開ける。

「さあどう出でぐる？」

クリスの声が微かに空気を震わせた。

しかしその声と似遣わないガタイのいい兵士の姿しかいなかつた。

兵士は部屋の壁を這つていい通信回線に繋いだ特殊な通信機のヘッドホンを耳に当てた。

「副長の隊を一手に分け玉座の間の警備に回つて頂きたい。」

回線をダイアルを合わせるキューーンというチューニング音がしたと思つとまた違う声質。

『了解した。』

受信した向こうも違和感もなく指示を承諾した。

タツタツタツ・・・

速やかに指示に従い行動を始める兵士の足音が真夜中の廊下から響いてくる。

「疑うという言葉は知らないのかしら？」

呆れたような気だるい声。

『・・・セットできないのかつ！』

通信を切り替えたヘッドホンから叫び声が聞こえる。

有線のおかげで司令室の話も仕掛けたマイクからクリアに聞こえていた。

「・・・こちらは相変わらず落ち着きが無いわね。」

クリスの声を発する口元から笑みが漏れた。

「そろそろ先鋒部隊が近くにいるはず。役者が揃つたときにわたしの舞台が始まる。」

・・・・・

「警備はどうなつていてる？」

マシンガンの点検を終え、その引き金に指を掛ながら司令官は聞いた。

「賊の情報は集まつていますが、接触したといつ報告はありません。」

情報収集していた通信班が答えた。

司令室では情報の伝達に使われていてる各回線を解放して流していた。全ての会話を傍受することで状況を確認していた。

ここは黄泉の国。城内もまだ有線しか使われていない。

特異な世界のため現世と同じようには技術革新は進んでいなかつた。

「将軍に用をかけてもらつていてるんだから早急に処理してもらわんと困るんだが。」

新兵器を前に司令官の言葉にはまだ苛立ちを隠す余裕があった。

「ここにいる兵たちも厳しい訓練を受けております。命を賭けて死守いたす所存です。」

司令官の前に立つ男が言った。

男の名は「畠沢雄三」。

裕福な家柄の出で気が優しく画家になるため勉強をしていたが父の死をキッカケに入隊した異色の男だつた。

隊長のよつに大きな実績はない彼も家柄を考慮した上層部の計らいで、

あまり前線に出ることなく若くして城内警備として十数名の部下を

率いる立場に立っていた。

「前線を経験した兵士らを信じてないわけじゃない。その大将も実戦経験が少ないながら戦術や用兵法などに長けていると評価されるようだし。

・・・貴様に任せても間違いないんだろう?」

司令官は叩き上げの戦士よりも話が通じると魅力的な家柄と関係を築きたく彼を傍に置かせていた。

しかし有事であればそんなことは関係ない。

一発の弾丸が勝敗を左右することもある。

実戦経験が少ない者に命を任せることになるなんて嫌味の一つも言いたくなる。

「軍は縦社会。上の者の指令にはYESしか答えがないのだよ。それがいやなら上の地位を手に入れることがある。隊長だと持ち上げられて上の者にも意見するヤツは縦社会を湾曲させている馬鹿者だ。

あれでは示しがつかない。誰も取り上げようとはしない。だからいつでも死と隣り合わせの指令ばかり請け負うことになる。それに答えた力は認めざる得ないが、軍とは小隊と違つて大局を考えるもの。縦の繋がりは崩しては成り立たない。

將軍直属の小隊などと司令官のわしを差し置いて將軍と直接話をするなんて物事の順序を理解しておらん。登城して普段の任務とは違うものであつても任務は重責。賊を捕まえたとしても侵入された責任はヤツに背負つてもらう。貴様も勝手な作戦や行動は慎みたまえ。経験が少ないのでだから。いな。」

「責任につきましてはわたしが物申す立場ではありません。今は賊を捕まえるのが先。その作戦の打合せをしたいと思います。聞いていて見苦しい話に嗜めるように言つた。

軍が縦社会だというのは重々理解している。

しかしその地位を手に入れるために実績以外のものを過大評価されても意味は無い。

それは富沢自身がよく解っている。

隊長も秘書官もその経験から醸し出すオーラに誰もが圧倒されるのも事実。

作戦会議でも司令官も肩書きによつて抑え付けているようなもの。その腕と頭脳が確かなことは誰もが認めていた。

秘書官とはあまり話したことはないが隊長には自分に足りないその経験談を拝聴させてもらつっていた。

部隊というよりも小人数の特殊なゲリラ小隊の方が合つていると自覚している男。

危険な仕事ばかり与えられる職場で部下とは家族のような信頼関係を築いていた。

そして出世は部下の生活に多少は必要だと考えているだけであまり興味ないことも知つていた。

そういう生き方ができる隊長を富沢は羨ましく思い、完璧に仕事をこなしてもその自由すぎると態度が軍の規律を重んじる司令官は妬ましく思つていた。

「まあいい。ここまで来て見る。賊などこの新兵器で木つ端微塵だ。

」

新しいものには目がない司令官は強力な兵器となると手元に置きたがる。

実験の段階から現場よりも城に常備させることを進言していた。誰もが必要ないと思つても直接言える筈はない。

しかしこついう状況になれば文句の言いようも無いだらう。富沢に経験がないと詰つても司令官自身戦場の経験が乏しい。力を倍増してくれる新兵器が頼もしくて仕方が無かつた。

司令官はその先見の明を鼻にかけ、マシンガンの性能を嬉しそうに通信班に説明していた。

「しかし使い慣れていない兵器はその性能を生かしきれません。しかも移動がままならない武器は城内で持て余します。」

「つるさいやつだな……貴様は早く持ち場に戻れ。その顔を見ると気分が悪くなる。」

「……警備に戻ります。」

その腹のうちを隠したまま富沢は部屋を出た。

「まったくあれでは警備隊長になめられるわけだ。彼は恵まれた環境を手にしながら使い方を知らん。」

現場でしか生きられないヤツに頭下げ続けるなんてプライドというものがいいのか。」

司令官は嫌味を1つ2つ溢しながら同意を求めたが司令部にいる通信班たちは何も答えなかつた。

・・・・・

「屋上で賊と接触。抹殺許可求めます。生け捕りならば至急心援求む。」

ヘッドホンから声が聞こえてきた。

「キャンティのところの兵ね。カルパドスより腕は落ちるけどあの子はシツコイわよ。気障な坊やはどうするのかしら。早くケリをつけてもらわないと幕が上がらないわ。」

機械室からまたクリスの声がした。

「分かりません。至急とのこと。どう返答しましょう?」

「生け捕りだ。賊の仲間を燃り出さなければならぬからな。至急秘書官の隊に回るよう指示を出せ。」

「はい。」

通信班は玉座の間に連絡を取つた。

「戦況はどうなつてますか?」

富沢が急いで司令室に戻ってきた。

「秘書官殿は玉座の間に不在です。」

連絡を取つていた者が言つ。

「おらんのか! 持ち場を離れてどこに行つたんだ! ?

「秘書官殿は隊長の指令でこちらに向かつたそうです。玉座の間は副長が一部の兵を警備に回しました。」

「どうなつてるんだ! ? 誰もそんな指令は出しておらん。」

司令官の口調は少しずつ荒くなつていった。

テラスにはどの塔にも通じる通路がある。

捕られた科人は將軍直々の極秘任務。

一度は閉じられた出世のチャンスを取り返すためには間違つても警備の兵たちに知られるわけにはいかない。

そのために秘書官を差し向ける予定だった。

「止むえん。至急副長を国王の警護にまわせ。通信班は回線を私に回して銃を取り司令室の警備に回れ。」

「・・・。」

一瞬言葉を失つた。通信班はお互いの顔を見合わせていた。

「何をぐずぐずしている。兵隊なら銃を扱えるだろ。」

司令官の苛立ちを隠せない。

「富沢隊。おまえが増援に向かえ。隊長も秘書官も必ず司令室の警備に合流する。」

「

自分に言い聞かせるようにマシンガンを構えた。

標的になる賊は命乞いなどするはずはない。銃口を当てられても最後まで抵抗するだらう。

初めての戦場の恐怖が蘇る。

あの緊張は耐えられなかつたから城の警備への移動に不満な顔をして内心喜んでいた。

弾丸が飛び交うことのない安全なこの場所で見つけ出した出世口号に乗る手段。

この場所を手放さないためにもこゝは正念場。

「いつでも來い。」

体中の力を振り絞つて言葉を吐いた。

・・・・・・・・・

「あの男にしては思い切つたじゃない。」

外したヘッドホンを近くのパイプに引っ掛けた。

「富沢隊が出すと司令室には通信班を含めても20名も残つてゐるかしら?」

ふ・・・キャストを変更しても舞台の脚本は変えられないわよ。
しかし富沢か・・・。」

クリスの声が途切れると共に扉の開ける音がした。
まるで出番を迎えた室の扉を飛び出すよつて。

「何をしている？所属と名を言え。」

富沢隊は移動する廊下で不審な男と遭遇した。

「魚塚准尉。応援要請を受け警備隊に参加しております。」

男は直立不動で答えた。

その姿に見覚えがある。

「おまえは秘書官に同行していたな。非常時の単独行動は禁止だ。何をしている？」

「言えません。極秘任務です。」

「なんだと！非常事態に何を隠す。」

富沢は銃口を向けた。

これから賊と交戦するその高揚が大胆な行動をさせた。当然男が緊張した表情を演じていたことは見抜けなかつた。

「・・・ガス使用の許可がでました。その準備に。」

少しの間をおいて男は観念したように口を開いた。

「ガスは仲間の兵たちをも巻き込む。誰の指令か・・・まさか！？」一瞬誰もが言葉を失つた。

「・・・司令官です。緊急事態に多少の犠牲は止むえんとのこと。救護部隊所属のわたしにその後被害を最小限に抑えるための処置を準備せよとの命令です。」

富沢の顔から血の気が引いた。

「司令官なら言いかねません。我々をも巻き込むつもりだったのでしょうか。」

富沢について来た兵たちも浮き足立つた。

避難の為にガスマスクを装着を指示すれば賊にとつて変装の必要も

なくなる。

逃亡を企てる賊の思うつゝま。

「わたしは準備に向かつてよろしいでしょうか?」

「当たり前だ。万が一に備え万全を以くせ。」

その言葉に男は心の中で含み笑いをしながら走つて行つた。

・・・・・・・・・・

「足音・・・10名は欠けると思いますが・・・。」

先頭を努めた者からの報告に先鋭部隊のメンバーは身構えた。

ここから司令室までは田と鼻の先。

しかし敵からの襲撃に備えて作られた入り組んだ廊下が続いている。この場所からその様子を田で伺うことは出来ない。

軍靴の音だけが近づいてくる。

「撃ちますか?」

部隊の皆は隊長に威嚇の決断を求めた。

足音たちが姿を見えた。

「あいつらは回りを見えていない。

警告してこちらの出方を見極める時間を以て止めた。即取り押さえる。」

隊長の暗号のような指で作られた合図と共に以て止めた。フォーメーションで作戦を決行する。

互角の人数ならば特殊部隊の方に分がある。

相手に考えさせる時間を以て止めた。

廊下に取り押さえられた兵に銃口が向けられた。

目の前にちらつかされた銃口に倒された兵士たちは声を殺した。

しかし唯一倒れながらも銃を抜いて銃口を向けた男が一人いた。

「貴様らの目的はなんだ！」

隊長はゆっくりとその男の前に立ち、首筋に手をあてた。いざとなると経験の違いが見えてくる。大胆不敵な賊がそこまで細やかに演じるとは思えない。

隊長は男の銃を持つ手首にもう片方の手を掛けた。

「・・・富沢。銃を下せ。」

唯一銃を手に出来た男に隊長は声をかけた。

「・・・隊長。」

「戦場では死んでたゞ。警備とはいえ油断するな。」

隊長は震えていた手について口にしなかつた。

「司令官が賊討伐にガスの使用を許可しました。」

司令室に戻つて掛け合うこともできるが増援が遅れてしまう。わたしたちは使用される前に賊を・・・。こんなに未熟なのに・・・。あの通信機が壊れてなければ意見だけでも話せたのに・・・。」

比重が重いガスが城内に漂つてしまつ。時間は待つてはくれない。

「それは誰から聞いた情報か？」

「応援要請で救護部隊から来た男が使用後の救急処置の準備に動いてました。」

こうして入られません。早くしないと賊ともども。」

「待て・・・それは魚塚三郎のことだろ。あれが変装して侵入した賊だ。」

「ヤツが賊・・・それではガスを使うといつのは・・・賊？・・・

狙いは武器庫かもしません。

ガスならば城の出入り口に兵を集めても脱出は可能じゃないですか。」

「富沢は早口で一つの仮説を説いた。」

「少し落ち着け。情報を混乱させるためとは言え計画を簡単に白状

するとは考えにくい。

あそこは普段から玉座の間のよつに警備は万全。今はさうに警備を強化している。

いくら大胆不敵と言つても武器庫を襲つなら賊が姿を現してからでは順序が違う。

それにわたしには賊の行動が腑に落ちない。

「・・・何か？」

「我々が司令室に向う。貴様は指令通り応援に行つてくれ。しかし交戦するのが目的じゃない。念のためガスの使用を止めさせ、緊急に備えて救護処置を準備しろ。」

「了解しました。」

隊長と司令官。どちらの指示を優先するのかは決まつてゐる。隊長の疑問に問い合わせなくとも富沢は兵を連れて屋上に向かつた。

・・・・・・・・

「何か引っ掛りますか？」

「10年前のあの男は殺しはしなかつた。その証の白い装束で現れたと言うのに何故なんだ？」

「隊長は玉座の間に現れた男をあの男であつて欲しいと思われているのですか？」

わたしは国王の術を信じております。

申し訳ありませんが、わたしは賊はあの男のスタイルを模倣したと考えております。」

「目の前で起きているこの状態では仕方が無いか。姿を現したあの男に例の男と同じ匂いがしたのだが。」

「匂いですか・・・わたしには分かりませんがそう言つた演出をしているでしょ。」

しかし殺しをしてからの行動はただのかく乱。昔の彼と比べて品格

を感じられません。

国王の手まで煩わした例の男に敬意を証して物真似シヨーは幕引きせましょ。」

「つ～む・・・・・。」

「賊の計画と違う何かが起こったように思われます。

逃亡経路と思われたものが上と下の全然違う方向といつのは緊急に用意されたものと考へると、

現れた男を城内に手引きした者がいるのではないでしょ。うか。・・・・・

隊長？」

隊長は富沢の言つていた通信機のボタンを押してみた。

反応は無い。今度はカバーを外してみた。

「見る。配線が繋がつていない。この配線をどこかで利用してるんだ。」

通信機には配線が取り外され、その線 자체が無い。

「この壁の向こうに点検するスペースがあるだつ。そこに賊の隠れ家があるはずだ。」

その言葉に兵が辺りを見回した。

「・・・・。」

一人が指を指すと近くにある扉を開け機械室に乗り込んだ。

「もぬけのカラでした。通信機材がありまして城内全ての回線を聞く事が出来ます。

さらに司令室も盗聴してたようです。」

すぐに調査報告が届いた。

「やはり情報操作されていたな。一瞬ごとに変わる状況下での判断力・・・物真似シヨーであつてもかなりのやり手だな。」

「ですね。では賊が言つていたガスはフェイク？

富沢大尉から必ず誰かに伝わります。嘘の中に本当の事を混ぜてるなんてことをしますか？」

「正体がばれてるのにいつまでもあの変装を解かなかつたのは、この場所に隠れて情報操作をしていたからだろつ。」

「……その通信機で構わない。武器庫と司令室に連絡を取つてくれないか？」

「通じません。……配線は外れていないのですが。」

「まわりを調べながら答えが返つて來た。」

「切られたな。ヤツも仕方なく動き出したんだよ。富沢に残した言葉は兵たちを疑心暗鬼にさせるのが目的だつたのだろう。」

「手引きした仲間に裏切りられたのかもしれませんね。」

「ここで一一手に分かれ司令室に進む。いいなつ。」

・・・・・

廊下を曲がると隊長の視線の先には司令室の扉とその手前でこの廊下に合流するもう一つの通路。

当然のようすに正面には警備兵が銃を手に立つてゐる。

通信班の者だろうか。離れて見てもギコチナイ者もいた。

「停まれつ！」

銃口を向け叫ぶその声も震えている。

「わたしだ。緊急事態のため司令官に会いたい。」

「止まれつ！誰も司令室には通す事はできません。」

「ならばわたし一人がいく。身体検査をするがいい。」

情報をかく乱され通信機での話では意味を成さないのだ。そちらでも分かつてゐるだろう。」

「だめです。それ以上近づくと撃ちますよ。」

その言葉にため息が漏れる。

確かに変装の名人を相手に離れた場所から見抜けと言つても無駄なこと。

だからと言つてこのまま時間を無駄に使うことは許されない。

分かれた組が城外を通りて合流する通路に到着した合図が送られてきた。

「隊のリーダーは誰だ。このままでは何人の兵が死ぬことになる。

」

隊長は銃を隣の兵に手渡した。

・・・・・・・・・

静まり返った空間に荒い吐息と心臓の鼓動だけが支配している。
なんともいえない重圧感。

戦場とはこういうオーラの渦がぶつかり合う場所なのだろう。
戦場の経験の無いものにとっては威圧するものは敵としか理解できないでいた。

しかし近づく隊長は銃やナイフを取り外し丸腰になろうとしている。

「威嚇射撃をしたほうがいいのでは？」

警備マニュアルにない行動に躊躇していた。
隊長の声は扉を越えて司令室にも届いていた。

「威嚇じゃない撃て！」

室内に残る司令官の叫びに兵士達は戸惑っていた。

賊ならば撃たなければやられる。

味方ならば撃つわけにはいかない。

しかし相手は近づいてくる。

そして緊張が続く彼らにはあの言葉が耳に残っている。

それはクリス書記官が残していく指示。

賊が変装して現れるかもしないから入室を制限すること。
特に信頼できる地位の者ほど確認を簡略化されて危険だということ。

信頼できる地位の者・・・それは隊長や秘書官。

普段の我々ならば確認などほとんどしないで通してしまう。このまま撃たないわけには行かない。威嚇でもいい。引き金にかかる指が緊張で動かなくなる前に。

「ここは城の警備を任せられてる重要な場所。戦場に建てた拠点の1つとは違ひ。」

その言葉が終わらないうちに一発の銃声がした。

端にいたヘルメットを深々と被った警備兵が放った弾丸が隊長の隣の兵士の体を撃ち抜いた。

兵が倒れるのが戦闘開始の合図。

恐れて萎縮していた警備兵たちは彼を咎めることもなく一斉に引き金を引いた。

周りを見ることもないまま全ての弾を目の前の敵に撃ち込む。

弾を撃ちぬくまで、いやかけた指が動く限り引き金を引き続けた。

・・・・・

銃を持つ手が震えているのだろう。

とんでもない場所で兆弾する音が聞こえる。

柱の影に隠れ前進する事さえままならない。

「大丈夫か？」

怪我をした仲間を抱いで避難する。しかし彼は一発で息の根を止められていた。

偶然の一発なのかあとの射撃は標的を見失っている。

「あいつらは何処を狙っているのかわからん。」

壁に隠れた兵が溢した。

この狭い空間では催涙弾などは使えない。

「確か消火栓があつたな。」

「なるほど。ホースを伸ばしてきます。」

「放水する前に照明を切る。無闇に撃つのを止めざるを得ないだろう。」

「了解しました。」

再度照明が灯る瞬間勢い良く水が放流された。
騒ぎの中兵士の数が1人減つていた事など誰も気が付かない。

それでも銃の引き金を引く。

しかし近くの壁や天井に兆弾するだけ。
すぐに火薬も湿り使い物にならなくなつた。

「今だ！」

号令と共に放水は停まり足音が大きくなつた。

・・・・・・・・・

「戦況は！ 戦況を伝えろ！」

声は壁を叩く大きな音に消されていった。
それでも部屋の中には兆弾する音が聞こえてくる。
それさえも次第に聞こえなくなつてきた。
制圧できたのか・・・いや軍靴が廊下を走る音とともに人の叫び声
が大きくなつてゆく。

「やられるものか！」

司令官は扉が開くのを待ち切れずマシンガンをぶつ放した。
本来なら戦場で使う固定式のマシンガンの弾丸は扉を破り壁を削り
先鋒部隊を攻め立てた。

・・・・・・・・・

「隊長、」無事で・・・。

司令官の放つた弾丸の盾となつて兵の1人が倒れた。
「死ぬなっ！」

歴戦の勇者たちは想定していなかつたその破壊力に倒れていく。使えなくなつた銃を振り回して警備を続ける兵たちさえ背中から撃たれて落ちてゆく。

「このままでは賊の消息も分からず共倒れだ・・・。」

「あの兵器の弱点はわたしが知つてゐる。援護する。」

秘書官の声がした。

「本当だらうな？」

隊長はにやりと笑つた。感じるオーラに変装などと云つ疑いはない。

「もちろん。本物だと分かる方に付いたまでだ。」

「ふつ頼んだぞ！」

「御武運を。」

その声を信じて隊長は司令室の飛び込んでいった。

秘書官の銃が何度も火を噴く。

ターゲットを捉えた弾丸がマシンガンの弾丸の補充部を撃ち抜くと弾はジャムつてしまつた。

「うつ出ない。どうしたんだつ！」

「馬鹿者っ！」

隊長が襲い掛かりマシンガンの台座から司令官と転がり落ちた。

力では勝負が付くのが早い。

しかし身に着けていたナイフを取り出し隊長の腕に刺し締められていた腕を外した。

「わたしは死にたくない。」

「わたしは死ぬわけにいかない。」

離れた瞬間ナイフを抜いた。

鬼のような形相と噴き出した鮮血を見て逃げ出した。

「司令官は城内警備の責任者。逃げることは許されないつ。」「触るなつ！」

司令官は後ずさりしながら当たり構わず手にするものを投げつけた。

「お立場を弁えて頂きたい。」

銃口を向けた秘書官も司令室に入つてきた。

「うつ撃つなつ。」

司令官は気が狂つたように叫んだ。

「牢に閉じ込めておけ。」

押さえつけていた隊長が離れて立ち上がりうつとすると銃声がした。振り返ると司令官のブーツに隠されていた小銃から煙が上がつていつた。

・・・最後の抵抗。

隊長はそのまま倒れた。

「貴様が悪いのだ。賊の侵入を許した貴様が。」

「ふざけるなつ！」

生き残つた先鋭部隊の1人が引き金を引いた。司令官もそのまま息を引き取つた。

・・・・・・・・・

そこには数人の警備兵と先鋭部隊。そして秘書官が残された。

「隊長つ！お気をしつかりとつ。」

「わたしの甘さだな。軍に身を置く者。あの男にも潔さはあると見ていた。・・・秘書官殿・・・後は頼む・・・。」

「了解した。」

秘書官の言葉にホツとしたのか隊長は息を引き取つた。

「隊長つ！・・・」

抱きかかえる兵の叫びとすすり泣く声が静まつた戦場に静かに流れていた。

「遅れですまぬ。」

「いえ・・・わたしたちが・・・。」

「少しでも開発局の情報を流しておけば作戦が立てられたのに。」

「いえ。戦場では自分の出来る事の半分しか動けやしません。例え知つても秘書官殿のように出来たかどうか。」

「

「・・・わたしの立場もない。賊を手引きした者を特定するのが遅れたからな。」

「・・・誰なんですか？」

「不審な男がいただろう。」

「・・・まさか！」

2人はマシンガンの横で倒れている遺体を見た。

「しまった。オレは聞き出すことが出来なくしてしまったのか。」「仕方が無いこと。貴様が撃たなくても誰かが撃つていた。わたしも気持ちを押し留まるのがやつとだ。」

次の機会にこの穴埋めを頼む。隊長の弔い合戦には貴様の力が必要になるからな。」

「はつ。」

「皆の者。負傷者の処置を優先しろ。遺体は手厚く頬無つてやつてくれ。」

一幕が降りた。

脚本はかなりの場所が書き換えなくてはならなかつた。
おかげで必要な男が舞台を降りてしまつた。

しかし邪魔な男には死を。

少なくとも辻褄を合わせたが脚本は修整せざる得ない。
クリスには余韻を楽しむ余裕はなかつた。

「内輪もめか？」

階段を上がるコナン達2人にも激しい銃声が聞こえた。塔を警備していた兵士も気になつて顔を見せた。

「手間が省けた。」

キッドは睡眠ガスを詰めたカプセルを投げた。警備の兵はガスを吸つて寝てしまつた。

口や鼻を塞いだ2人は急いで駆け抜けた。

「さつロミオ。行くがよい。」

頂上にあるただ1つの扉を前にキッドは胸に手をあて言つた。

「まだ言つてやがる。」

コナンは苦笑いを浮かべながらゆっくり扉を開けた。

「工藤くんつ？」

哀が振り向くと開いた扉から頬れる憎憎しい顔が現れた。

お姉ちゃんが亡くなつてから強がつて隠していた感情を解き放つた彼の顔。

一瞬だけ哀の口元が緩んだ。

「灰原・・・やっぱり灰原だつたんだな。大丈夫か？」

「・・・あなたまで・・・わたしが引き寄せてしまつたのね。」

話したいことは沢山あつた。

しかし彼の顔を見ると最初に出てくるのは捻くれた強がりか懺悔の心の2つだけ。

ホツとしたのも束の間、ベルモットの言葉が頭を過った。

「そんなんじやねえよ。」

「声を聞いたんでしょう・・・全てあの薬の所為よ。」

「さあな。罪を償えつて言つて連れてきたクセに未だ何も起こりつてないぜ。」

「・・・試されてるのよ。わたしたち。」

「試されてるなんて都合がいい言葉だぜ。とにかくこゝを出て、元の世界に戻る方法を探そう。」

「・・・行けないわ。わたし・・・。」

「何言つてるんだ?」

「お姉ちゃんが捕まつてているの。私だけ逃げるなんて。」

「明美さんはどこにいるんだ?」

「隣の部屋に監禁されてるわ。そこには窓があるわ。その額を動かしてみて。」

哀は額を指差した。

コナンは扉の外で壁に寄りかかっていたキッドと額を見合せた。この部屋が塔にあるただ一つの部屋。

「わたしにやらせてもらひますか?」

「キッド?」

何かに気が付いたキッドがコナンを制して額の前へ歩いて行く。そしてゆつくりと額を動かした。

一瞬モノクル越しの瞳が光つたように見えた。

だけだつた。

哀はコナンの顔を見た。

コナンの目は諭すように伏せた。

「お嬢さんは覗く時触れましたね。」

「(こ)に窓などありませんよ。」

そこには明美の姿どころか部屋を囲む壁と同じように石が積まれた

「ええ。」

哀はキツドの言葉に頷いた。

「やはりこの部分は御神体の欠片。科人だけが開くことができる迷宮を覗く窓になつたのです。」

「迷宮・・・御神体に触れたとき映つたあの場所が迷宮なのか?」コナンは祠にあつた御神体のことを思い出した。

「坊やも経験しましたか。わたしはそう聞いてます。迷宮の窓が開く為に科人は多くのエネルギーを使う。それに傍にいるだけで力を弱めてしまう。唯一科人が苦手にしているアイテムと言われています。

お嬢さんを監禁するためにこんな物をはめ込んだ部屋を用意しているなんて、科人が現れるのを待つっていたかのようですね。

それとも過去に・・・」

「早く見つけないと。・・・お姉ちゃんは死んだけれどこの世界では生きているの。」

哀は焦り出した。

「オカシイじゃねえか。あそこに送り込まれるのは同じ世界に同じ人間が2人も要らないということなんだろう?」

明美さんにはオレも街で逢つた。彼女は行人なんだぜ。彼女は現世で死んだんだ。

この世界で静かに判決を待つていたのに誰が何の為に迷宮に?」

「わたしも迷宮は何なのか、どこに通じているのか詳しくは分かりません。

しかし・・・なるほど行人の彼女が迷宮に送り込まれたとなると替わりが何かが現れることになりますね。

おふたりがこの世界に現れたように。」

「替わりにだと。」

「この城の秘書官はベルモットなのよ。何を企んでるのか分からないわ。」

「ベルモットだと!?なぜアイツがこの世界にいるのか?ジョディ

先生が言つてた歳を取らないといふのはもしかして?」

「わからないわ。でも薬の研究を引き継いだわたしを恨んでいるベルモットがあの薬を作れと言つてきた。」

「・・・何を考えてるんだ?」

2人は顔を見合させ沈黙した。

・・・・・・・・

スコープの中で人影が陽炎のように揺れていた。

月明かりや照明とは違いうねるような人影が闇に紛れようとしている。

「俺の目がオカシイのか?」

北の塔にいたカルパドスは目を擦つた。

しかしスコープに浮かぶ南の塔は変わらなかつた。

確實に仕留めるために指示を無視した行動は反つて標的への距離を広げた。

しかしこの距離で仕留め損なうなんてありえない。

「早く出て來い。貴様に相応しく翼を広げたまま墮してやるよ。」
固くなつた腕を回しもう一度銃を構えた。

・・・・・・・・

「気まぐれはこれくらいにして、わたしはそろそろ失礼しまじょうか。」

御神体の欠片を調べ終えたキッドが言つた。

「気まぐれじやねえんだろ?」

「まあ、どう取つてもらつても結構ですよ。」

キッドは意味深に答えた。

御神体の欠片・・・キッドがここにいる理由と何か関係があるのは

明白。

それを頭に入れといて欲しいと科人のオレに言つていいやつだった。

外から戦う男の叫び声がまだ聞こえる。

中庭の兵士も移動を始めていた。

「急がないと。オレ達もこの騒ぎが落ち着いてからでは難しいからな。怪盗さんは最後まで付き合ってくれるよな？」

「さあどうしましようか。」

キッドは言葉を濁した。

すると部屋の照明がいちだんと暗くなつた。

この城で使われている照明は阿笠博士の研究所のやうそくと違ひ白色電灯。

コナンは地上に上がつてからずつと違和感を感じていた。

「発電機でも壊れたのか？？？ そういえば発電所のようなものは見なかつたし送電線も見なかつたな。」

「送電線・・・そのような言葉はこの世界にはありませんね。城の照明はエレクトロンというエネルギーを使われてます。」

「この世界のキッドには言葉が通じなかつた。」

「Hレクトロン・・・琥珀・・・電気の語源となつたものね。」

哀は言葉の意味を推理した。

「この城の何処かにあるあの宝玉が空気中の波動をエレクトロンに変換するのです。」

但しどういうシステムで城の中に流していいのか分かりませんが、城内でしかこのような灯りは無かつたでしょ。」

「確かに・・・でもそれを奪いに来たんじゃねえのか？」

「宝玉は波動を取り込みいろんな物に変換する。神のお告げを伝え

るというのも嘘ではない。」

しかし波動は行人の身体には異常を来すものらしい。

彼らが黒マントを羽織つてるのは波動を遮断する力を持っているからだと言わわれますね。」

「波動つて電磁波のよしなものかしら～電氣に変換できるし強ければ体に悪影響を及ぼす。

携帯電話のように通話も出来る。それなら今起きているのはテリンジャー現象のようなものかもしれないわ。」

哀が仮説を立ててみた。

『上の世界のことは下の世界のことと似ている。』

コナンは阿笠博士の言葉を思い出した。

「現世にも似たものがあるのですか。この世界でも定期的に起ることです。今夜がその周期にかかるだけのこと。」

「周期？なるほどそれも計画に入っていたということか。」

「ここからどうやって抜け出すのかも準備できているんだろう？」

「計画は計画でしかありませんよ。1人で帰る予定が崩れたのですから。」

それでもキッドは自信に満ちた笑みを見せた。

「灯りも落ちたし今のうちだな。行くぜ灰原。」

コナンは哀に声をかけた。

「お姉ちゃん・・・必ず・・・。」

哀は彼女の姿を映し出した石に思いを託けた。

3人は塔の屋根に登った。

さらに上にある城の見張り台に行けば城外に飛び立つことが出来る。

「大人1人は一緒に飛べるでしょう。子供2人ならなんとか。」

足元の先に月明かりに照らされ城の全景が浮かび上がる。

哀の足は震えていた。

コナンはその腰を抱き支えながらキッドの用意しロープを受け取った。

キ
ン

屋根の何処かで弾が跳ねた。

「どこから？」

コナンたちは辺りを見回した。
しかしスナイパーの位置は把握できぬいでいた。

カルパドスは己の眼を疑つた。

「オカシイのは腕なのか？標的からかなり外れている。」

ミスを続けるわけにはいかない。

「追い払うだけでは癪に障る。」

カルパドスはスコープを覗きつづけた。

「やはりぶれる。何か得たいの知れないオーラのようなものが溢れ

ている。」

このままでは捕らえた小娘を撃ち抜いてしまつかもしれない。
しかし小娘まで逃がしてしまつたらもとのこもない。

カルパドスは一度銃を下ろし構え直した。

・・・・・

「まだスナイパーがいたか。」

「・・・しかしこの距離で外すとは考えられませんね。」

九死に一生を得た場面でもキッドは表情を変えなかつた。

彼にとつて勝算があつて計画したこと。それを読まれていたことになる。

昼間いたスナイパーは城にいなかつたはず。

潜り込むのに苦しんだ分調べは尽くしたはずなのに。

あの男は普段から身を隠しているのか？

何のために・・・

「これではむやみに飛び立てませんね。」

「ああ、どこから狙つていいのか分からねえ。」

「コナンは哀をその場に座らせた。

月明かりの下、塔の屋根の上では身を隠す場所ない。下手に動いて背を向ければそれこそ狙い撃ちされてしまう。コナンはふと不思議な力を使えないか考えていた。

あのとき大きな岩を宙に留めることが出来たあの力。

『科人の使う術は時間を操ること。己の特技に利用すれば計り知れない魔法を使うことが出来る。しかしその術は諸刃の剣。貴様の寿命をエネルギーに発するものだ。使い果たせば貴様は死ぬ。』

『ナイトバロンは科人のオレに言つていたはず。』

命が尽きるなら銃で撃たれても同じこと。コナンは覚悟していた。

「光つたつ！」

「対角線上の塔からだ。」

キイ
ン

コナンやキッドの声を発するや否や今度はコナンの右脚を削つて兆弾した。

踏ん張る力が抜け屋根から滑り落ちた。

両手が辛うじて屋根のへりを掴む・・・いや掴み損ねた。

「まずいっ。」

キッドは翼を広げコナン掛け真直ぐに落ちて行つた。

コナンは声をあげなかつた。

真下に広がるテラスが近づいてくる。

落下しながらもコナンは両手に力が満ちるのを感じていた。

「もしかして・・・キャパシタ。」

キャパシタ・・・「ンデンサとも呼ばれる電気を蓄える事や放し出す事が出来る受動素子。

武道家が気を練るが如く両掌を平行に並べる事で不思議な力を集ま

るのが分かつた。

あの御神体の所為で力が弱くなっていたのか?
落ちて離れる事によつて力が集まるのを感じた。

キッドが壁を蹴り急いで近づいてくる。
銃口が窓から顔を出しこちらを向いた。

この力を届けるためには・・・あの仮面の男の言葉を信じよう・・・
己の特技・・・それは。

コナンは集めた力をボレー・シユートの要領で塔を田掛けて撃ち込んだ。

波のような衝撃が塔に向かつて走つてゆく。
その衝撃に弾丸は天に向かつて放たれていた。

「掴まれ。」

コナンは伸ばした手を掴んだ。

しかしハングライダーの先が空を向けるのを風が邪魔をする。
体を反らうにもコナンの体重がそれを拒む。

キッドは塔の壁を蹴つてなんとか向きを変えた。

「助かつたぜ。もう少しで叩き付けられていた。」

コナンは塔を見た。

銃口は標的を捜している。

「灰原は?」

「部屋に戻つたようですね。」

これでは仕方ありません。ジュリエットの救出は後日にするしかな
いでしょう。」

高度を上げるには難しい状態。

コナンを抱えたキッドは城のテラスをかすめて空に飛び立つた。
「灰原待つてろよ。必ず・・・」

一日に3度も力を使い消耗しきつたコナンの意識は薄れていた。

哀は空を舞う白い翼をホツとして眺めていた。

彼は必ず来てくれる。

それまで・・・

・・・・・

カルパドスは銃を構え直すと標的を見失っていた。

捕られた少女も自ら塔の中に戻つて行く。

「結局、ベルモットに言われた最低限の仕事しか出来なかつたのか。

」

ため息が零れた。

これが組織で一目を置かれたのスナイパーの腕前なのか。
最初の一発をあの距離を外すなんて・・・

あの世に来た理由が身に染みて理解できた。

引き金から指を解き相棒の銃を壁に立て掛けた。

「惨めな思いをさせちまつたな。」

懺悔をしていると後ろに気配を感じた。

「見つけたぜ。」

振り向くと男がいきなりナイフで切りつけてきた。

「貴様は何者だ。」

銃を手に取り、振り回し応戦を試みた。

「甘いな。狭い部屋の接近戦。長い銃は役に立たねえぜ。」

見張りに使う望遠鏡などを倒れる。

2人は床に転がり格闘は続いた。

「行人のクセに記憶なんぞ取り戻しやがつて。捉つていうものがあるんだぜ。」

男のナイフはカルパドスの右腕を傷つけた。

その瞬間防御に使つていたライフル銃は床に落ちた。

「じゃあな。」

男は馬乗りになりナイフをカルパドスの顔辺りに振り上げた。

パシュツ！

トドメの一撃を受ける前に銃声がした。

「甘いのはどつちだ。銃は1つだけじゃねえんだよ。」

男は後ろに崩れた。

カルパドスは立ち上がり男を蹴り飛ばした。

「はあはあ・・・そんなもんをもつてたのかい・・・武器商人に転職を勧めるぜ。」

男は腰の辺りを押さえながら言った。

「死ぬのは貴様だ。」

引き金が引かれた。

銃声とともにカルパドスが倒れた。

「ウオッカ。隙を見せたら死ぬだけだ。」

「兄貴つ。」

平次が城で見かけた黒づくめの男が立っていた。

冷たく凍りつくようなその眼に睨まれたカルパドスの遺体は短銃を残し光を放ち消えていった。

「地ノ獄の掟は死をもって償うのみ。その身体さえも持てず無間地獄で彷徨うだけだ。」

仕事はひとつ済んだ。ずらかるぞ。」

「へつへい。」

ウオッカは差し伸べられた手に掴まり立ち上ると姿を消した。

・・・・・・・

コナンが目を開くと大きな黒と黄色の顔が覗き込んでいた。

「・・・ハンシン？・・・えつ・・・もう朝か・・・。」

どうやら城の外に出たようだ。

そこは洞窟に近い海岸線。

空をトワイライトに染め、朝日が飛び出す準備をしていた。

「気がついたようですね。工藤新一くん。」

ハンシンの後ろに立っていたキッドが言った。

コナンは肯定も否定もしなかった。

「彼女が工藤と呼んだときに気付きました。

ライバルと認めた男が消息をたつたのは迷宮に送り込まれたからだつたのですね。

もちろん君の正体をばらす気はありませんよ。」「安心を。」

コナンの足は丁寧に包帯が巻かれていた。

「さんきゅ・・・おまえの本当の目的はなんだ?」

彼の気まぐれの行動に怪盗を装つ彼の真意を尋ねてみたくなつた。「さあ何でしょう。わたしは怪盗。自ら話すことなどしませんよ。しかし君が工藤新一ならば謎は解くでしょう。」

十三夜に宝玉を盗みに城に現れると予告状を届けておきました。

キッドの言葉にコナンは頷いた。

「・・・会うとしたらその時かな?」

急にクダケテ話すキッドの顔は好敵手にあつた喜びが見えた。

「そうなるかもしねえな。」

コナンは答えた。

十三夜に必ず・・・無言の会話を続けた。

ガウ

ハンシンが呟えた。

「こいつが送つてくれるらしいぜ。」

「ハンシン。・・・服部はどうした?」

「服部? 城にいた関西人は空から見た限りでは見当たらなかつたな。アイツは工藤の相棒だろ。下手はしないぜ。西の国の中はしづといしな。」

それじゃまた月灯りの下で。じゃあな。」

コナンをハンシンの背に乗せるとキッドは海に向かつて飛び出した。

朝日が顔を出した。

海風に乗った白い翼は高度を上げ見えなくなつた。

東の空から陽が昇る。

それはこの黄泉の世界でも同じこと。

空を昇る陽は昨夜の騒ぎなど知らない素振り。

柔らかな光で大地や海に全ての生に闇の時間を終わりを告げた。
キッドが去った後もコナンはその場に残っていた。
一緒に城に忍び込んだ平次の帰りを待たなくては。

それもある。

しかし今はただ居るしかなかつた。

キッドの前では立ち上がり弱みを見せずに振舞う。

しかし大地を踏みしめる足はもちろんのこと、

空気の層に纏われた皮膚に至るまでダルイといふ言葉を通り越して
いる。

自分がどうやって立つているのかさえ分からぬ。

緊張の続いた所為もある。

マンガのヒーローのような不思議な力が体の中の全ての力を吸い出
した。

心地よい海風にふらつくこの身体は枯れ木にもなる。

「ありがとうハンシン。」

コナンはハンシンに抱かれ平次の帰りを待つた。

しかし陽が頂上に近づいても平次は戻らなかつた。

だからと言つて再度城に潜り込もうにも、昨日の今日では警戒も厳
しい。

自由の利かない小学生の身体のうえ1人では無謀過ぎる。

命が惜しいとかじやない。アイツの足手まといになるのが苦しい。

アイツがこの世界の服部ならマスターの筈がない。剣の腕は天下一品な
んだ。

それに高木さんもいる。警備隊の連中も潜り込んでいるだろ。力がない今は信じるしかない。

コナンは街に向かった。

今は情報を手に入れて策を練るしかない。

闇が去つた街は賑わいを取り戻した。

いや昨夜の騒ぎに街中が大騒ぎ。

まだ開いてない酒場の前でも早くも号外が話題になつていた。

コナンは風に飛ばされてきた一部拾つて見た。

『白い盗賊団が城を急襲。城内警備幹部に死者あり。城内に盗賊団に内通者の存在か！？』

見出しに驚いたコナンは一気に読み上げた。

「・・・おかしい。盗賊はキッド。やつは殺しはしない。城内に何か起きている。」

城内には灰原を拘束したベルモットがいる。

組織の仲間もいるのだろうか？

辺りから無責任な戯言が聞こえてくる。

飲んだクレの酔っ払いはどこの世界にも同じこと。

通行人は関わらないように避けて通つていた。

ハンシンに乗つていたコナンは避けるなど考えず、通る道をハンシンに委ねていた。

「久方ぶりだな。今度は盗賊に宝玉が狙われるなんてな。」

「でも今回は軍人に死人が出たんじゃ洒落にならないぜ。

それにしてても宝玉なんて盗んでも使えるのは国王様だけだろ。なんの意味があるんだろうな？」

「さあな。国王に成り代わるとか考えてるんじゃないか？」

「国王に歯向かうなんてことはこの国を統治する神にケンカを売る

よつなもんだ。命知らずのバカなんだろ。」

「そこまでおめでたいヤツじゃねえだろ。」

幹部が死んでいるんだぜ。そこまで宝玉を欲しがるなんて何か意味があるんじゃねえかって思つちまうぜ。」

「盗賊のやることに意味なんてあるのかよ。」

「宝玉って言えばしばらく神のお告げを聞くあの儀式は公開されてないな。」

「そりやあそうさ。誰だつけ・・・あの男・・・」

「ああ国王の魔法をトリックだと言つたヒゲの男だよな。」

「思い出した。あのときも大騒ぎだつたよな。そのくらいの魔法は誰にでも出来るなんて言つ出して。」

「宝玉が盗まれていてあれは偽物じゃねえかって噂になつたよな。騒ぎが起きて怪我人が出たから非公開にされちまつたけど結局あの騒ぎはなんで収まつたんだ?」

「もう昔の話さ。忘れちまつたよ。オルファの連中が動いてたんじやねえか?」

「おいおい。そんな危ねえ名前を出すんじゃねえよ。」

「そんなものはお伽話のようなホロリを被つた名前だぜ。」

「軍の連中はそう見てないかも知れねえぞ。」

確かに古い話さ。けど大騒ぎになつてる今は酔つ払いの戯言なんて見てくれねえかもしねえ。」

「ナンは興味深い単語をインプットした。

「もう一度とその言葉を口にするなよ。酒も飲めなくなりそつだ。」

「触らぬ神に祟りなしつていうしな。」

酔つ払いたちは辺りを見回しながら話していた。

酔つ払いたちに目もくれず行き交う人たちの中に立ち止まつた大きなトラに乗つた少年。

「なッ何見てんだよ。あっちに行け。」

「坊主はママに甘えてりやいいんだ。消えなつ。」

目障りな少年に口々に手を払い遠ざけようとした。

「おじさん。オルファって何なの？」

そんなことはお構いなしでコナンは聞いてみた。

「バカやろうつ！死にたくなればその言葉は2度と吐くんじゃねえぞ。」

「オレは知らねえからな。」

「酔いが覚めちまたぜ。坊主なんてほつておいて別の場所で飲み直そう。」

「いいな坊主。忘れるんだぞ。」

酔っ払い3人は急いでその場から酒ビンを持ち上げ、アルコールが回った覚束ない足で苦しそうな顔をして逃げていった。

「そこまでヤバイ言葉を言つてしまふものかな？」

コナンは大げさな態度に不思議そうに見ていた。

「軍に見つかり拘束され戻ってきたヤツはいなかつた。今ではその言葉を知る兵士も少ないと聞いているがな。」

「誰だ！？」

後ろから聞こえた声にコナンは振り向いた。

現世で見覚えのある姿。

そしてこの世界でも遠くから確認したトレーデマークの二ツト帽。

あのとき一撃で鬼を怯ませた男。

「・・・赤井秀一。」

「オレの名を知っているのか。科人の坊や。」

「・・・知つていたのか？」

「ターゲットを忘れる筈がない。」

「ターゲット・・・？」

「現世の関係は知らないが、科人を捕まえるのがオレの仕事だ。」

「オレに罪を償わせるためにか？」

「どうかな？」

そう言い残して赤井は通り過ぎた。

「捕まえないのか？」

彼の銃の腕前は知っている。

身構えることなく覚悟していたコナンは意外な行動にあっけに取られていた。

「捕まりたいのか？」

赤井は立ち止まり言った。

「そんな訳ないだろ。なぜ見逃す。」

「仕事には優先順位がある。おまえはオルファを調べるんだろ？それからでも遅くはない。」

赤井は煙草に火をつけると何も無かつたように歩き出した。

この男は鬼と遭遇してからずっとオレを見ていたかのよう。クイズのヒントを教えたような雰囲気。

調べると何が出てくるのか？

今できることは何でもさせてもらひつせ。

コナンは声にならない言葉で不思議な出会いを見送った。

・・・・・

国王の会議が終わると將軍は自室に戻りタバコの煙をくぐらせていた。

軍幹部たちが行っている後任人事選考の会議が終わり秘書官が尋ねてくるのを待っていた。

机に無造作に置かれた昨夜の詳しい報告書は風に飛ばされ床に散らばる。

それは盗賊を取り逃がした事。

司令官が盗賊一味の仲間などと軍部に負の内容が行儀良く並んでいた。

軍隊など一癖ある者の集まりでもある。

国王の信用を失った・・・いや元々腹の底では信用などしているはずはない。

その地位を守るために軍部とも親しく装つていただけだ。

担がれた手にした国王の地位。

その座を追われない程度にわたしに将軍としての司令官の任命責任などとネチネチと突ついてくるだろう。

飾り物は所詮本物の品格が備わることはない。

いつでも首を挿げ替えることは容易いこと。

国王の権力は気になる問題ではない。

終わったばかりの国王の会議後に報道の規制は解いたと報告があった。

民に作られた報道が発信される。

おかげで更に軍に小さいとは言えない損害を受けるだろう。

その重大な責任において軍組織を浄化しなくてはならない。

犬猿の仲と言われる警備隊の協力を仰ぎ内部調査を進めることも承諾した。

さらに組織の改革を進めると国王自ら宣言があつた。

しかし問題はこれを期に極秘の計画をどう運ぶか・・・

ある程度信用のおける者を集めたつもりだつたが、司令官が裏切つたとなると計画が何処に漏れていいるか調べる必要もある。

やはり計画の一部を知る秘書官を抜擢するべきだろう。

そろそろ大役を任せてもいいかも知れない。

「失礼します。」

ノックの後にクリスが入ってきた。

「どうなつたかな？」

「 穏便に副司令官の昇格で如何でしょ うか？」

将軍が人事を一新して組織改革をすると宣言されていたので、今改めて繋ぎの後任に上がる名前は少なかつたです。

しばらくは土門殿が兼任されてはという声がありましたが、彼の任務に兼任は困難、代理を置くなら同じことと却下されました。

「

「 よかろ う。でも土門が・・・なるほど・・・民には人気があるが幹部には嫌われたな。

ヤツは軍の浄化後のシンボルとしての役割が残つて いる。今汚れる必要はない。」

「 亡くなつた隊長の後任に富沢を推しますが如何でしょ うか？」

「 彼か・・・荷が重いのでは？」

「 時限的な人事ですし隊長の弔い合戦でもあります。彼なら期待に添うよう行動するでしょ う。」

「 富沢と言えば家は鈴木家や四井家、旗本家に並ぶ名門だつたな。しかし例の事件で名家としての威光が落ちた。将来鈴木家に婿入りするのだろう。彼が軍に身を置くなど未だに信じられんよ。」

「 精神的に鍛えないとという気持ちからだと聞いたことがあります。事件後は色眼鏡で見られたでしょ う。自らを鍛え妻となる彼女を守るためにあると。」

「 純粹なのだな。その人事も悪くないが・・・一筋縄ではいかない連中を扱えるかだ。」

「 彼の補佐に民間から京極真を置きます。」

「 あの変り者の武道家がそんな要請を受けると思つのか？」

「 彼は富沢の婚約者の妹と付き合つて いるのです。未来の義兄の補佐は簡単に断れないでしょ う。」

それに今回の盜賊は西の国の剣豪を破つたと伝えるように指示しておきました。

「 ・・・鬭争心にも焚きつけて いるか。」

将軍は選考会議の報告を了承した。クリスが机に置いた書類に印を

押した。

「クリスくんは今まで通りの司令官の秘書官を続けるのか？」
受け取り下がろうとするクリスに声をかけた。

「と言いますと？」

「わたしの直属の部下に任命する。」

「・・・わたしでよろしいのですか？」

クリスは勿体ぶつたそぶりを見せた。

「昨夜の事実は君が一番詳しいのだろう。」

「何のことでしょう？」

「わたしの目は節穴じゃない。一人で出来ることは限界がある。思
い通りにことは進まなかつた事は自覚しているはずだ。
きみは我々の手の上で踊つて見せたに過ぎない。わたしがそのテス
トに合格点を与えようと言つのだよ。」

「科人を捕らえよと指令を受けたときから薄々は気付いてました。
しかし毒であるわたしをも取り込もうとは考えてませんでしたが？」

「組織が変化を求めるときには毒薬も刺激的な良薬となる。」

「賭け事がお好きなのですね。」

「現世の者は神の領域に手を伸ばす。知恵の木の実を食べ墮落し地
を這いずり回つて諦めたわけじゃない。」

上の世界が求めることは下の世界でも同じこと。我々は「与えられる
だけの閉じ込められた闇の世界から地上を目指す。」

「そのために科人の力を？」

「両方を行き来する科人は神に近い存在と言つ者がいた。しかし神
の逆鱗に触れ時間の鎖に繫がれたまま。」

神に成れなかつたなれの果て。神に進化するための貴重な標本。例
える言葉はどうであれ、崇めることも無ければ蔑む必要は無い。
生への欲望に囚われた君が我々と手を組むことを拒む理由はない。
「わたしも賭け事は嫌いではありません。」

「オルファの為に働いてもらおう。」

「オルファ・・・嫌味な名前。」
クリスは呟いた。

・・・・・

「大丈夫か服部くん。」

「ああすまんのう。」

待機室に運ばれていた平次は濡れタオルで頭を冷やしていた。

「あの黒の「一トを羽織つてた男の消息はわかつたか？」

平次の質問に高木はすまなそうに下を向いた。

それは信じたくない答えだつた。

「不問やと！」

「国王の命だ。」

高木は問いかけを遮るよつに言つた。

「しかしあそこのトイレの通気口からテラスの抜ける通路があつたのは事実や。

テラスに現れ逃げたのが玉座の間に現れた賊やで。

それに城に手引きしたのが司令官やでなぜ分かつたんや？あんたらが調べたんか？」

自分が動けなかつた苛立ちから声はドンドン大きくなつた。

「彼はオルファ。」

高木の答えに平次は一瞬言葉を失つた。

それは幼い頃親父の書類で見つけた覚えたての文字。

あの親父さえも苦しんだ強大な秘密組織の名前。

未だにその残党が残つていると言うのか？

「んなあほなつ。でつち上げとちやうんか？あの盗賊もオルファだと言つんか。」

「それは考え難いよ。機密保持のため軍部が内部調査を行つてこんな最悪の報告を我々に公開しないだろ？」

まだ御伽噺の続きを聞いているよりすでに信じられるものじゃない。

「僕もピンと来なかつたよ。本当にあのオルファなのか可能性が0にならない限り調べて見るわ。」

2人の間に時計の音だけが流れた。

「コナンはどうしたんか？」

不機嫌そうな顔をした平次が沈黙を破つた。

「彼は城にはいなかつた。盗賊が人質として連れ去つたと城門の警備をしていた警備隊の仲間から聞いたよ。」

「それじゃ捜さんと！」

「いや、彼は解放されたと阿笠さんから連絡を受けてる。」「じいさんから？」

「僕が城にいることを知つているのがコナンくんが無事な証拠だ。

「そうか・・・オレはこれからどうなるんや~？」

「安心して良いよ。君はおどがめなしだ。」

これから警備隊も協力して調査を行う。僕は司令部付きで常駐することになつたんだ。

もし民間人の君を罰つせねば城の警備に問題があると軍を締め上げる手もあるんだが、

彼らも警備隊が紛れてゐのを知つてその正体を調べるために泳がせていた。

お互ひの立場を考慮して伏せることになつたよ。」

「大人の事情つてやつやな。」

「君は夕方に出る牛車に乗せて城外に出る手筈になつてゐる。」

「じゃあ。おどがめなしつてことで高木さんが捕まつてた書庫の辺りを調べたいんやけど？」

「自由つていう訳にはいかない・・・でも調べるんだろ?」

その場所なら我々が調査しても構わないと司令部から許可を取つてある。現場にいる千葉に言うといい。

「それは警備隊にとつて欲しい情報は無いってことやな。
「かもね。でも君のは別件だろ。では僕はこれで。」

「ありがとさん。」

高木は手を小さく挙げて返事をすると部屋を出ていった。

柔らかな光が射し込む一人の部屋。
裏腹に心に闇がかかつたよ。」

「・・・オルファ やと。」

平次は頭を抱え呟いた。

さてどうするか？

ハンシンの隣に揺られながらコナンは知らない世界での捜査方法を考えていた。

王立図書館に行けば王国の歴史が解るだろ？
しかし一般的な誰もが知ることができるもの。
ましてやこの姿であれば専門書を見るに耐え断られるかもしれない。

さうにオルファの関係した事件を調べよ？
ともに知りあっていることは微々たるもの。
マスコミや研究者に聞くほうが確かかもしれない。

両方を知る人物……やはり阿笠博士になるのか。
神官だつた過去を隠して生活している彼。
あの隠し通路まで知つているとなるとかなり深いところまで真実を把握しているかもしねり。
しかし博士に話しても素直に話してはくれないだろ？
どこから手をつけるべきか……

「コナンくんだつ！」

後ろから元気な声が聞こえた。

振り向くと博士の家で逢つたカチューシャをした少女が駆けてきた。

「歩美ちゃん？」

遅れないように元太と光彦も走つてやってきた。

「ケロちゃんところでも遊びに行くのか？」

「ううん。あのね、歩美たちはこれから探検するんだ。コナンくんも一緒にこじゅよ。」

歩美はハンシンの背に乗るコナンを見上げて言った。

「探検？」

今は子供の付き合いどころじゃない。

コナンは呆れ顔を取り繕いながらもため息混じりに聞き直した。

「ある屋敷に1人で住んでた男の子がお化けに食われたって噂なんだぜ。俺たちがその噂を調べるんだ。」

リーダーでもある元太が言った。

「でもお化けなんて居るはず無いですよね。その噂の真相を僕が暴きますよ。」

「そんなことないぜ。鬼が出るんだからお化けがいても可笑しくないだろっ！」

「鬼は特別な存在です。お城の近くしか現れないじゃないですか。」

「それは鬼だつて知らない所で迷子になりたくないからだろっ。」

「それじゃお城の近くに鬼の家があると言うんですか？」

いきなり元太と光彦の言い合いが始まる。

「もしかしてその屋敷が鬼のお家かも？」

「俺がついてるつて。安心しろよ歩美。」

鍬を振りかざし元太は胸を張った。

「鬼なんていませんよ。あんな大きな鬼が屋敷の中に入れるわけないでしょ。」

光彦も負けられない。

「鬼の子供なら入れるかも知れねえだろっ？」

元太も退くことが出来ない。

「ばかばかしい・・・。」

懐かしい雰囲気の会話に苦笑を噛み殺しながらもそっけない。

「そんなこと言つて。本当はコナンも怖いんだろっー。」

「うううときだけは元太と光彦2人の意見が揃つ。

「そんなことねえよ。」

いつの間にかいつものパターン。

3人のペースに嵌つてゆく。

セヒヂツやつて逃げようか・・・

「お化けじやなかつたらその男の「せだ」に逃げちやつたんだろうね？」

「引っ越しして空き家になつたんじやねえのか？」

「そんなことありません。」

「そりだよね。蘭お姉さんが心配そうに見てるのを知つてるもん。だから俺たちがその秘密を調べてきてあげるんじやないか。」

3人が冒険に向かう理由がそこについた。

「蘭つて・・・もしかしてその家主の名前つて？」

「ええとね。エトウさんつて書いてあつた。」

「そうか、この世界のオレの住む家。

服部と自衛団を組織していいるオレなら検査記録があるかもしねりない。もしかしたらこの世界の父さんの事件データなどもきっと。

「もちろん「ナンも行くよな！」
「・・・しゃあねえな。」
急に気がころつと変わるのは現世でも同じ。
話しながらも「ナンは思わず苦笑い。

「本当に？」

「ああ。お化けがいないことを証明してやるよ。」
現世では止めるけど、ここは誘いに乗ろう。
連日の探検。しかし今度は昨夜ほど緊張を強いられる場所じゃない。
真実を求めるために必要なら今はやるしかない。
「それじゃ歩美も乗せて？」

「ああ。」

歩美が伸ばした手を引いた。

「でつけえトラだな！？」

「僕たちも乗れそうですかね？」

鍬を抱えた元太がハンシンの身体を叩くと、ハンシンは2人に向かって欠伸をする。

開けた大きな口に驚いて座り込む2人をハンシンがシッポで背中に乗せた。

黄泉の世界の少年探偵団の出動が決まった。

・・・・・

しばらくすると工藤の表札が目に入った。
工藤新一の自宅と言つてもここは別の世界。

それは周りよりも少し大きな建物は格調が高く感じられた。
しかし掃除をされてない所為で庭の草はボウボウ、窓は煤で汚れた
まま。

これではお化け屋敷に見えなくもない。

ハンシンの肩辺りが屋敷の門に触れるとギイーっと「う音をたてて
開いた。

歩美は無言のまま「ナンに擦り寄つた。

木で組まれカンヌキは外れて鍵も使われていなかつた。

「大丈夫だよ。歩美ちゃん。」

コナンが優しく声をかけた。

「いくらなんでも鍵も掛けてないのですか？物騒ですね。」

「・・・昨日来た時はちゃんと閉まつてたぜ。裏の塀の隙間から入
るつもりだつたんだけどな？」

コナンを先頭にハンシンの背から飛び降りた。

「お化けが開けたのかな？」

歩美が最後に滑り降りる時にはコナンと光彦で門の回りを調べすべくしていた。

「これを見てください。木枠のところが壊れてるんじゃないですか？これでは鍵はかかりませんね。」

「そつか。牛車がぶつかったんだね。見た目で古そりだからかな。」

光彦たちは好き勝手に判断している。

その傷は新しく回りも老朽してるわけじゃない・・・それに内側からの方がかかっている。

外側からの力なら事故などの可能性もあるが、こうなると誰かが出入りしていたと疑わざる得ない。

「・・・誰かが部屋に入ったな。」

コナンは呟いた。

隣を見ると昨日服部に連れてこられた博士の家。

彼はオレたちの帰りを待ちながら研究を続けているだね。自由に気の向くまま・・・元神官という人物が自由に？・・・まさか・・・監視されてる？

2階建てのこの屋敷からならば博士の行動を監視するのに都合がいいはず。

でも鬼が現れるこの世界であってもお化けの噂で近寄る者が無いことは言えない。

そしてこんな証拠を残すミスもないだろ。

・・・少なくとも今は小さな仲間を連れている身。

冒険なんて安易に考えすぎたか？・・・しかし資料はここにあるはず・・・でも今は退くべきか。

コナンの考えなどお構いなしに3人はとっくに玄関前に立っていた。

「でかい玄関だよな。」

「でもこのトラさんは入れないかも。」

「牛とか大きな動物は外で飼うものですよ。」

「そつか。こんなに懷いてるのに可哀想だよね。」

歩美はドアにあるドアノックを叩こうとしている。

「止めましょう。入りますよって教えてるようなものじゃないですか。」

光彦が手を抑えた。

「光彦もお化けがいるって思つているじゃねえか？」

元太が言つた。

「ちつ違いますよ。」

「・・・でも本当にいたら怒られるだけじゃすまないよ。」

歩美も不安になつてきた。

「オレが付いてるから心配いらねえぞ。」

そう言う元太も腰が引けていた。

冒険するワクワク感に隠れていた小さな不安が見え隠れする。

「それじゃ一旦外に出て様子を見ようか？」

コナンが3人を呼び止めた。

「止めないもんつ！」

「行きましょう。」

小さな冒険家たちは前へ進む。

「そうだ。コナンを先頭に中に入るぞ。」

入り口だけで大騒ぎの4人組。

やはり鍵の開いている玄関を光彦が開けると元太がコナンの背中を押した。

ハンシンも4人を追つて大きな身体を無理やり萎めて玄関の枠を抜けた。

部屋に入るとやはり黄泉の世界の造り。

システムキッチンなど現世のものは無く、玄関を潜つた先土間があ

リマキが山積みにされていた。

屋敷の造りは現世の工藤邸と同じでリビングなどの間取りにズレがない。

階段があるが、まだ分からぬ部屋に誰かいるかもしない。
逃げ場を失わないようにまずは1階を回ることにした。

3人はコナンを先頭に奥の部屋に進んでいく。
この奥に父さんの書斎があるはずだから。

「なんですかここは！？」

「ナンのすぐ後ろにいた光彦が声をあげた。

窓さえ本棚で隠れているこの部屋は暗く閉ざされていた。
微かにほんのスキマから差し込む光に見えてくる蔵書の絶壁。
「これが全部本ですか？図書館に負けませんよ。」「
でもよ。難しい字ばかりで読めねえよな。」「

「マンガはないのかな？」

気の遠くなるような本の数。

この壁は大人が見たら返つてぞつとするだろう。
コナンもパソコンもないこの世界でこの壁から資料を捜すのかと途
方にくれた。

しかし子供たちは冒険者。興味は尽きない。

「この本なんて記号ばかりですよ。」

とりあえず近くの机にある本を光彦が開いて見た。
「何だろ？」「

それは整理した資料の索引集。

「辞書・・・ですかね？」

光彦は「ナンに渡した。

この記号は本棚と段数とページを示している。
これを使えばデータを見つけることができる。

「・・・Aは・・・上のほうじやねえのか。順番も合ってないのかよ。」

「さりにABC・・・O・・・あつた。」

「ナンはさつそく調べ始める。」

独り言を言いながら動き回るコナンを3人は不思議そうに見ていた。

「おい。なんかミミズが這つたような・・・きたねえ字だな・・・

これじや読めねえよ。」

興味の涌かない本の山に元太は飽きていた。

「これは旅行記ですね。なにか変わった物もないし・・・旅行と言うより散歩みたいな感じです。」

「光彦は読めるんだ。」

「いえ・・・読めるところだけちょっと・・・。」

それもそのはず危険なデータは誰もが理解できないように変えてある。

鍊金術書のように日記や料理のレシピのように一般には分からぬよつに理解できないよつに書いてある。

「・・・おもしろいじやねえか。」

小さくても頭脳は大人。コナンには推理して書かれている意味を推理した。

コナンは本の前に辞書や辞典を片つ端から出しては読み続けた。

歩美はコナンの行動に見とれていた。

出会つたばかりの少年。しかし何か気になる少年。

知らないはずの名前を呼んでくれた彼に運命的なモノを感じていた。

「コナンくん。次はどのご本取ればいいの?」

興味深い彼になにかと世話を焼きたくて仕方が無い。さすがに光彦も飽きてしまつた。

「おいつ光彦。向こうに階段があつたよな。」

「僕たちは探検を続けましょうか。」

歩美をコナンに独占され、つまらない2人。

ここは抜け駆けしても先にオバケの正体を突き止める。元太と光彦が2階に上ると後ろから肩を叩かれた。

・・・・・

「元太くん・・・光彦くん・・・」

歩美が呼んでも返事が無い。

「ねえ隠れてるの・・・返事くらいしてよ。イジワル。」

部屋を見渡しても誰もいなかつた。

「ねえコナンくん。2人がいないの。」

「えつ・・・まさか・・・」

夢中になつていたコナンは急いで立ち上がり近くの部屋から2人を捜し始めた。

「まさか2人・・・」

「そんなことないよ。」

2人は土間に戻ると階段から野太い叫び声がした。

急いで階段を駆け上がつた。

「ハンシン?」

少しドアの開いた部屋の前で申し訳なさそうに座つて いるハンシンが振り向いた。

「ガウ・・・」

彼の前には長い足が見える。

「・・・誰?」

歩美はコナンの背に隠れた。

ゆっくりと近づいてみると、

コナンはその倒れている男に見覚えがあつた。

「おっちゃん?」

その顔は毛利小五郎。蘭のおやじさん。
探偵という言葉が無いこの世界でこの場所で何をしていたのだろう?
この部屋からなら博士の家を監視できる。
まさか・・・?

「んっ?」

コナンたちの気配におっちゃんが目を開けた。

「まだガキがうろついてんのかつ!」

「コナンたちと一緒にハンシンも一緒に顔を覗いていた。

「・・・ああ死んだフリしねえと喰われちまつ!」

その言葉に歩美がクスッと笑つた。

「おっちゃん、クマじゃなくてトラだよ。死んだフリなんてしなくても大丈夫だよ。」

「えつ・・・ああ。トラを家に居れるんじゃねえ。間違えるだろ?」

トラはもむちゃんのこと。クマだつて家に居るものじゃないはず。気が動転したのかおっちゃんの対処方法がこんがらがつていた。コナンの背にしがみ付いていた歩美が部屋のベットに寝かされる元太と光彦を見つけた。

「心配するな。気を失つてたからそこに寝かせておいた。」

「ガウ。」

「大丈夫だトラ公。おまえは見てたんだね。・・・このトラはおまえのか?」

「彼は平次兄ちゃんの。」

「・・・おまえは西の坊主の知り合いか。」

「おじさんは何をしていたの?」

「それはこっちの科白だ。ガキの遊び場じゃねえぞ。不法侵入って言葉くらい聞いた事があるだろ?」

「だつて門が壊れてたんだよ。何があつたつて思つじやない。おじ

さんこそ不法侵入と器物破損じゃないの？」

「バカヤロウ。オレはちゃんと家主の許可をもらつてるんだ。」

「そんなことないもん。ここには男の子が1人で住んでたんだよ。」

「新一のことだろ。オレはその母親の有希ちゃんと頼まれたんだ。この通り鍵だつて預かつてる。」

「でも門は内側から力を受けてるよ。」

「ありやオレが入る前からだ。だから部屋の中を慎重に調べてたんだ。」

「……ってオレがガキに尋問されるんだ！？」

「こいつらは親を呼んでお灸をすえてもらわんとダメだな。」

目を覚ました2人もこつぴどく怒鳴られ探検は継続不能。4人と1匹は屋敷の外に出された。

「坊主は見ない顔だな。家は何処だ？」

コナンはとりあえず博士の家を指差した。

「西の坊主のことも知つてたし……おまえに聞きたいことがある。事務所まで付き合え。」

解放された3人と一匹を残しコナンは小五郎の事務所に連れて行かれた。

「2人で話がしたい。」

「了解しました。失礼します。」

クリスを残し昼食を届けた兵が監禁部屋から出ていった。

兵士の足音がゆっくりと遠ざかる。

鳥たちの羽音が窓の外を横切った。

「どうシェリー？薬を造る気になつたかしら。」

ドアが閉まつてからも続いていた沈黙がやつと解かれた。

昨夜の騒ぎが嘘のよう。

この部屋を警備する兵士が替わり昨夜のように科人と恐れる様子も見せない。

それはこの女が仕組んだことなのだろう。

「造らないと言つたら……どうする？」

哀には昨夜の一件がどう処理されたのか分からない。しかし彼ならキッドと共に城から脱出できただろう。何があつても諦めることはしないスーパーマン。

大丈夫。彼が必ず迎えに来てくれる。

哀は強がつて見せた。

「……どうしようかしら。」

クリス、いやベルモットは窓際に立ち、まわりの塔を見渡した。

「昨夜……カルパドスが消えたわ。彼は白い幻影に執着していた。あなたは彼の最後を見たのかしら？」

「カルパドス……組織のスナイパーまでがなぜこの世界に？……もしや昨夜の？」

「彼は現世で死んだのよ。覚えてない？赤井に拘まるより死を選ん

でこの世界にやつてきた。

あなたも知つたでしよう、行人は死んでこの世界で旅をする。

しかし判決が下りればその旅は強制的に終わる。彼も宣告を告げる
弾丸から逃げ続けることが出来なかつた。」

「行人・・・お姉ちゃん。あなたはお姉ちゃんを迷宮に閉じ込めて
どうするつもりなの!?」

「迷宮・・・そう・・・白い幻影から聞いたのね。

やはりあの男はここに来たのか。

獲物を前に彼は宣告を受けたのか・・・わたしたちの末路はそんな
ものだろう。

崇高な目的を掲げ動き出したとしても時は無常に過ぎてゆく。
手に入れたかつたモノを目の前にして時代錯誤の遺物とされる。」
ベルモットは空を見上げながら言つた。

部屋の窓から見える空は雲1つない快晴。

頼れる相棒を失ったベルモットの心と同じような空虚の色。
陽の光は今の彼女には眩しそぎる。

「・・・でもあの女をあそこに閉じ込めたのはわたしじゃないわ。

「あの石版は科人の力を弱めるモノ。あなた自ら石版を利用するにはリスクが大きすぎるという訳ね。

まだここに組織の仲間がいるのね。

でも大事な事を忘れてないかしら。わたしが科人だからこの場所に
閉じ込めているのでしょ。

兵士たちはあなたの正体も同じことを知つていいのかしら?外にい
る監視にでも試してみる?」

「どうかしら?これでも”千の顔を持つ女”と呼ばれているのよ。
細工はいろいろあるわ。彼らには見破れないでしようね。

それにはあなたの言葉を信じるとでも思つ?」

「でも今日の味方は明日の敵になる。」

「わたしたちの世界はいつもそんなものでしょ。裏切りは日常茶飯事。

あのジンでも組織のバランサーのウォッカがないと仕事に潰されてるわ。

組織の偵察部隊にいれば、そんな状況も沢山見てきたしね。

百戦錬磨の女にハッタリは通用しない。

「それより安心して。あの迷宮にさまよう旅人には弾丸は届かない。宣言を受けることはないわね。」

「それってどう言つこと?」

何を考え何をしようとしているのか見当もつかない。

どちらにしろお姉ちゃんは人質にされた。

「一つの不安を取り除けただけでも感謝したらどうかしら。でも薬を作らないと時間は無いわよ。弾丸は届かなくとも再会できる保証は出来ないわ。」

「保証?」

「完成したら教えてあげるわ。急ぐことね。」

クリスは勝ち誇つたように言つた。

APTX4869のアポはアポトーシス。

つまりプログラム細胞死。・・・自らの容を変えて生きる為の死。薬はアポトーシスを誘導するだけでなくテロメアーゼ活性を持つていて細胞の増殖能力を高める。

生きる為に必要な細胞を増殖しアポトーシスで入らなくなつた細胞を殺す。

人の手で時の流れを操り、肉体の進化を促進させてゆく。

始まりと終わりの一一致。

生と死の一一致。

輪廻転生。

進化し続けたその終着地点は死。

だからこの薬は出来そこないの名探偵。神秘的な毒薬。

現世では毒薬でもこの世界ではどんな薬となるのだろうか？

しかし神に逆らつ悪魔の薬はどの世界にも存在する必要はない。

「急ぐつてこいあの薬を作れると黙つの？」とは組織のよつな設備も無い。

それにあの薬だつて研究にどれだけの時間を費やしたと黙つの。」

「簡単なことよ。

あの薬を作り出したのはあなた自身。

薬の設計図はあなたの記憶の奥に眠つてゐるだけ。

全ての記憶を吸出し必要なデータのみを再構築すればいい。どんなに時間がかかることであつても、その時間を操るのは科人の力。そのための準備は進んでいる。

良い返事を期待してゐるわ。」

クリスは部屋を出て行つた。

哀は意味不明の科白に頭を悩ませていた。
薬を作らせても何をするつもりなのだろう？

このままこの場所に居ればベルモットの言うがまま。
そしてどうやつてお姉ちゃんを救い出す方法は？
どんな世界にいようと彼はその好奇心が渴き切るまで謎を追いかけていはるはず。

だからと言つて彼を信じてただ待つてゐる訳にはいかない。
・・・わたしは王子が来るのを待つお姫様じゃない。
もつ結論は出ていた。

「食事は済んだか？」

考え方をしているところに声が聞こえた。

先程の食事を持つてきた男と違つ声に哀はドア越しに立ち様子を伺つた。

気配は監視の一人。ベルモットのいやな匂いがしなかつた。準備をするまもなく訪れたチャンス。

監視の人数もじきに元に戻るだろう。

また返事を聞きにベルモットがやつてくるかもしけない

「・・・今しかない。」

哀は決心した。

ガシャン。

兵がドアノブを握るとテーブルが倒れる音がした。

「だつ誰なの！」

哀の叫びにドアの向こうの兵が反応した。

「ちょっと、何もないわよ。」

「どうした？」

鍵を差し込む音がする。

「窓に白い影が・・・」

「まさか昨夜の!?」

兵士がゆっくりとドアを開けると哀が壁に張り付いていた。

「ヤツは何処にいる?」

ちょっと腰を引けた感のある兵は恐る恐る部屋を見回した。

テーブルが倒れ食器が床に転がつていた。

「あの窓の裏側に・・・あの赤いのって・・・傷を負つてゐるのかしら。」

「なるほど未だに塔の屋根にいるとなれば翼をもがれたな。手負いは手強いと言うが、翼が使えないオレに分があるということだな。」

あの盗賊を一人で相手にはできず応援を頼んだだろう。

しかし相手が怪我をしていれば逃す手はない。
ここで捕られれば表彰物だ。

兵は銃を構えた。

ゆっくりと窓に近づき上半身を窓の外に出すと、哀は兵の背にスプレーの柄を突き立てる。

「大人しくすることね。命までは取るつもりはないわ。」

哀は腰に下がっている鍵を抜き取った。

「ガキに何が出来る?」

「動かないで。刺すわよ。」

哀は急いで窓を下に降ろした。

兵は窓に挟まれたまま身動きが取れない。

哀は窓を上げられる前にストップバーを留めると急いで部屋を飛び出した。

鍵を掛けようとドアに手を掛けると銃声と共にストップバーが飛んだ。子供の力では甘かった。

もう少し強く閉めていれば身動きが取れなかつたのに・・・

もうサイは投げられた。

鍵を下ろす暇は無い。哀は階段を駆け下りた。

わたしにしか薬が造れないのなら命を取る真似はしないだろう。
たとえ捕まつたとしても彼に有益な手がかりを掴むまでは・・・

「お嬢さん。ここは子供の遊び場じゃないよ。」

螺旋の石の階段を駆け降りる先にメガネの大男が立っていた。

ホンの数秒でチエックメイト。安易な行動は命取りになつた。

「おいつその娘をよこせ。貴様は何者だつ!」

「わたしは本日の辞令で城内の警備隊長付となつた。」

あまりにも待たせるから、うして階段でトレーニングをしてたまで。

他意はない。

「そんな話は聞いてないぞ。」

兵は力の無い声で言つ。

「お嬢さんと追いかけっこしてれば聞くことなど出来ないだらう。子供相手に銃で威嚇するなど軍も落ちぶれたものだ。」

「なつなにをつ！」

「この娘はわたしが預かろう。文句があるなら富沢隊長に申し出よ。元々軍族ではないわたしは免職にならうと構ないのでな。」

兵士は黙ってしまった。

それはこの男の発するオーラが兵士の鬪争心を抑えつけてしまったのだった。

「もう大丈夫だよ。

立場上知らなくちゃならないことがあるようだ。できたらわたしに話してくれないか？」

メガネの男は優しく哀に言つた。

彼とも西の探偵とも似た怖いくらいの真つ直ぐな瞳。

この男の正義感と優しい眼差しは哀を落ち着きを取り戻させてくれた。

しかし組織の連中は甘くは無い。

ベルモットが監視を一人にした時の哀の行動を見抜いていたかも知れない。

現世では出会つたことの無い田の前の柔らかな笑みに哀は素直に口を開く事は出来なかつた。

「どうだい服部くん。何か見つかったかい？」

高木が地下の蔵書置き場にやってきた。

ここは昨夜高木が捕らわれていた部屋の隣。コナンと2人が忍び込んだ書庫。

そして議事録から知つてゐる名前を見つけた場所。軍からの許可を取つて千葉の立会いの元、平次も独自の捜査をさせてもらつていた。

「まだこれつてものは見つからへんのや。」
重い、厚い、字が細かいえに変色して擦れてゐる。

10年前の神官の名簿は見つからず、あの御神体や科人の研究書を読んでみたが聞き慣れない言葉にうんざり。

気合いを入れて難儀な蔵書を読み漁つていた平次もさすがに床に座りこんでいた。

「それより上の方が騒がしかつたけど何かあつたんか？」
「人事発令だよ。」

亡くなつた隊長に替わり富沢くんが警備の指揮を取ることになつた。もう君付けじや呼べないな。」

「富沢つちゅうたら例の事件の？」

いくら呪われた名家とか言つても財閥には変わらへんのや。その兄ちゃんが何故軍に入隊してん？」

「僕は詳しくは分からぬけど・・・」

今回合同調査の指揮を取る警備隊の白鳥隊長なら知ってるかもしないな。」

「同じような名家出身ちゅう」とやな。

それで合同調査なんてうまくいくてるんか？軍と警備隊は仲が悪いんやで。

お互にバカし合にして何にも出て来んかったら民が騒ぎ出すやうな。」

平次の言葉に高木はため息をついた。

平次の言つ通り始まつたばかりの調査で小競り合にはちょくちょく。上の方は腹の探し合い。

このままでは何の手掛かりも得られずに調査期間が過ぎてしまう。今まで事件があつても捜査権限の無いことにグレーな報告を甘んじて受けるしかなかつた。

だからこそ民は警備隊に味方した。

結果を残さなければ軍の言いなりと思われ警備隊は存在価値を問われてしまつ。

「でも・・・その人事おかしいんとちやうか？」

例え親しい間柄であつても彼は軍人。

軍が知られてはならへん秘密は口にはしない。

その富沢つちゅう隊長がどんな人物か分からへんが立場的に真実を封じこめるかもしれません。

しかし調査の現場責任者が互いに昔からの知り合いのなれば民から馴れ合いと言われるのがオチや。軍もそれも考へてるやろか。

名家の隊長はトカゲの尻尾にされちまうんとちやうか？」

「確かに指名したのは幹部たちだ。」

富沢くんなら過去の家のスキヤンダルで叩きやすいと言つもある。彼等が指名したのも軍も事件の重大さにどう收拾するか考へたから

だろう。

こつちは軍の奥まで調査を延ばせるように慎重にいかなくちゃね。」
高木は自分に言い聞かせるように言った。

「軍が相手だけに加減が難しいが……何が出てくるかちつと怖いで。」

「……確かに。」

「ところでその分厚い本は何が書いてあつたんだい?」

高木は平次が何を調べているのか知つておきたかった。

必ず軍が監視しているはず。彼は一般人。そのときの逃げ道だけは用意しておかないとならない。

「かなり昔から科人や鬼の研究を続けられていたんだな。
鬼はともかく、誰もが科人の存在を知つたのは10年くらい前。知らんことばかりや。」

平次は話ながら手にしていた蔵書を閉じた。

「鬼は昔話や言伝えとしても聞いていたからねね。」

「鬼は生きた化石とも言われる存在や。」

それやのに未だにその生態が分からぬでいる。

この世界に生きるものはいつまで鬼に怯えた生活を続けなくちゃならへんのやる。」

平次の言葉はこの世界に生きるもの全ての気持ち。
いつまでも続く戦いにゴールは見えない。

「でも研究から科人が鬼を操つてると分かつたんだる。
僕でも聞いたことがあることだ。その研究もかなり進んでいるはずだよ。」

「ここに過去の科人を研究しているレポートがあるんや。
これは科人との対話からまとめられているが、操るなんて言葉はなかつたで。」

平次はその文を簡単に説明した。

現世は智識の実を食べエデンを追放された者の世界。

しかし強欲な感情は生命の実さえも手に入れようとした。

智識を過信した一部の者が真似て作った生命の実を口にした。俗に不老不死の実とも呼ばれるそれは神の創造した世界の根底を崩壊させてしまう。

智識で神の力さえも手に入れたと豪語するものたち。人々は恐怖を振り撒くこの者をこの世にならざるものとして鬼と呼んだ。

神はそれを許すはずがない。

神への冒瀆、そして神の想像した世界の秩序を破つたものたちに罰を与えた。

神の逆鱗は人々が作り上げた物までも巻き添いにした。

人々は神の怒りを静めるために祈りを捧げ、自らがその者を裁き罰することを神に願い出た。

そして罪を償う機会を与えた者を科人と呼んだ。

今でも科人は鬼と同じ神の領域に手を出した罪人だとまとめている。

「科人はまだこの世界に紛れているんだろうな。」

平次はコナンのことを思い浮かべていた。

あいつは自分の正体も宿る特別な力も知らなかつた。科人は本当に罪人なのだろうか？

「それは分からぬけど、警備隊には科人と呼ばれる男と気が合つて話していた人がいたんだ。」

高木は言った。

「それって10年前の事件だね。」

話を聞いてただけの千葉も入ってきた。

「なんやそれ？」

「一般には知られてない話だよ。僕も入隊してから聞いたんだから。」

「千葉の言ひ通り。恥ずかしながら今回の捜査資料を読むまで知らなかつた。」

高木も頷いた。

「その科人は軍の工作部隊によつて暗殺された。でも遺体は判別できなかつた。」

その男は科人の術を使って難を逃れたんだ。そして昨夜現れた。

「白い盗賊団」と呼ばれている男だよ。」

「なるほど。科人が現れたのなら昨夜も鬼が現れたのは嘘じやなかつたのかも知れませんね。」

「昨夜？現れたのは昼間だろ？」

「いや、夜中に海上に姿を現したようなんだ。しかし暴れる事もなく被害もなかつた。」

町外れの酔っ払いからの通報なので報告書も話半分で書いたようですが。」

「鬼は科人と同じ罪人だと書いてあるだけで操つてゐるなんて文章はどこにもなかつたで。」

「でも昼間だつて白い盗賊団に城が襲撃されていただろ。」

「そうやつたけど・・・まだ断定できへん。」

科人の「ナンは現世の工藤新一。」

人がそれぞれ考えが違つようく科人をヒトくぐりに出来ない。彼を信じられても他は分からぬ。」

「そうだね。まだ謎だらけだから何も進まない。」

「この蔵書のようにたくさん的情報があるように見えても、ほとんど無いのが実情さ。」

調査だつて手探し状態。

何でもいいから手がかりが欲しいんだ。

その科人の話を聞いた人に会えば君が調べている事の何かヒントが見つかるかもしれない。

軍も調査メンバーに過敏に反応している。

その人も軍と揉めて事件後に警備隊を辞めさせられてるから、調査に参加している僕らは近付けないんだ。

君なら大丈夫だろう。多少の危険は付きものだけど行くんだろう。

「もちろんや。その人つて誰や？」

「君も知っている人だよ。ベイカの町で何でも屋をしている毛利小

五郎さんだ。」

高木は言った。

城内のことは何も知らず、コナンは連れて来られた部屋の窓から城が見ていた。

そこはメインストリートから外れた小さな建物。

小さなカフェテラスの横にある階段を昇ると、こじんまりとした部屋に丸椅子とテーブルが並べてあった。

「やはり子供なのか。まあ、楽にしろ。」

窓に寄り添い城を見るコナンをそのままに、小五郎はキッチンを見渡した。

「おまえが飲むようなものって……ないか。」コーヒーくらいしかねえが?」

「ぼくコーヒー好きだよ。」

子供口調で行つてもそんな子供はいない。

「へつ? ガキのクセに……今夜は眠れなくなるぞ。」

小五郎はそう言いながらもコナンの前にコーヒーを注いだカップを置いた。

「さつきの続きをするつもりはねえ。

あの爺さんの家にいるってことは西の坊主とツルンデルのは嘘じゃなさそうだな。

おまえがツルンデル西の坊主の溢してた言葉、意味が分からぬ才マジナイのようなものでもいい。何か覚えてないか?」

「平次兄ちゃんを疑つてるの? ぼくコーヒーで買収されないよ。」

「疑つてるわけじゃねえよ。」

「「」そり聞くなんてつて疑つてるのと違わないんじゃない?」

理由を言わないと全て平次兄ちゃんに話すよ。おじさんの行動もす

べて。」

「嫌になるくらいしつかりしたガキだぜ。オレは有希ちゃんに依頼されてると言つただろう。」

小五郎はコナンの目を睨んだ。

「おまえはこいつを探してたんだろう。」

小五郎は机の引出しからノートを出した。

それは工藤新一の捜査記録。

コナンは手を伸ばした。

「誰も見ていいとは言つてねえぞ。」

小五郎はコナンの表情を観察していた。

「でも目の前に置かれると誰だつて興味が湧くもんじゃない？」

コナンもそれを認めるわけがない。最初から子供の姿を利用し続けた演技。

「これを読んでもうことは、おじさんはあの屋敷に住んでいた男の子を捜して欲しいっていう依頼を受けたんでしょ？」

「まったく・・・ただの幼いガキだと思ってなかつたんだたが・・・つこつちを探つてゐてえだ。

軍部の連中は子供扱いしねえぞ。オレが相手で良かつたな。」

「それじゃ僕のこと疑つてるの？」

「初めはガキ共が悪戯に忍び込んだと考えたさ。

おまえが服部の仲間と聞いて考えが変わつたんだ。

あの坊主は危険を承知でおまえのようなチビすけを巻き込むような真似はしない。

それでもおまえが探りに来たのはとカナリ深い関係者だつてことだろつ。

工藤邸は危険な場所じゃねえし他のガキ共はカモフラージュに使つたんだろうつ。

小五郎の推理は偶然の一致。

演技も何もない。1番最初に疑いの眼から外れる子供だと言つ条件

が通用しない。

まさかこんな展開が待ち受けてるとは思わなかつた。

「ひどいよ。まるで彼らを危ない目に合はしたみたい。そんなことしないよ。」

「このノートを読む限り、消えた坊主はオレが係わつた10年前のヤマに触れたようだ。

当時の関係者は誰もが口を噤んだ。

そんなヤマに軽く考へてるおめえらガキドモに關わつてもういたくねえんだよ。」

本心が溢れた。

おつちゃんは服部にも係わつて欲しくないと言つていたのだった。

「監視つて？10年前のヤマつて？・・・おじさんは一体何してる人なの？」

「まだ名前も言つてなかつたか。

オレは毛利小五郎。昔は警備隊にいたが、訳あつて今は何でも屋だ。

「平次兄ちゃんは自衛団を作つて動いてるんだよ。元警備隊なら尚更直接聞かない理由がわからないよ。」

これでは平次の仲間だと言つていいようなもの。

しかし10年前の話は聞いておかなければならぬと思つたからだ。
「この件には軍が絡んでる。一般人相手なら西の坊主にも手はあるだろう。

しかし軍部が相手なら話は別だ。いいか大人の言つことは素直に聞くもんだぞ。」

「だから平次兄ちゃんに仲間が必要なんだ。」

「ひらつ相手を舐めてかかるな。」

おつちゃんの顔は苦しんでいるように見えた。

「おまえにも両親がいるだろ。警備隊関係者か？軍関係者か？」

「ナンは首を振つた。」

「一般人ならなおさらだ。命を粗末にするなー。」
おつかやんは静かに言った。

「・・・お父さん。危ない仕事を受けたの？」
入り口から声がした。

コナンがよく知る彼女と同じ声。

「蘭、帰つてたのか？」

「園子のお姉さんが大変な。

富沢さんがお城の警備隊長に任命されたんだって、もう姉さんもシヨックで・・・

それで園子はお姉さんに付き添つてお城まで。

蘭は自分のことのように心配顔で話した。

コナンは昨夜のことを思い出した。

この世界の住人は現世と同じ人物が存在している。
しかしその名前は現場で見なかつた。

現世でイラストレーターを目指していた温和な彼が、
この世界では軍部に所属しているなんて信じられないイメージとかけ離れている。

現世では父が実の息子によつて殺されるなんてスキャンダラスなニュースを提供してしまつた。

その後の富沢財閥の話は園子から聞いていない。
またお姉さんが婚約破棄したとも聞いていない。
あんな事件の後だけに色目で見られるのは仕方が無い。
その報いがこの世界でも変わらないのだらうか？

「あれっ昨日の男の子？昨日は命拾いしたわ。どうもありがと。」「なんだつ？このガキと知り合いか？」

「昨日話した子よ。鬼が現れた時瓦礫に挟まれた園子を助けるのを手伝ってくれたの。」

「そりか……ありがとうな。」

「いえ……。」

急におつかやんに頭を下げられると、感つてしまつ。

「・・・礼とこれは別の話だぞ。おめえは命を何だと思つてるんだ。死を恐れないのは若者の所為といつが、それはまだ命の重さを理解しちゃいねえからだ。」

おつかやんの話は間違つてない。

「それから蘭。新聞を読んだが誤報じゃなかつたのか。
その人事はオカシイぞ・・・軍はまた闇に葬ろうとしてるのか。」

「どうじつこと?」

「まあいい。オレは出掛けてくる。」

おつかやんは席を立つた。

「お父さん?」

「今夜は飯はいらねえ。しつかり鍵を締めて寝るんだぞ。」

蘭は不安な顔をしておつかやんの背を見送つた。

「何がオカシイの? ねえ君は知つてるの?・・・あれ? コナンくん・
・・。」

蘭が部屋を見回しても蘭ひとつだつた。

・・・・・・・・

店を出た小五郎は城とは反対の方向に歩き始めた。

コナンはその後ろを追う。

しかしづざとなのか人通りの少ない道を選んで進む。
足元もガタガタで尾行しづらい。

コナンは諦めた。

そのまま後ろを歩いた。

「ガキが・・・ついて来たのか・・・」

人気の無いところでおっちゃんが立ち止まつた。

「ばれてたね。おじさん。」

「あたりまえだつ。

警備隊を辞めてから最近までオレには何者かの監視がついていた。普段から出歩く時は気を使ってんだ。」

「おじさんは10年前の事件の深いところに足を踏み入れてたんだね。」

「警備隊を辞めて秘密裏に捜査を続けてきたが大して進んじゃねえよ。」

付き止めた場所には先回りされるやら・・・いろいろあつたぜ。せつかく自由の身になつたはずだつたんだが・・・蘭がいるから撤退せざるえない時もあつたかな。

ヤツらがオレを泳がせている理由が分からぬままかなりの時間が過ぎた。

しかし新一が姿を消すと完全に監視を解いたつてわけだ。」

「それじゃ工藤新一つて。」

「あの坊主は若さつていうミスをしたんだる。たぶんオレがまだ触れるの避けたものに真つ直ぐにぶつかつたんじやねえのかな。」

おっちゃんは言つた。

言いたいことは痛いほど分かつてゐる。

あの日夢中になつて証拠写真を撮つてジンの気配に気がつかなかつた。

「おまえとオレとの取引だ。

今から行くオレの捜査について来てもかまわねえ。但しおまえが知つていてることを話してもらおう。

西のアホまで同じミスをしないとは限らねえからな。

それなら文句は無いだろ。」

今までガキ扱いしていたクセに対応が変わった。

「おじさんならオルファって知ってるよね。」

「おまえっ！・・・なんでそんなもんを知ってるんだ。」

おつかやんは黙りこんだ。

「そういうことか。」

急に呟いた。

「ねえ、意味を教えてくれないの？」

「意味はついて来れば分かる。その言葉は無闇に発するなよ。」

コナンは小五郎の後に続いた。

「失礼します。」

メガネの男は哀を連れたまま城の一室に入っていた。

そこは兵士たちの控え室。10数名の兵士が整列している。

「申し訳ありません。遅れました。」

彼はすでに並んでいる兵士たちに丁寧に頭を下げる。列の後ろにいた。

・・・やつきの張り詰めたオーラは消えていた。

兵士たちは一緒に歩く哀の姿にざわついたのだった。

「静かにしろ。・・・」それで全員だな。我々の隊は正式に富沢隊として始動することになった。」

新任の副長が声を上げた。

「皆の命を預かる隊長に任命された富沢だ。

わたしは君たちに比べて実戦の経験は少ない。足らない部分は力を貸してくれ。

仇討ちを叶えたい気持ちは君たちに負けていない。

亡くなつた隊長に頂いた教えを胸に戦うことにして誓つ。よろしく頼む。」

隊長に就任したばかりの富沢は頭を下げた。

副長の顔が曇つた。

それは1つの隊を預かる長に有るまじき挨拶。

「亡くなつた隊長はどんなときも胸を張つてくれたぜ。」
彼を隊長として兵士の誰もが担ぐことに異存は無かつた。
富沢は期待された成果が得られず上から罵られようとも平然と頭を下げ、ミスよりも生きて戻つた部下を喜んだ。

小さなミスは命取り。しかし生きてるからこそ挽回のチャンスは訪れる。

彼のスタンスは以前から接触して知っていたのだろう。この隊には前に所属していたキャンティ等特別な才能の持つ兵は移動させられた。

しかし残った兵も特異的な仕事をこなして生き延びてきた男たち。特命を受けていたといつても暗礁に乗りあがつた作戦ミスの打開策の先頭に後始末、

日の当たらない仕事ばかりして来た。

だからといって命知らずの猛者の集まりではない。

唯でさえ周りの隊から関わることを避けられ煙たがられるこの隊の頭には彼が相応しいと感じていたのかもしれない。

挨拶が終わると副長と一緒に畠沢が隊の列を回り皆の腕を絡め、個々に声を掛けてゆく。

この部隊の儀式みたいなもの。

隊長と1人1人の部下が順々に顔を合わせていった。そして1番後ろにいるメガネの男の前にやつて来た。

「なんだこの子供は?」

哀を見た副長が言った。

「階段で兵に追かけられていたので連れてきました。」

「城内警備の連中がか?」

兵たちは哀の顔を見に集まってきた。

大柄な男たちに囲まれると威圧感を感じる。

哀は何も口にできなかつた。

「城内に納品しに来た者の子供かもしだせんぜ。」

「女の子つてお城に憧れてるからな。城の中を歩き回つて迷子になつたんじゃないですか?」

「なるほど。おまえはお城に連れてつあげるとか言つて城外でナン

パしるんじやねえのか～？」

「そつそんなことはしてねえよ。」

「そんな厳つい顔じゃ王子さまには見えねえもんな。」

「おまえよりマシだろー。」

軍隊と言えども普通の人間。緊張が解けたときは笑い声が絶えない。ONとOFFを分けることがこの世界で生き延びる秘訣。

小さな少女をたくさんの厳つい笑顔が迎えた。

「迎えが来るまでここで預かってもいいでしょ？隊長。」

「このフロアならいいだろ。しかし警備隊と合同調査もある。そこは弁えてくれよ。」

「備品課に迎えが来たら連絡するよ」話しておきます。」

兵士の1人が言った。

「でも普通この警備を潜つて入れますか？」

兵の1人が聞く。

「子供だからだろ。緊張を長引きさせるのは難しいものだぜ。」

「虫一匹通さないなんて豪語してた連中も面目が立たないから、この娘のことは内密にしておけよ。」

副長が言った。

「まあいい。その子のことは後に。早く自己紹介くらいしないか！」

「ペコペコ頭を下げるメガネの男に富沢が言った。

「すみません・・・わたしはハイドシティで武道家をしている京極真といいます。

「軍の仕来りは知りませんがよろしくお願ひします。」

「だんなのことを知らないやつはもぐりだぜ。その力を軍の為にじやなく隊長の為に頼んだぜ。」

「そうだな。軍のことは知らなねえだろ。」

「だんなは民の代表だ。オレたちにねえものを持つている。軍に染まる必要はねえよ。」

兵士は口々に言つた。

「IJの隊は亡くなつた隊長の意思を継ぐ。

我が隊は編制された頃の少數先鋭部隊に戻つた。自己犠牲のチームプレーでは打開できない難問がやつてくるはず。スタンダードプレーに走るのは仲間を信頼してゐるからこそだと信じてゐる。だからどんな作戦でもかならず隊に戻つてくるんだ。挽回のチャンスは俺が作る。」

隊長の演説に兵士たちは雄叫びを上げた。

この部隊は普通の上下関係の兵隊というより横で繋がつた仲間。小説でしか軍を知らない哀にとつては違和感でいっぱいだつた。それは京極にとつても同じだつただろう。

・・・・・

「嬢ちゃんただいま。」

警備に向かう兵士が声をかけてゆく。

「嬢ちゃん行つて来るよ。」

戻つて来た兵士が声をかけて床に座り込んだ。

ここは畠沢隊の詰め所。

哀は部屋の隅に座らされてお茶を飲んでいた。どの兵士も部屋を出たり入つたりするときには哀に声をかけてゆく。

軍人になつて家族や兄弟がいる。

言わば兵士たちの妹や娘と重なるのだろう。

哀は上手く笑顔が作れないが頭を少し下げて見送つてゐた。

「少しほ落ち着いたかい？」

メガネの男が声を掛けてきた。

「ええ・・・まだここにいていいのかしら?」

「今のところはね。」

必要以上に何も言わない。

それだけ言つと哀から離れて行つた。

気が付くと兵士たちが出払つた部屋に哀1人。長テーブルに置かれた書類を見ているとドアの向こうからかすかに話声が聞こえてきた。

そこは奥にある隊長の専用の部屋。

哀はそつとドアに耳を当て聞いてみた。

「すまない。こんな世界に巻き込んでしまつて・・・軍の命令とはいえ君には似合わない場所までつき合わせてしまつた。」

富沢隊長の声。

「そんなことないです。武道は精神修行。軍人になるつもりはないけれども、ここに来なくちゃ逢えない敵がいますから。」

寡黙な彼の声が聞こえてきた。

「隊長の弔い合戦となるはずだ。・・・所詮軍は命のやり取りをする場所だ。君の拳を汚すことになる。」

「わたしの敵は人ではない。人の仮面を被つた鬼ですよ。」

「戦争なんて信じた正義のための戦い。自分が鬼だとは思つていな
いから非常なんだ。」

ぼくは前線で使い物にならなくて城内警備に廻された。敵も味方も傷ついた兵士を見ると苦しくてね。

戦いを終わらせる事ができるのは勝利だけなのか・・・いくら考えても答えが見つからず戦いの後は無力感でいっぱいだつた。」

「それでも軍属で居つづける。彼女を守れる男になるためなんじよつ。」

今回の人事はどうな調査結果が出てもかなり厳しい状況です。この

まま軍に利用される訳には行きませんよ。」

「刺し違えても・・・自分の正義は貫くつもりだ。」

「ダメです。生きて戻らないと意味がありません。お姉さんが待つているんですよ。」

「止めてくれ。もうキャンバスに向かつていた頃の僕じゃない。」

「ぼくの手は血で汚れぼくの鼻は火薬で麻痺した。彼女には似合わない男だよ。」

「いいえ。胸を張つて戻つてきてもらいます。お姉さんと祝宴を挙げるために。」

哀には2人の会話から2人の彼女が姉妹であることが想像つく。彼の事件記録を博士のパソコンで整理するのを手伝わされたときに打ち込んだ覚えのある名前の2人。

ただ現世ではこの男たちに逢つたことがない。

「・・・彼女は元気だったか？」

「はい。・・・鈴木会長もお兄さんを心配しております。」

「会長も・・・か・・・こんなぼくを・・・。」

「会長は富沢財閥の総帥が殺された事件の再調査を依頼していました。」

「あの事件は工藤くんが事件を解決しただろ。長兄が父を殺したことには変わりはない。」

次兄ががんばつて事業の建て直しを計つているだろがダメージは大きい・・・

以前のような信頼を取り戻すのは厳しいかもしれないがんばつてるはずだよ。」

「富沢コンツェルンのほとんどは国の事業を引き受けています。」

総帥が亡くなつて国王から任命された神官が代表として事業を継承

し、次兄さんは閑職に追いやられてしまいました。」

「そんな・・・。」

「そして国のかかわる事業は軍が研究機関として吸収する計画が上がっています。」

さらに富沢家と繋がりのある鈴木財閥に事業の協力を要請してきました。その事業内容は納得できないものだそうです。軍の態度に疑問を持った会長が富沢代表の死は裏で仕組まれていたのではと思ったそうです。

・・・事実は覆らないでしょう。

しかし長兄が殺人事件を起こした理由に何か別の力が働いたのではと納得するまで調べたくなつたのです。

会長はあの事件を解決した工藤新一くんに依頼しました。自動機についての裏づけ調査の途中で軍が係わっている可能性があると途中経過を報告がありました。」

「軍が係つて・・・まずい・・・それが本当なら彼が危険だつ！」

「・・・彼は突然姿を消しました。

会長にはS.P.が付いてますがお兄さんはその軍の内部にいる。だからわたしが力になりたいと。」

「きみには園子くんを守る義務がある。」

「わたしが今回的人事を断らなかつたのは園子さんの意志でもあります。」

彼女もお姉さんの幸せを願つてているのだから。」

「ぼくは・・・彼女を・・・彼女の家族・・・そして君まで巻き込んでしまつた・・・守れる男なんてなれそうもないな。」

「それは違います。その想いを力に変えて踏ん張れるからこそ守れる男なのです。」

「・・・すまない。でも決心がついた。」

「決心・・・ですか？」

「ああ、兵たちを死なしたくない。今回の調査をどう進めるべきか悩んでいた。」

「上からの圧力もあつたのですね。」

「この人事は報復なんだよ。隊長の死を民に流したのはぼくなんだ。司令官の反逆行為を隠蔽させないようにな。上層部の決定も早かつただろう。

報道規制が難しいと判断したんだろうな。

でもこれで兵士たちも巻き込んでしまった。

ぼくの心は決まった。

今回の合同調査でぼくと警備隊の責任者が昔からの知り合いだと知られている。

始まつても入ないのに癒着だとか、不利益な情報は握りつぶすとか

好き放題。

まともな最終報告はないと思われてる。

それなら真実つてやつを捜し出してやる。」

「一緒にやらせてもらいます。」

2人が笑い声が聞こえてきた。

現世での彼らの周りにいた人物は知つてている。

話を聞いていた哀にもこの2人の人物が理解できた。

「事件の裏側ね・・・」

彼に話したことがある。

『組織の被害にあつて泣いている人たちは大勢いる。しかし組織の所為だとは誰も気がついていない。』

組織と同じなら小さな事件でも意味がある。

軍の目的は初めから隊長の父親の会社だつたのかもしけれない。

この世界の彼もやはり黒づくめに似たような組織に関わっているなんて・・・

でもここにも仲間がいる。

「お嬢さん。隊長はおられるかな？」

男が部下を連れて入つて來た。

兵士とは違つた裝備をした男たちの顔は知つてゐる。

「ここ奥に。」

「ありがとう。君はここで待つてなさい。」

男は一番後ろでつまらなそうな顔をしている色黒の青年に言つた。

「あなたは？」

「……ん。まさか？」

顔を知る見知らぬ同士。

男たちの視線の中言葉を交わすことは控え、哀は顔を背けた。

「君たちは知り合いか？・・・」こんな小さな子と？・・・まあいい。

「男は扉をノックした。

「富沢隊長はいるか。調査チームの白鳥だ。」

また仲間が集つてきた。

彼らがこの世界に蔓延る組織に立ち向かう。哀は彼らの姿に勇氣を与えられたような気がした。

小五郎はコナンを連れていろいろな場所を回っていた。

しかし彼の表情から集まる情報は新しいものではないようだ。

時折工藤新一の検査記録を読み直す。

今日の検査活動は記録の裏付けをしていくようにも見える。その検査は口ではなく行動でコナンに・・・いやコナンを通して工藤新一を捜す服部平次のために情報を流しているようにも見えた。

検査は足でという現世のおっちゃんと同じように靴底を減らして歩く。

太陽が傾き始めた頃、小五郎は日売企画とこう看板のある汚らしい建物に入つていった。

そこは事務所ではなく輪転機が回る印刷工場。

「こんなところに何が？」

「大人しくしてゐなら付いて來てもいいって言つたんだぜ。」

小五郎は説明するつもりはない。

勝手にドカドカと奥のほうに歩いてゆく。

コナンは遅れないようについて行つた。

「ここにちは。編集長は？」

小五郎は営業スマイルで声をかける。

しかし作業している人は無視。

作業に集中していて誰も返事をしない。

「返事くらいしたつてバチはあたらねえつてだらうに。」

小五郎は近くの機械を蹴飛ばした。

グオーングオーングオーン

けたたましく唸り出した機械の所為で小五郎の悲鳴が搔き消された。

「やべり。」

「ナンは飛び出してくる白紙のペーパーを必死で押えていた。

「困るんだよ。部外者は出てってくれ。」

男の声と共に機械はペーパーを吐き出すのを止めた。

周りの作業者の雰囲気からその男が責任者約。

「それが客に対する態度かい？」

「ここは子供を連れて来る場所ではありません。勝手に汚まれてもね。」

「ああっそりかい、そりかい。昔のよしみでいい情報を持つて来たのによつ！」

小五郎は男の胸座を掴んだ。

「ガサネタに振り回されて軍部に睨まれたら商売上がつたりや。さあ帰つてくれ。」

男はその手を振り払つた。

「後で後悔しても知らねえぞ。」

「忠告したやるよ。軍部も昨夜の件の沈静化に躍起になつてゐる。今は誰も買わないぜ。」

「ふん。行くぞコナン。」

交渉決裂。

おつちやんはさつさと事務所を出ていった。

2人は賑やかな繁華街を行く。

「何をもらつたの？」

コナンは歩きながら聞いた。

「見ていたのか。」

2人は顔を合わさずに歩き続けた。

「ああいつところはいやでも情報が集まるからな。タレコミニ屋に接触してくるはずだ。

心配はいらない・・・が本人がどうか、誰かが差し向けた凶だと

か。ヤツのほうが警戒しているはずだ。

何をしてくるか分からねえしから親しく声掛けて来るからつて変な物受け取るなよ。」

「機械の修理請求書かもしれないもんね。」「ははつ違ひねえ。」

口元が緩んでいても小五郎の眼は辺りを見渡していた。
仕事が終わつたのだろう。たくさんの人が出でている。
・・・おっちゃんも監視されているかもしれない。
コナンもずっと尾行されているか気にしていた。

相手は軍部だろうから油断は出来ないが、今のところ気配は感じない。

「コナンはジュースでいいな。」

いきなり小五郎が走り出した。

小五郎の眼が探していたのは屋台の呑み屋。

頃合も良い時間。腹が空いてはなんとや。ひ。

暴力的な焼き鳥の香ばしい匂いにコナンのお腹も鳴らしていた。

「おやじっー、ビールとガキのジュース。それに美味しいところ4・5本みつくりつてくれつー！」

集まり出したお客を搔き分け屋台のおやじに大きな声で注文を出していた。

おっちゃんの行動を伺う誰かの視線をかわす演技なのか、本当にお酒が恋しいのかストレスの行動。

コナンは現世と変わらないおっちゃんの行動に苦笑いを浮かべた。

ガタガタガタ・・・・
グモオオオー

車輪の音が響く。

「あぶねえじやねえかつ！」

「ギャーー！」

人の叫び声まで聞こえていた。

「なんだありや？」

「手綱をしつかり引けつ！」

暴走気味の牛車が通り過ぎた。

「今は？」

2人の男が揉めていたのがコナンに見えた。

はつきりと顔を見えたわけじゃないが色黒の男がいた。

「あの幌の印は城へ野菜や果物を納品してる車じやねえか？ 何でこんな時間に？」

屋台のおやじも不審な顔で見ていた。

「ありや 樽積んでたぜ。酒屋じやねえのか？」

「樽？・・・酒なら国王専用の農園で作っているさ。国王が安酒を流し込んで飯を食つてるはずないだろ。

それにしてあんなボロイ樽に何を入れてるんだ？」

小五郎は走り出した。

「あの車を追い駆けるぞ。10年前のあの時も・・・。」

「10年前？」

おっちゃんが警備隊にいたときの事件のことだひつ。

コナンは小五郎の後を追いかけた。

「減速しねえのか？ このまま突っ込んじまう氣かよー！」

十戒のシーンにあつた海のようないが空けた真っ直ぐな道を牛車が狂つたように駆け抜ける。

コナンは科人。

時間を操る術を持っている。

時間が止まればその隙に救い出す方法があるはず。

しかし止まつた時間にどうしたらいいのかが浮かんでこない。

それにこんな人が集まる場所で使って自分の正体を明かすわけにはいかない。

他に何か手がないものか？

手綱を操る男2人が揉めている。

グウー

ギシギシギシ・・・・

綱が引かれ牛は右に曲がろうとしている。

しかし牛が引く勢いのついた荷車は荷物が重いのか慣性で曲がろうとはしない。

ゆっくりと振られるだけ。

ウモー

ガリガリガリ・・・

ミシミシミシ・・・

しかし尚牛のハミを無理やり捻りあげられ牛車は曲がりうつとした。

少しずつ車が向きを変える。

ギギギギ・・・ギギギ・・・ギギ・・・

石畳に揺られいきなりスライドした。

「ダメダメダメー！」

通行人まで悲鳴を上げる。

もう時間がない。

「なるようになるしかない・・・。」

コナンはあの時と同じように時間が止まるよつ念じた。

ガシャーン！

ギュンッ・・・ガシャガシャーン

ウモー

ギュギュギュ・・・

時間が止まる前に牛の鞍と車を繋ぐ接続部と片方の車輪が弾き飛ばされた。

過重が掛かつた勢いで反対側の車輪まで外れた。

ウモ・・・ウ

倒れた牛が苦しそうなうめき声をあげた。

その間も荷台だけが石畳を滑つてゆく。
焦げ臭い匂いと煙を上げて荷台は止まつた。

「何なんだつまつたぐ！」

小五郎とコナンがゆっくりと近づく。

1人の男が気を失い、もう1人の眼は焦点が合つていない。

「おい、西の坊主・・・か？」

小五郎が頬を張るとその手には黒い染料が付いた。

「もしかして？木さん？」

「コナンの口は塞がれた。

「すみません毛利さん。理由は後にして警備隊を呼んでもらえませんか？」

「もう呼んでるよ。それにしても黒く塗れば良いくてもんか？」

屋台のおやじを指しながら言った。

「だぶん。下を向いていれば誰も気が付かないだろ？から・・・。

「色が黒いことに目が行つて意外と見てねえもんか。

それよりこの樽が爆発するんじゃねえかつて心配してたんだが。」

「それは重要な証拠品。そのまま警備隊に持ち運びたいんです。」

「ふうん。オレにも見せてくれないか？」

「後で・・・毛利さんは事件に関わっているんですから。」

自分の顔を指差した小五郎に高木は頷いた。

コナンは壊れた荷台を見直した。

弾丸が正確に撃ち込まれている。

「こんなことが出来るのは。」

一瞬思い浮かんだ顔。あの鋭い眼光。

「あの男？」

鬼と遭遇した時のことをふと思い出した。

「ここにはオレ達の生きる世界と別物。アイツは何者なんだ？何の目

的でオレに関わってくる?」

辺りを見回してもニット帽は見つけらなかつた。

現場は由美さんに似た女性警備隊員が人々を誘導している。
しかし人だかりはなかなか減らない。

その人ごみを搔き分け恰幅のいい男が報告を受けていた。
コナンが眺めているとこっちに気が付いたのか歩み寄つてきた。

「毛利くんがいたのか・・・君の昔馴染みのタレコみ屋が一人殺された。詰め所まで付き合つてくれないか。」

「えつ！・・・わかりました。」

小五郎は後ろをついて行く。

コナンも一緒に促されるまま馬車に乗つた。

「毛利くんはまだあの事件を追っているのか？」

仕方なさそうに日暮が言った。

連れてこられた詰め所の隅の応接セットで3人は顔を合わせた座っていた。

2人の前にお茶が、コナンの前にはオレンジジュースが湯のみに入れて置かれる。

持つて来てくれた高木は日暮の後ろに立つたまま話に混ざっていた。

「ライフワークってヤツですか。」

「君はもう警備隊じやないんだ。それじやなくともあの件は・・・。」

「1人で追うな、オレ達に任せろでした。でもオレの仕事が終わっちゃいない。」

小五郎はテーブルを叩いた。

熱いお茶の入った湯のみが揺れた。

「君が警備隊を辞めたその時点で終わつたんだ。もう君の手を離れただんだ。」

「ああ警備隊じやこれ以上捜査が出来ないから止めたんだ。事実捜査はあまり進んでないでしよう?」

「君の足跡を消しながら我々が捜査してるのを気が付かんのかつ! 今度は日暮がテーブルを叩いた。

また湯呑みが揺れる。

コナンは急いで田の前に置かれた湯呑みを手に持ちグラグラさせた足をソファーアに乗せた。

「今度は子供まで巻き込んで・・・高木頼むが・・・。」

「ナンは高木と一緒に部屋から出ていった。

最後の悪あがきでドアに耳をあてていたコナンだが抵抗も続けられず、休憩室に連れて行かれた。

子供の姿では仕方がない……しかしそれでは済まない。

今も城内で服部も灰原も戦っている。

「あの……高木さん。」

「なんだい。」

高木は返事をしながら部屋の鍵を締めた。

「これで誰も入ってこない。安心して話ができる。」

「えっ？」

「君には話しておかないとと思うんだ。」

振り返った高木は神妙な顔をしていた。

「まずは服部くんは無事だよ。そして君の捜していた少女が彼と一緒にいるから。」

「……よかつた。」

信じていたコナンだが見てきた彼の言葉に胸をなで下ろした。それについて灰原はどうやってあの部屋から出たのだろう？
まだ狙われる危険がある。そして姉を人質に捕らわれているだけに安心は出来ない。

「日暮隊長には内緒だけど、君には話しておいたほうがいいと思うんだ。」

高木は神妙な顔で話し始めた。

「話すって……。」

「10年前のことだよ。」

あっけにとられてるコナンを前に高木は話し始めた。

・・・・・

「いいか毛利くん。相手は軍だ。当然我々に田を光らせていい。当時の仲間も捜査の最前線から外され大半は監視されながら仕事をしている。

我々でさえこんな状態だ。君一人で思い通りの捜査が出来るはずがないだろ？」

コナンが退席したのを確認すると田畠は口を開いた。

「しかし・・・このまま引き下がるわけにはいかんのです。」

小五郎は言った。

田畠が自分の身を案じてることは痛いほど分かる。それはこの年間無事でいたことが何よりの証拠。

しかしそれは田畠の立場を苦しくさせているのも事実。

だからこそ一気に決着を付けたかった。

「・・・・・ そうか・・・・・。きれいな奥さんと別れてからの時間すべて使つてるのか？

この件は我々警備隊に任せ、そろそろ戻つてもいいんじゃないのかね。」

「まだ解決していない案件ですよ。オレはこのまま引き下がるわけにはイカンのです。」

「蘭くんも・・・巻き込むぞ。」

昔の部下と上司。家族ぐるみで付き合いがある。奥さんと別れた理由の一つは知つている。

「それは・・・分かつてます。時期が来たら蘭のことはアイツに任せることもりです。」

「君は腹をくくつたということか。」

田畠の言葉に小五郎は黙つて頷いた。

「・・・ そうか。」

田畠は田を伏せた。

「本来なら捜査に君を参加させるわけには行かない。しかし残念ながら君に協力してもらわなくてはならなくなつた。そ

のために君の覚悟を聞いておかないとな。」

日暮は言った。

「もちろん協力させて頂きます。・・・それで亡くなつたというタ

レゴミ屋というのは？」

「君もわしもよく知る人物だ。」

「それじゃ・・・やはりオレとコンビを組んでた・・・。」

「彼だつた。・・・あれからもう10年も経つんだな。」

「10年・・・あの軍部も今のような組織になる前の防衛軍だつたんでしたね。」

あれから・・・あの日から強大な組織に生まれ変わつた。」

「なんですかこれはつー」れじや警備隊の存在価値は何なのですか。

「

10年前のある日、警備隊の本局では捜査官たちが大きな声をあがつた。

軍が再整備が議題に上がつてから、その特殊性から警備隊との管轄の線引きでかなり揉めた。

しかし国王の一言で上層部は言われるまま、警備隊総司令官は引き下がつた。

鬼というとてつもない強大な敵には今までは無理だという事は誰の目にも明らかだつた。

しかし現場はかなり混乱していた。

捜査権が限定される。今追つていた事件を最後に大きな案件はすべて軍に委譲される。

今まで民の生活を守つてきたプライドは簡単には捨てられない。

そして兵器を使った強制的な手法。それは新しい恨みを買つ。

恨みが大きいほど相手も手段を選ばなくなる。

「これでいいのでしょうか？軍は軍です。鬼に対する防衛だけじゃいけないのですか？」

隊員たちの疑問は答えをもらえないまま新しい法律が制定される日は迫っていた。

新国王が王冠を授かり神に誓つお告げの儀式の日に法律の制定式、及び軍のお披露目が行われる。

その日が警備隊が国王の警護をする最後の日。

警備隊の強行犯担当もある事件の首謀者を追つていて、組織されたばかりの軍部と関係があると睨んでいたんだ。

しかし正式に制定されるとその事件は軍に捜査権が移つてしまひ。長期にわたつて捜査が続けられてたため、これを最後に引退する警備隊員もいた。

特命を受けた日暮隊長もさりぎりまで捜査するために儀式の警備に紛れ込ませていたんだ。

もちろん小五郎も殺されたタレコリ屋も紛れ込んでいた。

新国王は神のお告げを聞き、神によつて新国王として正式に承認された。

そして民の前で宣誓した。

さらに民が不安を抱いた軍の設立についても述べた。

権力を持つ組織がいくつあるうと国王の名において掌握すると。

実際は警備隊の行動範囲は削がれ弱体化させる方針は準備されていた。

しかしそんなことはまだ民には知らされていない。

そこで軍の猛者を相手に不思議な術を披露してその力を見せ付けていた。

歓声が湧き上がる。

誰もが新国王に希望を湧き上がらせていた。

王が退席するときに小さな女の子が直訴した。

あたしを軍に入れてくれって。

鬼によつて両親を亡くしたから敵をとりたいつて。

王は宙から花を取り出し彼女に与えた。

「本当の戦いはこの命を大切に生き抜くことだ。」

集まつてた民は皆、国王に祈りを捧げた。

しかし1人だけ王を睨みつけてた男がいた

男は祝いの日に余興に呼ばれていた大道芸人。

なぜ祈りを捧げないと警備していた兵が聞いた。

「トリックで民の目を欺いてはこの国の歪みは直せない。」

王を蔑んだ言葉に躊躇いも無く兵は銃口を向けた。

「兵隊さんがこの祝いの席を血で汚すのかよ。」

紛れ込んでいた小五郎の言葉に銃は収められた。

まだ軍に捜査権が移つてないのが幸いし、男はその発言で身柄を警備隊預りとなつた。

連行及び取り調べは現場にいた小五郎に任された。

「このところ白い盗賊団は現れないな、中森。」

「まったくだ。捜査権が軍に移る前に仕事をすると思つてたんだが・
・・くそつ！」

小五郎が詰め所で男と顔を合わせると廊下から声がした。

あの声はいつも以上にイライラしている同期の中森たち。

顔を合わさなくてホツとしている男の口元が初めて緩んでいた。

「まったく死にてえのか？文句の1つも言いたいだろうが場所を弁えろつてんだ。」

薄暗い取調べ室はそれだけで威圧感を与えるもの。

男の感じが変わつたところで小五郎は話し始めた。

「人を楽しませ驚かすトリックを権力の象徴に使われるのがやりき

れなくてね。」

男も素直に答えた。

「国王のあの儀式がショーカ。確かにそつ思つぜ。」

しかし宙から花を取り出すなんて術は本当にあるんだりつよ。」

「本物の術は驚く暇さえ与えないものだよ。」

「ほお～つそうなのか？オレはよく知らねえけど今回のあれはやり過ぎだ。」

「警備隊員がそんなこと話してもいいのですか？」

「言つたろう、場所を弁えりつて。軍の兵隊さんがいとこひじやなきやお咎めなしだ。」

上司の悪口なんて酒のツマミにかかせねえものだぜ。」

国王は1番立つんだからそんなことまで気にしてる暇があるなら他にやることがあるだろ？ぜ。」

小五郎は笑いながら言つた。

「あなたは面白い人ですね。」

「あんたもな。」

警備隊の直感つてヤツかな。悪意のある者とそうでないもの。オレぐらいになると匂いでわかるもんさ。はつはつはあ軍は一律にしょつ引くけどオレ達はそつじやねえ。ここを出られたとしても気を付けるんだぜ。

あんたのような大道芸人は民を楽しませるのに毒舌の一つや一つ口にするもんどう。」

そんな落ち着いたトーンで話されたら冗談にも聞こえず密も納得させられちまうかもしけねえがな。

それも自分の世界に迷い込ませるつていうプロの話術つてやつなのかもしけねえな。

「まあ不快に想う人もいるでしょ？」

男は誰かを思い出しながら言つた。

「まあな。でも人気商売だから全く無くすわけにいかねえものな。」

「確かに。」

小五郎と男は変に馬が合つたのかその後もいろいろ話していた。

留置場に一泊すると、軍も承諾し過去に犯罪歴もなく今後も可能性も低いと判断され男は釈放された。

「あなたで助かりました。ありがとうございました。」

男は小五郎に礼を言うと宙から花を一輪取り出して渡した。

「えっ・・・どこから？」

周りにいた全てのものが驚いた。

国王の術は特別な者のみが授かる神の力。

男も同じく神に選ばれた存在なのか？それとも・・・

その疑問に答えるように後日軍部から報告があった。

神のような特別な力を持つ者がいる。

科人と呼ばれるその者は鬼を操ることができるために手出しが出来ない。

鬼を退治するのが軍の表側の理由。だから救護隊も軍に属している。しかし元凶の科人を捕まえることが我々再編制された軍部の使命だと付け加えられていた。

小五郎だけが違つた考えを持っていた。

もしかして男の言つとおり国王の術はトリックなんじゃないだろ？
か？

男と同様に小五郎にも監視がつけられていた。
男の捜査に係わったものは男に術を掛けられている可能性があるの
で部署の移動を指示された。

「何を言つてやがる。彼はオレや隊長と同じ人間だ。これは小説で
読んだ魔女狩りってやつじやねえか。」

「毛利くん！君は移動が正式に発令されるまで謹慎の身だ。
君が正常だということは我々が証明する。それがあの男の身の潔白
に繋がるだろう。しばらく大人しくしてろ。」

部下の報告を信じて いる日暮は言った。

しかし小五郎は単独で捜査を始めてまた軍と衝突。

小五郎は進退が査問委員会に委ねられた。

できるだけの擁護はしても軍が相手ではどうすることもできなかつた。

その単独行動を許していた日暮隊長も訓戒や減俸だけではすまなかつた。

そのとき科人と疑われた男が爆発に巻き込まれるという事件が起きた。

陽も傾き暗くなつた部屋に平次は灯をともした。

ここは警備隊に許可が下つた例の書庫の部屋。まだ秘密の地下道の存在は知られていない。

沢山の本に囲まれた部屋は姿を隠すにも都合がいい。ただ逃げ道が入り口の扉のみ。

廊下には警備の者がいるが、あの夜の惨劇を知る者には心細い体制。わずかに感じる空氣の流れに炎は揺れていた。

心の奥に潜む不安と似て、時に大きく揺れていた。

城に忍び込んだ軍の暴發を知る民間人。

仕方なく城から解放するとしても監視付きの可能性もある。それでは閉じ込められていた哀まで連れ出すのは難しい。彼女の正体を知る者としてはコナン以外の他の者に傍を任せられない。

代わりに城を出た高木さんは大丈夫だろうか？

しかし城の外には彼と同じ警備隊の仲間がいる。心配ないと強く思えばその願いは叶うはず。

工藤が消えてからの足で稼いだ情報は少なすぎた。

今は彼女を守りながら、この地下にある秘密の通路が使えるうちにここにある情報を手に入れる選んだ。

「10年前にご神体を調査していた歴史研究者が行方不明になる事件が起きて、

警備隊は日暮隊長を中心とした捜査本部を立ち上げたそや。」平次は哀に背を向けたまま話を続けた。

「捜査中に研究家が集い共同研究を行つて富沢コンサルンの

施設が爆破された。

警備隊は爆破事件の容疑者を割り出して、背後にいる黒幕を特定するために泳がせとつたようや。

タイムリミットはこの検査権が軍に移行するまで。みんな必死だつただろうと思つで。

当時の話は全容を詳しく調べてきた白鳥隊長から聞いていた。しかし保護された少女には知らされていない。

彼らは彼女の見かけと実年齢が違うことを知らない。城にいる平次にとつては書庫の資料を読み漁る彼女にも状況を知つてもらいたかった。

哀は座り込み、資料を読破すること急いでいた。

お姉ちゃんをあそこから助けるにはどうすればいいのか？

そして薬の存在を恨むベルモットがなぜ薬を手に入れたいのか？ いくらお姉ちゃんを助ける為とは言え、あの薬を作るわけにはいかな。

それにはこの世界に来てまで彼に人殺し呼ばわりされたくもない。平次の声を耳に入れながらも田は詩のような文章を追つていた。

「毛利のおつちゃんは放つて置けなかつたんやろうな。

民の誰もが集まる儀式だから警備隊の人間がいてもオカシクはあらへんが、

おつちゃんの検査方法が荒っぽいんで軍関係にも顔が割れるとし、男を連行しなければ余計に兵が怪しむからだつたんやが・・・。でもこれがキッカケになつたんだと言つとつた。

国王だから術が使えて当たり前と思つとつたのにあの男はトリックだと言つ。

今まで国王の傍で神に仕えている神官が嘘偽りを言わないという固定観念が消えていったんや。

それまではこの世界には神に使える選ばれた人間を疑うという観念

が無かつた。

オレかでそうやつたもんな。この世界に生きる者には当然のことだつたから。

調べ直して行くとあの男を科人だと報告書を送つてきた神官が事件に係わつてゐる可能性がでてきん。

そしてまた爆破事件が起きた。」

「まだ爆破事件が？」

哀は読み終えた本を閉じた。

「あの男のショーカーの会場で舞台を囲んでいた樽が爆発して見物客まで巻き込んで男の身体は消し飛んだ。

しかしタイムアップ。警備隊はその事件の捜査権を軍に剥奪されてもうた。

捜査権が軍に移ると舞台の真ん中にいた彼は遺体未確認のまま死亡が確定され、

前の一件と同一犯だとして我々がマークしていた男が爆破犯として軍によつて逮捕。

でもその容疑者はずっと警備隊員にマークされていたからその日のアリバイは明白やつた。

しかしその証言は軍によつて揉み消され、張り込みをしていた隊員は難癖をつけられあつちゃんと一緒に免職させられたんや。

その捜査員は情報屋となつて、今まで警備隊に情報を流しておるそうや。

今回も宝玉が偽物じゃないかつて情報を流してもうつて高木さんが城に潜入したんやと。」

「なるほどね。でもその男が白い盗賊団だといつの？彼は思つてゐるより若かつた。そうね・・・あなたくらいかしい。」

「・・・逢つたんやつたな。」

科人はこの世界にいた人物が若返つた姿をして現れるのかもしけないと思つてゐる平次はそつけない。

「それよりどうしてあなたがわたしの保護者なのかしり？」

哀はいつものような落ち着いた口調で言った。

馴染みの顔をしていても、同じ声、同じイントネーションであつても西の彼ではない。

言葉を交わしていくもまだ気を許せないでいた。

「しゃあねえやんか。工藤が戻るまで面倒見たる。」

「工藤つて・・・そうね。幼い子供を調査の重要資料を自由に閲覧させるとかのわけ無いわね。」

「そうや。坊主の正体は現世の工藤。」
「神体に現れた神の使いつて男の所為でオレに正体がばれてもうた。
もちろんねーちゃんの正体も知つとる。工藤のよつて偽名を使いつてるんやろ。

そういうこと人に話すわけにはいかん以上、オレがなるしかあらへんやろ。」

平次は頭の後ろに手を組んだ。

「・・・知つていたのね。それであなたはいいの？」

「わたしは危険だつてこの本にも書いてあるんだけど?」

「危険つつうか女やから工藤より丁寧に扱わなならへんな。
でも工藤とねーちゃんの目的は同じやろ。工藤の仲間ならねーちゃんもオレの仲間や。」

「まったく現世のあなたとあまり性格は変わらないものなのね。やつかいなことに顔を突っ込んでくる。」

ため息混じりな答え。

「そなんか? オレつて現世でもそんな役回りしてるんか。

あつちの自分も工藤やねーちゃんに苦労してんやな。向こうに戻つたらあつちのオレを大切に扱つてくれへんか。」

「ふう・・・考えておくわ。」

哀は手を広げて答えた。しかしその口元が緩んでいた。

「それでわたしは何をすればいいのかしりっこの事件はかなり深いわよ。」

「ねーちゃんは何か知ってるんか?」

今回の一件にはベルモットが絡んでいる。彼女なら綿密な計画を立てている筈。

しかし今はメガネの彼以外には話せない。

哀は黙つたまま首を振つた。

「・・・今は言えへんのか?まあ・・・ええか。」

平次も無理強いはしない。

「今回オレが消えた工藤を捜してて出会つた坊主が小さなつた現世の工藤やつた。」

宝玉を狙つ盗賊が忍び込んだ城には高木さんが潜りこんでその宝玉の捜査をしておつた。

出会つた坊主が捜してたねーちゃんは軍が暴発した城に閉じ込められていた。

・・・はつきり言つて今回の件はどうなつてゐるのかまさつぱりや。それぞれが別々の目的で動いていたけど偶然に重なつたなんて思へん。

何か全て繋がつてる気がしてならへんかつた訳は、

最後にねーちゃんに読んでもらつた本を読んでいたからだと思い出したんや。

科人、鬼、宝玉・・・下らない絵空事に何でつて思つやうがその本の監修を見たか?」

平次は本の後ろを見るように促した。

「監修・・・えつ博士?」

羅列された名前の中に阿笠博士の文字。

「それは神官を辞めて消えた男の名前。素性を隠して街で静かに自分の好きな研究を進めておる。」

「彼が何かつ!?」

この世界の博士でもやさしい顔の人物には黒く染まつていて欲しく

ない。

「分からん。それは工藤と高木さんが調べてるだろ。」
高木さんを通して城外の警備隊に行方不明の黒服の男を追つてもろ
うてる。

城内では調査団があの事件の真相と宝玉の謎を追つてている。
そこでオレとねーちゃんはこの世界の工藤が閉じ込められてる場所
の手がかりを調べるつもりや。」

「工藤くんが閉じ込められてる?」

哀はまだそれは聞いてない。

「ご神体にこの世界の工藤が閉じ込められてんのが映つた。
哀もお姉ちゃんが閉じ込められているのを見た。
確かに目的は同じ。

「詳しいことはわからへん。

しかし神官たちは2チーム別れて研究を行つとつた。

1つはよくわからん物体を作ろうとしてるようだが、もう1つは神
の道と呼ばれる場所を捜していた。」

「その名前は確か……。」

哀は閉じた本のページを捲つた。

「神の道。科人や行人がこの世界に訪れるために使つた道。ご神体
の向こうの世界といふことや。

その本にも出てきたやろ。」

「満月の夜 罪を犯したる者 天に道を作り 真紅の高き塔に身を
隠すべし・・・。この部分ね。」

哀は本を読み上げた。

「ねーちゃんが閉じ込められていた塔の屋根の色は紅。盜賊も十三
夜に宝玉を奪いに来ると予告しつた。
事を起こす満月までまだ時間があるといふことなかもしれへん。
それならベルモットがワザと哀を解放したのかもしれない。
どういう結果を招こうとも時間は限られている。」

「分かつたわ。あなたに言われた資料は全部目を通したけど、ご神

体と宝玉の関係を調べる必要があるみたいよ。
でもここに居ても始まらないわ。」

「ああ、黒服の男が使った天井裏の道は調べてある。
どこでも連れていったる。」

「それじゃ宝玉を保管していたと言つ広間に招待してくれるかしら。」

「よつしゃ。行こうか。」

平次は袴の手を引いた。

くじりです。

形は出来上がりっていたのですが、いろいろとありまして遅くなりました。

忘れられてたかも。（苦笑）

ゆっくりですが続けて行きたこと思つてます。
ようじければまたお付き合いくつぞこませへつ。

「僕を連れて捜査？」

「ああ。毛利さんとは別件だけどね。」

事件の流れで過去の話をしていた高木が意外な提案を出した。
あの夜あの場所にいた彼が城内に設置された調査団から外されたとは思えない。何か策を高じたのだろう。

それよりも捜査に関わる情報を幼い少年に話してくれる理由をつづり、やのまで済むわけが無い。

次に来る言葉を待ち構えていた。

「僕が城に潜りこんだ理由を忘れたのかい？」

高木の科白はコナンの予測を外した。

現世の彼もいつも一生懸命だった。

彼がどこまでコナンの正体に近付いているのか？

現世の彼より以上にこの世界の彼の前では注意しておかなければならぬだろう。

「城にある宝玉は偽物だつてことでしょ。それは城に居ないと調べられないんじや？」

コナンは警戒しながら答えた。

「儀式には宝玉を使わなくてはならないと既に擦り込むために利用されたんじやないかって考えたんだ。」

毛利さんと同じ発想だよ。

事実、あの書庫で調べても更に昔には宝玉が儀式に使われた記録は残されていなかつた。

「神の崇高な雰囲気を醸し出す為のアイテムに過ぎないと思つんだ。」

彼は書庫にいろんな資料を調べてきたのだろう。

確か牛車の樽に城から運び出した資料があると聞いていた。

「・・・宝玉つて初めからあつたのかな？」

コナンはふと漏らした。

「僕はまだ小さい頃だつたからすゞいとか思つて儀式を見ていたけど・・・ショーアップならそうかもしけないね。

そこから始めなくちやならないか？うん。

城の中は調査団が結成されていて思い通りに動けないよ。城外なら尚更さ。大人数で動くと相手に読まれるからね。宝玉の件は単独で動くつもりだつたんだ。

でもこの聞き込みに同行させて欲しいと服部くんから頼まれてね。」

コナンは高木を見た。

彼は敵の組織の強大さを理解しているのだろうか？

そろそろ本題に入るのか？警戒しても彼はただメモを確認していた。「高木さんが子供の頃だから・・・少なくとも15年くらいは昔だよね。かなり昔から関わっている人物に宛はあるの？」

コナンの頭には1人の人物が浮かんでいた。

「まあね。服部くんと日星を付けて来たからね。」

「・・・服部・・・の兄ちゃんから何か聞いてるんだ？」

「あの場所にいた彼は未公認でも調査団の一員だからね。僕にとつて君も最年少メンバーさ。」

高木は少し苦笑い気味に言つた。

彼も向こうで捜査を進めているだろう。

コナンが城の外からでも真実に向かえば、彼も必ず同じ答えを掴んで再会できるはず。

「そろそろやな・・・。」

・・・・・

書庫を飛び出した平次と哀は天井を這つ通気配管の中を移動していった。

城内は勿論、大広間も変わらぬ警備体制。しかし合同調査の性質上、現場の軍との腹の探し合いが優先され、盗賊が出現したにもかかわらず強化するなどの措置はとられてなかつた。

手探りで位置を確認していた平次は通気管の壁に金属片を差し込んだ。

ゆっくりとなぞるよつて慎重にスキマを滑らせ、指に伝わる感触にて神経を集中した。

「よつしゃつ・・・ほな行くで。」

哀に送る合図とともに、金属片の先を抉るように突き立てた。

パン・・・

ゆっくりと点検用の窓が開いた。眼下には広い玉座の間が見渡せる。小さな音にも警備が反応するかもしれない。

平次はゆっくりと廊下に繋がる扉を見た。

「誰も来ないようね。」

「盗賊に入られたばかりだつちゅうのに当てにならん警備やな。」

「こつちにとつては好都合でしょ。」

哀に急かされて平次はロープを垂らした。

先に下りた平次が辺りを警戒しても何も起こらない。

暗い大広間の一段高くなっている場所にぼつんと王の座が置かれているだけだった。

「玉座の間つて言つのに宝玉を置く台と椅子くらいないのかしら?」

「いや、あの夜も特別な物は何もあらへん。だだつ広い部屋やから賊が隠れるところはあらへんかったからな。」

「暗かつたけど見間違えるはずはない。」

「それじゃあなたは宝玉を見たの?」

「置かれてたのはまんまるガラス玉のよのやつたな。
でも盗賊が偽物だと言つててん。」

「つまり本物は見ていない。本物を見たことのある者はいるのかし
ら?」

「それなら……現場の兵士じやあてにならへんな。もつと上の神
官……やはり軍上層部が関与してゐんやな。」

平次はため息をついた。

そしておもむろに台座に触れた。

「この洒落た台座一個のためにこんなにぎよつせんの監視を付ける
なんて軍も触れて欲しくないと見え見えやな。」

「どうしたの? 見惚れるほどどの細工でもされてるのかしづ。」

じろじろと台座を見る平次に哀が近づいた。

「見てみい。あの夜は暗くて気がつかへんかったけど、これって琥
珀つていうんやろ。」

平次の後ろにいた哀も乗り出しへ見た。
そして辺りをもう一度見渡した。

「この部屋の床も柱の一つ一つにも琥珀が埋め込まれてゐる。」

「ここは玉座の間やし、そのくらいカツカツけるやう。しかし見事
なもんやな。」

平次は惚れ惚れする細工を一つ一つ見て歩いた。

「もしかしてこの部屋は城の中心にあるの?」

「そうや。」

平次の返事に哀は考えをまとめた。

琥珀……あの夜彼と盗賊と話していた時浮かんできた言葉。
黄色い半透明の樹脂の化石。

絹で擦る事によつて不思議な力が生じたことで最初に認められたこ
とで電気の語源となつたと聞く。
やはりこの城で使われるエネルギーと関係があるのかもしれない。
そして琥珀の中に閉じ込められた虫は永遠の夢を見るという。

「永遠の夢・・・。」

哀の頭に一つの言葉が引っ掛けた。

「別に変なところへんな。御神体みたいな石もあらへんし壁もきれいなもんや。」

平次は壁を叩いた。

「そんなことしたら外に聞こえるわよ。」

哀は平次の腕を掴んだ。

「そやな。さてと田舎じこものはなさそりや。次行こうか?」

「ええ。」

哀は垂れ下がっているロープを昇る。

「それにしてもあの盗賊はどこから情報を仕入れているんやろか?」

そのロープを押えていた平次はぼやいた。

「早くしないと置いていくわよ。」

「あの姉ちゃんは意外とキツイやつちやな。」

平次も急いで通気口に戻つていった。

・・・・・・・

高木は確認するかのように見ていた手帳を仕舞うと胸のうつむきを話しが始めた。

何かに区切りをつけたように顔つきが変わった。

「城から消えた少年・・・君のことは『メディア』に隠されたままだ。」

君が彼らにとって不利益なモノを持っている。それは君が捜していった少女も同じ。

服部くんは君がまた城に潜り込むことになるだらうって言つていた。

それまで君の代わりに自分が少女を守るから、代わりに君と一緒に捜査をして欲しいって。

僕も君を保護する必要がある思つし、警備隊が監視に付くと言つたんだが彼は僕を指名してきた。

・・・本当ははつきり言つて・・・迷つたんだ。

今の状態で少女を城から出す事が難しいと判断したことには彼も納得していた。

それなのに・・・城から出られる彼が残ると言つのは我々では少女を守れないと思っているからなのかとか・・・彼がいくら剣術の達人であつても火器を使うあの夜のような戦いには難しいことは誰の目にも明らかなのに。

小さなプライドが目を曇らせていた。君を保護すると約束しても実行するのは君を知らない誰かだつてことに気が付かなくて。

君の代わりに彼が少女を守るから君を知る僕だから託したんだつて。あの夜運命共同体なんて言つたことを思い出すのにタイムラグがあつたことが情けなかつた。

「話は子供相手に言つ事じゃない。

「高木さんだつてメディアに隠されたあの事件の現場にいた1人でしょ。

平次兄ちゃんと同じものを見たその日は他の警備隊員に無い大切な情報だよ。

立場を越えてぼくらに情報を流してくれた。必要だと思えば規律も破れる、形に捕らわれない高木さんだから託したんだよ。」

コナンは答えた。

「あのときは状況が状況だからかもしれない・・・こんな僕にも警備隊員というプライドつてものがある。

また小さなものだけど、これを抑えることが意外と難しいもんだと気が付いたとき恥ずかしくなつたよ。」

「誰にでもあるよ。・・・でもプライドはいつのまにか慢心を生む。

「子供のクセに人生経験がいっぱいを感じだね。」

「・・・そんなことないよ。」

彼に語られると自分と照らしあわして考えてしまう。

慢心・・・油断・・・それがこの運命の始まり。

「・・・あの夜出会った君と服部くんの信頼関係が理解できないでいた。

そして今日も君を毛利さんが同行させて捜査をしていた。

ただ付いてきたと言つてたけど、普通・・・危険を伴う捜査に係らせるわけにいかないよね。

関わる人たちは君に協力するのか?・・・と言いながらも返事も聞かずに僕もこうして捜査の情報を漏らしているか。

みんな君に何かを感じてるんだ。

誰もが周りの人を、自分を取り巻く人を信じられなくなることを恐ろしく思つてゐるはずなのに、

その僕が協力してくれる仲間を信じられなくていいのかつてね。

この世界の流れに逆らうつもりがいつのまにか流されていたのかな。軍部の人間と合同調査なんて実のところ鬱陶しくて仕方なかつた。

しかし彼らも彼ら自身の體を出そうしてゐる。

この世界は異常だよ。その流れに僕も染まつたいたみみたいだ。」

高木は深く考えながら話す。

「科人だとされた彼が死んだ後も鬼はこの街に現れた。

毛利さんは警備隊をやめて、なんでも屋になつた後酒に酔つたまま軍に食つて掛かつたよ。

『彼が科人だつたのは嘘じやねえのかつ!証拠を見せろ!?』つて騒ぎを起こしたんだ。

証拠は公開される筈がない。科人は1人じやない。彼らの正体を暴く手法が公になれば彼らも警戒するからとね。

おかげでどこにいるか分からぬ科人を排除しない限り鬼が現ると

民の誰もに知られることとなつた。

それからも人が街から消える事件が起きている。それが誘拐事件か失踪事件なのか分からぬま。

失踪事件として我々が捜査をしてゆく軍の影がちらつく。

しかし未だ科人を捕らえたという報告は無い。

「人が消えたなら民が騒ぎだすんじゃ？」

高木は首を振つた。

「そうはいかないんだ。

この国は西からも人がやつてくる沢山の交流の中心だし、行人がご神体から現れて集まる場所もある。

旅人はこの街を駐留して出て行くし、行人は判決を受けてこの街を去つて行く。

だから住人の素性を虱潰しに調べるのは困難なんだ。

隣に住んでいる人が科人ではないかつて猜疑心が生まれる。得体の知れない科人の存在が怯えた人々の口を塞ぐ。

しばらくすると疑わしいと噂された人物はもちろん、その家族や身近な関係者までも一夜にして姿が消していった。

ある者は神が怪しきヤツを葬つたとありがたがり、ある者は権限を取り上げられた警備隊が近所で極秘捜査を行つたと付き合いのある隣人をも疑う。

このままでは・・・ヤツラの行動が我々を、他人を信じられなくなるという最悪のシナリオが進んでいる気がしたよ。」

「・・・」

コナンの言葉が途切れた。

手を下した組織によつて全てが消され、その声は聞こえない。

・・・手口が黒の組織に似ている。

「消されれば科人だという証明はできない。ただその人物が軍に盾突いた事実を見つけた話を聞いた。

毛利さんは奥さんと別居して自分を餌に犯人を釣ろうとしたんだ。

自ら囮になつて眞実を見つけよつとしてたんだ。

奥さんと蘭さんの保護を頼んでね。けれど蘭さんは父親から離れた。

子供でも感じる部分からそうさせたんだね。

けれど軍に目をつけられてるのは変わらないから我々の仲間がこいつそりと彼に付いていたんだ。

それを知つてか無茶な搜査を控えていたが、今日仲間のタレコミ屋の男が殺されたと報告があつた。

我々のミスだ。もつと組織としてのやり方があつたはずなのに。」

高木は下を向いたまま。

「旅人が集まれば噂が集まり秘密結社などの名前が誰もの耳に入つてくる。

さらに民の不安を沸きたてる。

その情報が嘘がどうか国王が神の名の元に排除する。その現場を任されているのが軍部だろつ。

賑やかな街の情景とは裏腹に闇はもつと深いんだ。」

高木はため息をついた。

燐燐と輝く光で出来た影はくつきりとした黒を地に焼きつける。コナンも静かに息をはいた。

「・・・この搜査は危険が伴う。覚悟はいいのかい?」

「大丈夫だよ。高木さんは肩に力が入りすぎるよ。僕は・・・運命つてヤツに悲觀になつてないから。」

肝の据わつたコナンの態度に首をすくめた。

幼い子供が恐怖を知らないのとは違う。

その雰囲気は彼の知る頼れる男の姿と重なつて見えた。

「それじゃ、元神官だつた阿笠さんの家に行こうか。こんな僕だけど仲間として力を貸してくれるかい。」

「うん。」

確かに彼に親しい服部と2人では状況によって落とし所を失つてしまう危険がある。

日暮隊長やおっちゃんでは話してくれないだろ？

立場が明確にできて、警備隊の組織の末端の彼ならまだ方法がある。

コナンは返事とともに立ち上がった。

詰め所を出ると待ちくたびれた黒と黄色のシマシマが欠伸をしていた。

周りを囲む警備隊員が近づくと威嚇を忘れずに主の友を待つていたのだ。

「ハンシン待つてくれたんだね。」

コナンは背に乗つて撫でる。

嬉しそうに体に似合わないカボソイ鳴き声をあげた。

「ちょっと・・・・コナンくん？」

「高木さんも早くっ！」

高木は囲む警備隊員に済まなそうに頭を下げ、オッカナビッククリ跨つた。

ハンシンはコナンの合図に立ち上がり歩き始めた。

「なつ・・・なかなか・・・良い乗り心地だね。」

高木は「機嫌を取るかのように撫でながら言う。

ハンシンも気を好くしたのかスピードを上げた。

「ちょっと速くないか？・・・・一応制限速度つてものがあるんだけどさ。」

高木はコナンにしがみ付いていた。

「大丈夫でしょ。ハンシンは牛車じゃないから。」

「あのね～！」

「それより他に何か、直接じゃなくていいから気が付いたことはな

かつたの？

「・・・服部くんはあの晩に軍部の者ではなさそりな黒服に身を纏つた男と出会つてゐるんだ。

あの夜に僕等と盗賊団と軍・・・それ以外にも誰か居た。その者たちはもう城を抜け出しているようだが、軍上層部と繋がりがあるようなんだ。

軍の資料さつきの牛車で持ち出した軍の資料を使って、田畠隊長を中心としたメンバーで捜査を行うことになる。

さきと今頃は毛利さんに捜査に参加するよつて話している筈だよ。」

高木はコナンにも捜査方針を漏らした。

はつきりと言えないが服部の見た黒服の男の心当たりはある。鬼と遭遇した時に見た二ツト帽の男がいるとなると・・・それはやはり。

危険だ・・・そつ思えて仕方がない・・・しかし・・・合法的に銃を持つ警備隊員がいるといないとでは大違い。

それでもあの男が関わっているのなら死をも覚悟しなくちやならない。

「コナンの口元がきつと引き締まつた。

「やつぱりな。君を見るとある少年を思い出すよ。

これからは危険を伴う捜査になる。だから迷わず僕を頼つて欲しいな。」

「うん。高木さんとぼくは運命共同体だからね。」

「運命共同体ならもう少しスピード落としてくれないかな。うわあつ前から暴れ馬がつ！」

高木は叫びながら言つた。

ハンシンは快調に飛ばした。

博士の家はこの街の外れ。

陽が消えようとするトワイライトの寂しい光が急かす筈の家路を急ぐ人影は疎ら。

闇の始まりにハンシンの影も吸い込まれていった。

しばらくするとハンシンが驚いて急にスピードを落とした。

「どうどうしたんだい？」

「前が何かで塞がっているんだ。」

コナンの後ろから高木は目を凝らした。

大きな牛車を横にして道路を封鎖していた。

その周りには大きな身体の男が数人立っていた。

「停まれっ！迂回しろ。」

男たちは軍の兵士。ハンシンの威嚇に引きつりながらも身体を張つて塞いでいる。

「警備隊の高木です。何かあつたのですが？」

「ツカエナイ警備隊があ。今日殺しがあつただろう。その犯人が逃げ込んだのさ。」

「あれは警備隊が捜査している事件だ。」

高木は怒りを押し殺して反論する。

「仕事が遅いからな！」

「捜査は進んでいる。勝手な真似は越権行為だ。」

歯を食いしばって涌き上がる怒りを押えているのだろう。高木の語尾は聞きづらくなっている。

コナンは高木のシャツを引っ張った。

「殺られた男は科人の情報を集めるから殺されたんだ。

自業自得とも言えるが、お尋ね者の科人の足跡を残させたんだんだから、犬死じやなくて仏さんも浮かばれただろうよ。」

軍人の言う通り。殺されたタレコミ屋は毛利さんの元コンビ。

10年前の一件の真実を探るための行動。

そんな軽い言葉で彼の一生を語られたくない。

「加害者が科人という根拠は？」

「上が犯人は科人に断定したから我々現場が作戦行動を開始したんだ。

まあヤツらも秘密を暴きに来た邪魔者は消しに掛かったんだろうな。だからもうおまえら警備隊から我々に捜査権が移った。

それにヤツを擁護する悪党の拠点ごと包囲したわけだ。もう邪魔するな。用があるなら迂回して進んでくれ。」

高木は荒っぽいタイプではないと甘く見たのだろう。兵士は2人を手で軽くあしらつた。

「高木さんっ。」

コナンは高木の服の裾を思いつきり引っ張った。

彼の想いは分かる。しかし・・・

「ならば封鎖した範囲を教えてくれないか。迂回したらこっちの仕事に差し障るんだけど。」

高木の前に飛び出したコナンが言った。

「子連れかよ。全く仕事熱心でいいことだな・・・が、こっちは上からの指示で閉鎖している。

科人を相手にしてるんだから、問い合わせしてくれなんて言つんじやねえぞ。

「言われてもごめんだけどな。道は自分で捜してくれ。」

こっちの話を聞くほど暇じゃないと兵士は煙草を吹かした。こいつらに緊張感はない。

「・・・「ごめんね高木さん。・・・割り込んでやつて。」

諦めてハンシンに乗つた2人は迂回路を捜しに急いだ。

「嫌がらせにしか見えなかつた・・・けど・・・。」

高木は言つた。冷静さを保てなかつたバツが悪そうに拗ねたように。

「末端にケン力を売つても騒ぎが大きくなるだけだし。」

コナンの言葉に高木は黙つて頷いた。

彼のほうが大人に見えた。

「・・・それより封鎖つて向こう側の人を避難させていないんだね。」

コナンの言う通り家には幸せそうな光が灯る。

「急いで避難させたらパニックになつて逃げられるだろう。」

「確かにそなんだけど、軍は犯人が科人である辺りに逃げ込んだつて分かつたのは顔も分かつてることだよね。

軍が介入しているんだから、いくら術が使えるからつて科人を捕まえることは出来るんじゃないのかな？」

コナンは子供らしく聞いた。

それが難しいことは科人である自分ならばと置き返れば容易に想像できる。

「ふふふ・・・いいんだよ。僕を元気つけようとそんな話をしなくても。ありがとうコナンくん。

警備隊も軍隊も科人や鬼に対しても完璧な仕事してるわけじゃない。でも僕は落ち込んじゃいなさい。」

高木は優しくコナンの頭を撫でた。

「顔が分かつてもだめなんだよ。科人は術で変身することができる。それが変装を得意とする白い盗賊団が科人だと言われる理由の1つにされてるんだよ。」

変装能力を持つ科人がいるということか・・・コナンはふと思つた。

「それじゃなかなか捕まえるの大変だね。」

でもオカシイと思わない？

高木さんは言つてたぢゃない。疑われた者を夜のうちに誰も気がつかないうちに一網打尽にするつてさ。

軍には科人を捕まえる何か方法があるんだとしてもさ。周りに悟られないようにしなくちやならないはずなのに、ここに面ますつて軍が存在感剥き出しだもん。

他に目的があるのかもしれないよ。

確かに博士の家を取り囲むように包围が続いている。暗くなりはじめた家々から明かりが灯つた。

「せつから何を捜しているんだい？」

包囲する兵士の隙間に田をやる口ナンに高木は言つた。

「抜け道だよ。」

いたずらっぽい眼で口ナンは答えた。

おつちやんに捕まるまで子供たちと工藤邸の探検をしていた。そのとき歩美ちゃんがいろんなことを教えてくれた。子供たちしか知らない地図にない道。

早々と役に立つとは思わなかつた。

・・・・・

「他にリクエストはあるか？」

平次は聞いた。

もう天井裏の配管を利用して行ける場所は限られている。

しかしそれは彼女が閉じ込められていたと言つ塔に繋がる通路と敵の本陣の前の通路など。

残つた場所はどこも近付くのは危険すぎた。

かと言ってこの姉ちゃんも素直に言つことを聞くタイプにも見えな

い。

誰かと同じで好奇心が渴き切るまで突き進むだらう。
いや・・・好奇心じゃない・・・さつきから彼女の眼から悲壮感を感じるのは何故?

暴走しそうなタイプには見えないが、張り詰めた糸が見え隠れするポーカーフェイス。

いつもと違つブレークを掛ける役目なんてできるのだらうか? 平次は哀の返事を待つていた。

「・・・もう一度・・・科人とこと話してくれないかしら?」
「まず・・・玉を使わず不思議な術を使える者と言われておる。」
「玉を使わないと術が使えないのは国王なんでしょう。」

「そうや。」

「じゃあ。あの夜警備に廻されたんでしょ。国王の顔を見た?」

「・・・名前は聞いたけど・・・見てへんな。民間人をそんなどこの警備にまわせへんやろ。」

「それじゃ国王がどこにいたの?」

「確かに・・・副長が玉座の間から国王の警護に廻したな・・・。」「どうして国王は術を使って盜賊を捕まえないのかしら? だつて兵隊も大勢いるんだし宝玉があれば・・・。」

「そう言えばそうやな? 国王が宝玉のありかを知らへんはずはないか? ちよつと探つてみるか。」

「資料を読んで感じた事は国王を崇めながらも存在感の薄さ。鬼だとか科人だとかの調査をしてくるようだけど国王の名前は出で来ない。」

「神官の代表が国王なのに体制の広報に使われているしか思えない。」

「昔はどうか分からへんが、最近は表に出てきいへんし発言も聞かへんもんな。」

「宝玉に目がいつておつたが使う本人は忘れてとつたわ。」

「あの秘書官が鍵だらうと睨んでるんやが、軍が相手となると突破口がな。・・・正面突破しかあらへんか。」

「・・・秘書官とは会ったの？」

彼はベルモットを疑つてゐる。確かに彼女が眞実に近付くための壁になるだろう。

「見ただけや。まだはっきりと言へんけど、今まで上がつてきた報告書に彼女の田撃証言だけ多いんや。あの惨劇や。どうしてもアリバイが在り過ぎると思えてならんのや。ちゅこちゅこと情報は仕入れてゐるが、これつて言つ根拠はまだなんや。」

平次は苦笑いを浮かべながら言つた。

彼も田の付け所は間違つていない。

しかし彼女の目的の1つは哀に薬を作らせるといと。一緒に行動する事は危険であつても彼が眞実に近づく近道になるはず。

それが彼を元の世界に戻す1つの方法ならば彼を援護してもうえそうな調査団の面々に賭けてみよう。

「・・・にこからは。」

「今までもそうや。気にする事やない。」

平次は哀が思つたことが通じてゐるよつて答えた。

「国王のおるフロアを調べてみるか。こやと言つときま・・・。」

平次は刀に手を掛けた。

「覚悟は出来るわ。」

哀は頷いた。

・・・・・・・

「ちよつと堀の上ならハンシンから降りて歩いた方がいいんじやな

い？」

「ハンシンはネコ科だよ。映画で電線を走ってたネコがいたでしょ。」

コナンは笑いながら言った。

運がいいのかこの辺りの住宅は平屋ではない。ハンシンを隠すくらい立派なモノが多い。

目立たないとは思えないがコソコソと博士の家に近づいていく。道を歩く住人も兵士の姿を見ない。

横の建物からタコ飯のか楽しそうな子供の声も聞こえてくる。軍に囮まれた場所から幸せな声の聞こえてくる違和感。

動き出した軍隊は上からの命令を遂行するのみ。

個人の感情は押し殺され、統一した考えの元に目的を全うする。

高木はそつ銃の弾を確認した。

コナンを背に隠し高木は銃を片手に博士の家に近づいた。2人を降ろしたハンシンは緊張感もなく顔を洗つていて。苦虫を潰したような高木の顔も気にならず欠伸までをした。陽の落ちた街はそれぞれの家から漏れる灯りでは隠れているであろう兵士の姿など分からんだろう。

だからといって様子を伺つっていても状況が変わる様子もない。壁の向こうから幸せの会話が漏れてくる。

高木の額には冷たい汗が垂れてくる。

引き金を引くようなことは軍と自分の争いに壁1つ隔てただけの幸せを争いに巻き込むことになる。

「何をするために警備隊に入隊したんだ？」

僕は人を傷つけるためじゃない……人を守るため……信じるものは何か……答えは結果でしか見てもらえない……。

お互い銃を手にする軍と警備隊は親戚のようなもの。

それに小さな銃が兵士を相手に戦力になるのか？

心の中にある正義に自問自答する時間は長く感じた。

「誰もいないね……」

いつのまにか高木の前に出ていたコナンが言った。

2人はようやく博士の家の前までやってきた。

月が丸く優しい光で家を浮かび上がらせる。

投光器もいらない明るい場所では隠れる事は無理だろう。

それは軍にも同じこと。兵士の気配を感じなかつた勘を信じて闇から飛び出しどアを叩いた。

「誰じやな？・・・君はっ！？無事でなによりじや・・・。」

博士はコナンを部屋に通した。

一緒にいるひょろつとしたやさしそうな顔の男も警戒しながらも招き入れた。

「服部くんはどうしたんじゃ？それに後ろにいる君は？」

「彼は我々の仲間とまだ城の中にはいます。申し遅れましたが僕は警備隊員の高木です。」

高木はコナンを遮り身分証明を見せた。

「そうか・・・君たちがここに来たといつことは・・・そうだな・・・」

城の中でいろいろのものを見ただろうコナンたちなら博士の正体が知られることは分かつていて。

そして警備隊員も同行させたとなると隠して時間を浪費するのを避けたかったのだと解釈した。

博士は覚悟を決めて椅子に座った。

コナンたちが博士と向かい合つて椅子に座る。

それは即席の取調室のようなもの。

博士は2人の視線を避けるように窓に顔を出す月を見た。

「1日」と月は美しい円になろうと輝いている。

「人は時の流れに逆らってはならない。身を委ね自ら出来ることをするしかない。」

わしも命を賭けて立ち上がつた皆に報わなくちゃならないのう。」

博士は歩美たちに見せた温和な顔を見せた。

「博士にはたくさん聞きたいことがあるんだ。でもその前に軍がこの辺りを囮なんである。」

科人が逃げ込んだと言つていたけど、ぼくはそうじゃないと思ひ。博士には心当たりはあるんじゃないのか？まずはここから離れよ。」

「コナンは早々に切り出した。

「軍は騒ぎになるような通り方では来んぞ。」

「状況は日々変わっています。」

城で起きた暴動で城内に警備隊と軍と会同で調査団が設置された。

軍の内部にも協力を求める者と調査団排除を唱える者がいます。

軍がどう判断しどう動くか・・・。」

組織には保身に動くものもいるはず。

過去を隠していた彼の真意を調べなくてはならないのに軍がいてはそれどころじやない。

高木は重要な参考人の博士の保護を考えていた。

「会同の調査団じやと? どうと? 軍部のど真ん中に陣を敷けたのか。」

「報道されているだろ? ことを博士は驚いて見せた。元々信じていないのだろう。」

「僕もその一人です。そして非公式ながら服部くんも加わりました。一人一人の力は微々たるものですが、これが始まりなのです。」

「何が起きるのか悲観になつて足踏みしてゐる訳に行かないんです。」「形式だけじやないのじやな。軍を相手に戦争を仕掛けたようなものじや。並の覚悟じやすまんぞ。」

博士は呴くように言つた。

「分かつてます。」

高木は強く言つた。

「しかし! こら辺で軍に包囲されないと聞いたがわしの事じやなからう。」

「そうでしょ? うか?」

「軍が姿を隠さずに強行しているのは科人が関与していふ事を公にするつもりだからでしょ。」

「軍の強行派なら疑い目を逸らすには生贊も必要だと考えてもおかしくない。」

阿笠さんは元神官。軍に過去は消せないのだから。」

高木も軍と関わって手口を考えていた。

「わしだけが科人の研究者というわけじゃないぞ。

それにわしを排除するなら闇に紛れてこつそりと始末をねておる。」

「なぜ決めつけられつ。」

「ドンドン・・・ドンドン・・・

不安定なリズムでドアを叩く音がある。

一瞬にして高木の言葉はもじろん、息遣いを残してすべての音を遮つた。

兵士なら問答無用で飛び込んできても良むやうなのに静まつたままのドア。

民の目の前で形だけでも紳士的に運行するつもりなのか？

高木は銃を取り出すタイミングを逸していた。

「マルクト。」

博士はドアに身体を寄せて囁いた。

「ケレル。」

・・・合言葉。

高木は「クリと唾を飲みこんだ。

「・・・どうしたんじや？」

博士がドアに耳をあてた。

「鈴木会長が軍に拘束された。娘さんたちも一緒に。モグラに繋ぎを取つておくが定時連絡はできない。」

ドアの向こうが早口で話し始めた。

「解じや。計画通りわしも動くとこより。」

ドアの向こうの気配はすっ一と消えた。

「・・・博士は何者なのですか？」

不審の目を向けるコナン。その前で高木は声を上げた。

「君らが調べたとおり元神官じゃよ。

でも軍の狙いはわしじゃ なかつたようじゃな。

・・・鈴木会長が軍に拘束されてしまった。・・・元々軍部とは折り合いが悪かつたからのつ。

娘さんたちも連れて行かれたようだ。」

「鈴木会長つて鈴木財閥の？」

意外な名前に高木の声は慌てていた。

「園子のお父さん・・・。娘さんたちつて？」

「なぜ会長が狙らわれる？科人の研究に関係していたのですか？」

「詳しいことは繋ぎを待つしかない。

彼が資金提供はしていたのは昔の事じや。鈴木会長は見せしめに使われたんじやよ。

・・・やはり話さなきゃなりとことがあすさるのつ。

博士は目を瞑つた。

「黙つたら分かりませんよ。早く話してください。急いで会長を解放する交渉をつ。

高木の気持ちが早まる。

「軍だつて命を取りはせん。目立つ行動をしたうえに民が相手なら紳士的に対応するじやろつ。

はて、どこから話せばいいんじやろうか？」

この後に及んで尻ゴミしているわけじやない。

「根本から理解できていないんだ。

神官とは何者なんだ？鬼や科人の研究をしているということは分かつた。

けれど研究は国王の元で進めてるはず。国家機密にあたるんじやない。

そのために城に集められたのに秘密を抱えたまま自由の身になれるなんて考えられない。」

「ナンにはわからないことばかり。推理をするにも考える術がない。

「そりじゃな……。知つての通りこの国の王は神に選ばれたという逸話の在る一族から選ばれておる。

一族が神に代わつて政をすることで背負ひ責任は民に隠している影の部分もある。

王になれなかつた者も国の要職を占め国を盛りたてる。

そして娘たちが嫁いだ四菱家や旗本家などのそつそつたる財閥が、用立てした資金で神官の研究を進めておつた。

「鬼や科人の研究のことですね。」

「……初めは違う研究じやつた。」

ゼウスとデメテルの娘ベルセボネがハーデス神の妻になつた経緯を知つておれば、彼女が年に1度里帰りをするのを知つておるだろ。彼女が天界に戻ると現世は春を向かえ生命の嘗みが再開する。彼女がこの世界に戻ると冬を迎える。

水はある、弱々しいが陽の光もある、冬を迎えないればこの瘦せた大地に生命の嘗みをする時間が増える。

国王の直属でこの国が豊かになるための極秘の研究が進められた。神官と呼ばれる研究者が集めた秘密機関。その名をオルファと呼ぶ。

「……オルファ！」

高木の声が掠れた。

誰もが口にする事さえ気が気が無かつた言葉をあつさりと答えた老人に驚きは隠せない。

「それならその名前を隠す必要がないんじやないの。秘密結社と呼ばれる意味が分からぬよ。」

コナンは落ち着いていた。

「途中で研究テーマを変更したからじやよ。異を唱えたわしは神官の位を剥奪されたのじや。」

博士はコナンの話にあつさりと答えた。

「それでも組織といつものでは秘密を保持しなくちゃならないのでは？」

高木が言つた。

「もちろんじや……が、わしは死んだのじやよ。コナンくんはあの地下室で遺体を見たかもしれんな。」

「……あの白骨化した……ではあの遺体は誰なんだ？」

平次と見た遺体は神官の持つ数珠を持っていた。

白骨化するほど時間が経つていて、頭蓋骨の様子から男性のものと判別でき大腿骨が細かつたのを覚えていた。

体系が似ていても目の前にいる博士の足が悪いわけではない。

「やはり裏切り者の末路として放置されておつたか……前国王のご遺体じや。」

国王は背丈といい恰幅の良い体系はわしと似ていたのじや。

あの日軍の不審な動きを察知した一部の者からの報告で影武者とこつそり入れ替わり、報道された死亡事故から免れた。

影武者に化けた国王も体制を取り戻そうと計画した矢先に亡くなつたのじや。

ちょうどあの地下道は外されたわしは知らんことになつていた。

国王があの場所で処分せよと命を下されたのじや。国王として國の中枢で朽ちたいと。」

博士はおもむろに立ち上がり実験器具の戸棚を開けた。

信じきれない高木は危険なモノを取り出すのかと懐に手を入れ、今度はしっかりと銃を握つた。

「安心せい。王の証の宝玉じやよ。」

博士は取り出した木の箱を開けて見せた。

「この玉が本物？……それじゃ城にある玉は偽物ということですか？」

透き通つた玉の中に赤と白の別の結晶が浮かんでいるそれを高木は不審な顔で覗いた。

幼い記憶のそれとは別のもの。

「その通り、城内でも知るものはほとんどないからの」。
宝玉の力を使えるのは王の血を引くものだけじゃつた。

しかし誰でも扱えるそれに替わる物を手に入れる方法を見つけた今
では価値は分からんがな。

ただの飾り物の偽物でも宝玉があれば誰もが国王の威信を信用する
じやろう。

・・・これが無ければあの計画は実行には移せなかつたはずじやつ
たが。」

コナンは顎の辺りの手を当てながら宝玉を見ていた。

「これを持つていながら身を隠している身分なのに阿笠と名のるの
はおかしくないでしようか？」

高木は疑いの目で博士を見ていた。

「この名は研究者としての許可を取るために必要なのじや。
研究家で名の通る阿笠一族の人間なら国もフリーパスで認めてくれ
る。

警備隊なら分かるじやろつ。

この街の住人の素性など調べられなければ、軍とも仲が悪いからわ
しが身元照会を誤魔化すのも難しくはない。」

「それは分かりますが・・・しかしそれで納得は出来ません。」

高木は率直に思つたことを言つた。

彼が言いたいのも分かる。

コナンは博士の証言にひつかかるものを感じながらも真実も含まれ
てると思えた。

「話はおいおいじょう。それよりここに留まつてゐるわけにもいか
んのや。」

博士は奥の棚を開いた。

それは小さな扉。

地下に繋がる階段が見えた。

「すまんが高木くんは灯りを用意してくれんかな。」

「えつあつはい。」

高木は部屋を灯すロウソクとその台を取りに少し離れた。

「コナンくん・・・いや新一。」

博士は高木に聞こえないようコナンを近くに呼び寄せた。
「もし这么に戻つたら君にこの宝玉を託すつもりじゃつたんじや。」

「急に言われても理由がわからねえよ。それにつ。」

「わしの供述に疑問がある・・・といつことじやろ。科人にもいろいろな者がある。人も同じじや。」

これからはその目で見て自らの意思で行動せよつてことじや。
この世界の未来と君の生きる世界。そのバランスを考えられるのは君の目しかない。」

科人は国王のように術を使つことが出来る。宝玉を使えばさらに力が広がる。

わしらは君にこの宝玉を託す以上どんな協力も惜しまない。」

「えつ。」

「これでいいですか?」

コナンの答えは高木の声に消された。

「ハンシンも一緒に来たなら彼も連れてきなさい。1人にするのは忍びない。2人が城に潜つてから寂しそうじやつたぞ。」

博士は灯りを受け取ると階段を前にコナンに言つ。
呼び出しの口笛に走つてきたハンシンを連れて3人と1匹下りて行く。

コナンの首には宝玉がぶら下つていた。

平次は哀を連れて国王のいるフロアに潜りこんだ。場所が場所だけに警備は厚く潜り込めそうにもない。けれども警備の交替やその時間などを調べるだけでもプラスになる。2人はチャンスを待つと同時に情報を得るために留まっていた。

「1人では危険です。」

あのメガネの男の声がした。

「この状況下で私が拘束されることはないわ。」

「しかし敵意を押さえきれる者だけとは限りません。」

「これでも警備隊隊長の任に就いたんだ。なめられたらお仕舞いさ。」

答えていたのは軍部から調査団に参加している富沢隊長。様子からして呼び出されたという処だろ。

「お待ちしておりました。」

警備兵が隊長に声をかけた。

「あなたが民から来たという副隊長ですね。」

隊長のお供として入室を許可されております。ただし刀はこちらで預からせていただきます。」

2人は顔を合わせた。

「国王のお顔を拝観できるとはありがたいことです。・・・わたしは隊長にお供いたします。」

「では刀を。」

警備兵に腰の物を手渡した。

「さあどうぞ。」

開けられた扉をくぐつた。

警備兵は口元に笑みを溢しながら扉を閉めた。

「調査に圧力掛けるんかつ。」

平次は吐き出した。哀もそうとしか思えなかつた。

「かもしませんね。」

2人の後ろから声がする。

調査団警備隊代表の白鳥が部下を3人携えて立つていた。

「あんたは・・・隊長を疑つてたんか?」

「疑うなんてこれっぽっちも。・・・彼が本気に調査すればこうな

るのは必然なことでしょう。」

それより勝手に動く君たちの方が気になりますね。」

「せやな。けど隊長の後を着けてたやん、自分。」

平次の言葉は白鳥に流された。

ここはその敵の中枢。しかし真実を見付出すには行動を起こすしかない。

「たまたまですよ。あなたがたはここまで詰め所に戻つてもらいましょうか。」

「危険は承知や。圧力を掛けるなら尚更覗いてつたほうがいいんと

ちやうか?」

「確かにお偉いさんがいるでしょう。面倒いものが見つかるかも

しれないですね。」

「でも警備も厳重、どこかに適当な覗き穴でもありますか?」

もう一度平次は辺りを見回した。

「天井裏は使えない。ここは警備の都合上裏には入れない作りです。」

哀は恐る恐る辺りを見回した。

しかし・・・。

「あかんな・・・自分どうしたん?」

震え出した哀の姿に驚いた。

「おいつ・・・・・」

「どうした?」

「・・・・いえ。」

哀は戸惑いながら答えた。

一瞬あのいやな匂いがした。

この部屋の向こうにあの秘書官・・・ベルモットがいるはず。

その緊迫が感覚を麻痺させているのだろうか?

「よく来られた。・・・ほお・・・君が例の・・・なるほど・・・まあお座りなさい。」

扉からすぐの椅子に座っていた黒衣を纏つた神官が振り向いた。

「失礼します・・・・・。」

部屋には国王ビンカ将軍など幹部の顔はなく、正面の席に土門大佐の姿があった。

兵士に周りを囲まれ大佐の対面の席に促された。

「調査は順調かな?」

民の不安をアオルヨウナ中間報告は避けて欲しいものだが、事と場合に寄つては仕方あるまい。

但し調査に対する信頼を損なわないよう頼んだぞ。」

民に信頼の厚い大佐が言った。

「心得ております。」

残念ながら調査は困難を経てあります。必ず立ち塞がる言葉。この秘密を解かなければ先に進めません。」

富沢はいきなり本論を切り出した。

2人を呼び出してこの部屋に通したのは、場合によつてはと準備ができてゐるということ。

長引かせても結果は同じ。

富沢の発言を部屋にいる全ての者が一瞬にその意味を理解した。静まりかえった部屋に富沢は自身の心臓の鼓動だけが聞こえた。

「オルファだろう。」

落ち着いた口調で発せられた土門の言葉。

二人は唾を飲み込んだ。

覚悟の上で放つたことの答えを震えを抑えながら待った。

「オルファが何を研究してたかは知つておる。」

阿笠博士は言った。

階段を降りて続く地下道。

コナンと高木は博士の後を続く。

「しかし研究から外された当時のわしに止める術は無かつた。

神官の地位は剥奪され意見をすることもできず、城の地下に幽閉されてしまったのじや。

抜け出して対抗する研究を始めるために、一から研究場所とスポンサーを募ることから始めるしかない。

あの頃は必死だった。彼らよりも早い結果が求められたからのう。

階段を降りるとそこは実験室。

高木は物珍しそうに置かれてある物を見ていた。

そして大事に置かれた石板を見つけた。

「あつコナンくんは触れるでないぞ。」

高木はどういう意味か分からず「コナンの顔を見た。

コナンには通じていた。

灰原が閉じ込められた部屋と同じ物。正体を知る博士からの忠告だった。

「これは富野博士から密かに預けられたモノじや。」

「富野って言えば？」

「亡くなつた・・・殺された富野厚司、志保くんのお父さんじや。彼の立てた仮説を証明するためにエレーナさんはオルファの研究リーダーとなつた。

鈴木財閥が研究に対する協力要請を断つても彼女は必死じやつた。その研究が仮説を証明するために必要だつたのじや。

彼は未来の為に仮説を証明することを断念したのだと叫つわしの声も彼女には届かなかつた。

しかしわしが城を去つた後彼女にも恐ろしい事実に気が付いたのじや。

彼女も研究の中止、テーマの変更を願いでたようだが遅かつた。反逆の罪で彼女も始末された。

走り始めた汽車はブレーキを外し暴走した。

危惧していた通り理想を実現する夢のレールは協調よりも欲望に任せてポイントを切り替えてしまつた。」

「鈴木財閥も知つていたのですか？」

高木は驚いた。

「富沢コンツェルンが国の事業の中心的な役割をして急成長した企業だと知つておるだろう。

鈴木財閥も国の進める研究に資金を出してはいたが、一本化した研究テーマに異議を申し立て中断した。

そのためがほとんどの研究開発事業の中心となつて研究が進められた。

我々神官も感謝しておる。

君は軍に身を置いたのはさらに高みを重ねそつとは考へないのかな。

「確かに会社は大きくなりました。しかしそれは父が望んだ事じゃない。」

『富沢は言った。

急成長はしつかりとした土台の上に成り立つもの。小さな歪みも処置をする間もなく大きく成長する。

走り出した汽車の如く乗せられたレールしか見ていない。いや見られなかつた恐怖。

「結果だよ。国内一の企業にのし上がつたのだ。残念ながらヤツカミも多かつたのだろう。」

「何が言いたいのでしょうか？」

「オルファの血判状は君の体に流れている同じ血で染められている。」

「わたしはわたし。わたしの血筋が過ちを犯したのならば、正すのも同じ血だ。」

富沢が軍に入隊できた理由として国と一族との関係を薄々感じていた。

やはり噂どおり父の死には裏があつたと言つのか・・・犯人とされたライターの兄にも。

しかしオルファという言葉に顔色を変えないで済ませることができなかつた。

「そうカッカしてはお体に差し障るでしょう。彼には衝撃が強すぎるので。」

神官と富沢の間に大佐が割つて入つた。

「人は現実を見つめ理想を求める。

この国の民のため進める計画に賛同した君の父の行動が間違いと言うのか？

君をここに呼んだのは他でもない。

国王の名の下に國家反逆の容疑者を拘束した。

中間報告と同じく民に不安を搔きたてるわけにはいかないので公表はしていないが、

彼らの処分は今回の調査と関係ないということだけ覚えておきたま
え。」

土門大佐が言った。

「それは誰の事ですか？」

畠沢が叫んだ。

「言つまでもない。だから君たち2人が部屋に通されたのだつ。そ
の言葉に畠沢と京極が顔を合わせた。

・・・まさか・・・鈴木財閥のこと?

それじゃ会長を初め朋子夫人、綾子さん、園子さん・・・

2人が動こうとするといきなり兵たちが銃口を向けた。

「わたしが話せるのはそこまでだ。」

「あなたの軍族の不正をも許さない正義が民に高い支持を受けられ
ているはず。」

オルファは不正そのものじゃないのですか！？」

京極が叫んだ。

「何を言つ！国を想わないものが城に居るはずがない。オルファが
これからも未来へ道を示す！」

・・・大佐も少々甘いのではないか？こんな調査団を潰すのは難し
い事ではないだろう。

兵たちはこの者たちを監禁せよ。」

神官が声を荒たてた。

「待つてください。兵たちは命を預かったわたしの部下。神官と言
えどもわたしを差し置いて命を下すのは止めていただきたい。」

大佐は銃を下させた。

「オルファは・・・わたしの知る限りかなり黒に近い白。

わたしの権限で容疑者は容疑者として扱う。もし彼らが無実なら君
たちの手で証明しろ。

神が裁きを申し渡す。」

「

大佐は諭すように言った。

「わたしは神官だ。軍の指導者に意見を言ひ立場のものだぞ。大佐も大局を見る資質がないだけでなく、立場というのも理解しておらんようだな。」

神官の怒りは収まらない。

「国は民によつて成り立つもの。神官として国の行く末を想うなら民の声を聞くべきかと思つが？」

「民には意見を求めるよりも新しい世界を掲示するしかない。」

果たして誰の命に着いて行けば良いのか兵士たちは困惑した。

「かまわぬ。この者たちを拘束せよ。」

神官が命を発した。

うおおおおおおー

再び銃が構えられる前に京極誠の身体が舞つた。

脚が空を切り裂き、拳が唸る。

部屋の中から銃声が鳴る。

外にいた兵士たちも驚いて扉を開けた。

「チャンスつて転がつてくるもんやな。」

平次が立ち上がり駆け出した。

続こうとする哀は肩を掴まれた。

振り返つて見た男の口元が笑っていた。

哀が振り向くとその先に白鳥の顔があつた。
あの嫌な匂いは彼から発したのだろうか？
でもいつの間にかあの嫌な匂いは消えた。

勘違い・・・緊張を強いられて能力までもう麻痺したのだろうか。
このままじゃ殺られる・・・。

哀の顔は強張っていた。

「子供の来るところじゃないんだよ。」

白鳥は子供相手に口調が強すぎたかと困った顔をしながら哀の頭を
撫でた。

「君はこの娘を連れて詰め所に戻つてくれたまえ。」
従えていた部下の一人言つと平次を追つて扉の向こうに走つていった。

哀は疑いの目のまま見送つた。

わたしはまだ生きていなくちゃ・・・。

死にたいと思つたあの頃と正反対の意識。

異世界に来て更に強くなつた氣がする。

「さあ、行こうか。」

騒ぎが聞こえるフロアから離れることに哀は素直に従つた。

「大佐は下がつて下さい。」

相手は丸腰の男たち、兵士は威嚇しながら要人の保護を優先した。
銃口を向けられて真の動きはトップスピード。

人質を捕られ冷静でいなくてはという気持ちを繋ぎ止めるのが精一
杯。

パワー全開の蹴りは盾となつた兵士を倒してゆく。

彼は有名な格闘家。先制攻撃の機会を失つては訓練された兵士であつても相手にならない。

騒ぎの中、部屋の外に出ようとした神官は入り口で白鳥と鉢合わせ。道を空けろと怒鳴り散らす余裕も無く慌てふためく神官は、

その様子に部屋の中へと気がはやる白鳥たちと押し問答。

後ろから転がってきた兵士によつて倒され抜け出す機会を失つた。

キュン

「気が済んだらう。」

大佐は腰の短銃を天井に向けて撃つた。

一瞬皆の動きが止まる。

神官も銃声の方向に視線を奪われた。

ガシャン！

一瞬にして天井から檻の柵が落ちてくる。

富沢や真、平次は部屋の隅に押し込められた。

「・・・気が済んだ顔はしてないか。

しかしここは國の中枢、騒ぎが大きくなればただでは済まないぞ。」

大佐の前に銃を持った兵士が並ぶ。

「せやけどこの状況を黙つとれと言うんか！銃口を向けてたんやで。

」しぶしぶ兵士の襟首から手を離して平次が言う。

「兵士は威嚇しただけだ。安全装置が外されていたか見たのか？」

「・・・素人に分からへん。」

1番に飛びかかった格闘家の真は兵器には素人。そんなことは分からぬわけがない。

気が付いていた平次も言い訳に便乗した。

「君たちは民の期待を背負つた調査団だ。

調査の方法を練つて城に乗り込んできたんじゃないのか！

それなのに軍に力で対抗しようなんてできるはずも無いだろう！

富沢、おまえはどうなんだ？」

大佐の発言にイラつくことなく富沢は冷静に努めていた。

「軍は調査に協力すると宣言されています。

その軍部の中でも大佐は民にとつての英雄、同じようにわたしも大佐の正義に期待をしていました。

そのあなたが発せられた言葉をどう意味に理解しろと言つのですか？」

「思う様に理解すれば良い。

わたしも内部の人間だということだ。

だからこそ極秘事項を知ることができ、未来を考える事が出来る立場に居る。

君たちは外部からの調査団。

国の方針を民に理解でき納得するよう報告をまとめるのが仕事だ。

「我々は軍の広報ではありません。」

檻の外にいながらも銃口を向けられた白鳥の意見は大佐に聞き流した。

「厳しいこの状況を打破するために国はいろんな政策を計画した。しかしそれで得られる富は期待をかなり下回る。

それでも良しとするなそれもよい。選択は自由であるべきだ。しかし可能性を求めて国王の号令のもとに神官たちは研究を続けてきた。

研究のほとんどが頓挫したが、オルファ計画だけが最終段階まで遂行できた。」

大佐はワザとらしくまた『オルファ』を口にした。

軍の重鎮が言葉を口にしたことには驚いた。

「オルファの噂は国中に蔓延してます。

軍・・・いや国が関与していながら隠し通せなかつた計画とは何なのですか？」

落ち着いた口調で白鳥が切り出す。

「おまえらが知ることのないことだ。」

床に座りこんでいた神官が立ち上がりながら口を開く。

「彼らが計画に行き付けなければいつまで経っても彼らの調査は終わらないのですよ。

・・・よいか、この国に生きる全ての民の幸せを願う。
しかしどんな計画も100%そうできるはずはない。

必ずそういう立場のものが出でてくるものだ。

この計画に関与した者たちの中に漏れる者がいる。

今回の騒ぎは彼らを抑え切れなかつたため軍が介入することになつただけのことだ。」

大佐は大雑把に答えた。

相変わらず神官は嫌な顔をしていた。

「だからその計画の正体は何なんや？それが分からへん。」

平次が口を挟む。

「知る必要はないつ！

大佐は口がすぎる。いつたい何を考えておるのだ。彼らに国王の崇高なお考えなど理解できるものか。」

軍の幹部でもある大佐に対する神官の話し方は意見をする態度には見えない。

大佐が怒らせて神官に喋らせているように畠沢は感じていた。

このタイプは雄弁に語りたがるもの。

大佐はチャンスを与えてくれたのかもしけない。

調査を続けても核心には届かない今は國の中枢にかかる人間に喋らせるしかない。

「だとしても民の想いも受けとめなくてはならないでしょ。」

大佐は静かに言った。

「忠告しよう。

流されて大局を忘れてならぬと。これは私だけではない。國王もそ

う思われていいるはずだ。

このようなものを城に入れること事態が間違っているのだ。

それに軍の人間と民が合同で動くとなると富沢は不適切だという意見を遮ったのは大佐だと聞いている。

軍内部でも要注意人物であるこの男に拘る理由は何なのだ？

・・・まあよい・・・こうなつたからには処分は我々に任せていただこう。」

神官は動搖する兵士に富沢を拘束するよう促した。

しかし大佐の部下である兵士はお互いの顔を見合わせ動かない。

「調査団が軍の兵士と警備隊の混成したチームとなつたのは將軍のご意向に沿つたものです。

將軍を飛び越えての指示には承服できません。

そして彼を調査団に参加をすることを薦めたわたしの責任でもあります。」

大佐は言つた。

「將軍もあの夜の事件がなければ突っぱねていただろう。だから大佐は甘いと言われる。

その潔癖さが民の正義と同調する部分かもしれんが、人気に浮かれるから自分の立場を見失うのだな。

・・・なんだ貴様は？」

1人の兵士が神官の前に出た。

「我々は状況を理解できずにあります。

しかし我々が信じられるのは大佐だけです。」

「わたしに口答えするのか！直接話を聞けるだけで十分だろう。立場を間違えるな。

・・・何の真似だつ。」

兵士が神官の腹に小銃を突き付けていた。

「えつ！」

兵士のまさかの行動に富沢たちは止まつたまま。

後ろの回つた兵士が首の辺りを打ちつけると神官は崩れた。

白鳥が急いで倒れかけた神官の身体をささえた。

「黙つてもらいました。」

兵士は額に汗を滲ませながら言った。

「おまえは・・・」

大胆な行動に大佐もあっけに取られた。

「勝手な所業をお許し下さい。

彼は大佐の監視役、このまま戻す訳に行きません。

大佐にはもう立ち上がり頂きたいのです。

他の部隊の兵士も我々からの連絡を待つてあります。我々の命は前線の戦いから大佐に預けたままなのですから。」

他の兵士が落ちた柵を解除した。

大佐を尊敬しているのは富沢だけじゃない。

「きみたちはそれでいいのか？監視は彼だけじゃない、ただでは済まんぞ。」

「心得ております。」

兵士たちは大佐に敬礼した。

「クーデター・・・ですか。」

この事態に我々も密着して調査させていただきましょう。」

白鳥は富沢の肩に手を遣りながら言った。

軍内部に浄化する力が残っている。

それは調査団にも力になる。

「きみたちの未来は保証できないぞ。」

「我々が国に対してクーデターを起こしたというのなら、
国王が神に対してクーデターを起こしているようなものではないですか？」

大佐が民間組織を影で組織していることは我々も知つて居ります。我々は大佐の部下ですよ。今までも未来は望めません。我々も組織に入れてください。

今立たなければオルファ 計画で呼び出した鬼が国を滅ぼします。」

「その計画で鬼を呼び出したのか？」

「一体何の為に・・・・・国王は鬼の被害を受けた民の声を分からないのか？」

調査団の面々は驚いた。

「鬼は新しい世界に導くものだと神官らは言つていた。

新しい世界と交流がこの国を発展させる切欠になると。

この世界がハーテス神によつて統治されているように別の世界にも神がいる。

神の「」加護を忘れて人間の強欲に走つた謀略だと思う。

この計画を止められないのはわたしの所為だ。

新しい船には新しい水夫が必要、わたしがしなくちゃならないのはこの混乱の幕引き。

次の世代を託す君たちを巻き込まなくちゃならないなんて・・・・・

大佐は悔しそうに言つた。

「これはクーデターなどと大それた事ではない。

オルファ 計画がどのようなものか聞かされていても、それが全てではない。

眞実を明らかにするよりもまずは計画の休止させる方が先になる。

調査団はそれでも納得できるかな？

我々と行動を共にすることはその手を血で汚す事もある。」

大佐は白鳥に言つた。

「我々は眞実を民の眼に曝すのが仕事です。

同行するのは調査するため、各自の命を守るのは別のことです。

もし行動まで共にするならば調査団としてではなく個人の想いからでしょ。」

返事を躊躇した白鳥に替わつて畠沢が言つた。

彼は軍人。他のメンバーとは立場が違う。

兵士が大佐を囲んで結団の気勢をあげる。

「・・・まつたく何もかも展開が早過ぎやで。
兵士が1人減っていたことに気が付いた平次はそつと呟いた。

「鈴木会長は計画を知ってしまったから口を開いたんじゃない。」博士は言つ。

「そんな・・・我々は力になれないのですか?」

高木はため息を漏らした。

「君は調査団なのに何も知らんのか。新一の捜査記録を見てるんじゃないのか?」

「恥ずかしながら・・・田暮隊長が読まれてますが僕はまだ・・・。」

毛利さんが持つていたという記録を元に田暮隊長を中心となつて捜査を始めている。

しかし独断でコナンを連れて捜査を始めたことは間違いない。

「そうか・・・新一も計画を知つてしまつたんじゃないよ。」

彼はうすうすわしの正体にも気付いていただろ。共に戦つことを彼らに頼みたかったが言えんかった。

そして志保くんと2人は姿が消えてしまったのじゃ。」

博士の語尾が震えている。

「服部くんが新一の捜索をしていたが彼にも計画の話は言えなかつた。」

・・・まだ話しても誰も信じはしなかつたじゃろうな。

そして秘密裏にある組織を作つた。その名は『白い盗賊団』

「あの予告状を送り付けるあの男は仲間なのですか?」

「いや、騒ぎを起こしているあの盗賊とは別物じゃ。神官が組織を調査したときに間違えただけじゃよ。」

彼の出現がわしらが怪しまれなくて済んで好都合じゃつたがのう。

しかし何者か分からんが彼も何かを知つてある。十三夜と予告状に

記しているからのう。」

博士は話を続けた。

高木は驚いた。城にいた人物しか知らないはずの予告状の中身を城外の者が知っている。

城に内通者がいるということ・・・

会長を拘束したということは軍が気が付いたということだろうか？

「この先に別の『神体』がある。

コナンくんが宝玉を持って行けば神への道が開かれる。

計画はこの世界の人間が企てたこと。

神は罰を与えるだろう。

この世界と向こうの世界とのバランスが崩れる前に我々自身で解決したいと神に願いを届けて欲しい。」

博士はコナンの肩を叩いた。

「急に言われても博士は今まで何も話してくれなかつたんだぜ。」

コナンは秘密主義の博士に不満がある。
自分だけじゃない。服部もまだ城の中にはいる。

「そうじやな・・・話すしかない。

頻繁に現れる鬼が計画の進行具合を示しておる。もう時間が限られている。」

博士の言葉は意味が分からない。

「確かに鬼の出現はこの世界に対する警告だと我々は報告を受けてますか？」

高木が言つ。

警備隊には軍がしていることを調べる権限がない。

報告を鵜呑みにするわけではないがそういうことにされている。

「・・・世の中には知らないで済むならその方が幸せなこともあるかもしねれない。

しかし同じ時間を生きる者として責任を問われることもある。

鬼に自分たちがいた世界の扉を開けさせようとしているんじや。

そこは現世・・・鬼の正体は永遠の命を求めた現世の人間なんじやよ。」

「この世界に現れた現世人が科人なのでは?」

コナンも驚いた。

「鬼も科人も同じなんじやよ。

現世の自我を持つのが科人。自我を失い自らの存在をコントロール出来ないのが鬼なのじや。

鬼ならこちらからコントロールすることが可能だから現世への道案内をさせるつもりじゃつた。」

「そんな・・・なぜそんなことが分かるんです?それに神がそのようなことを許したのですか?」

高木の声は裏返っていた。

「神も我々と同じように感情がある。だからこそ我々の想いを理解してくれる。

そこを突いたのじや。

この世界が春を向かえる頃、現世では冬を迎える。我々の世界の反対の季節を迎えるのを知つてあるか?

ハデス神はゼウス神の娘ペルセポネを妻とした。

しかし母のデメテルは消えたペルセポネを捜しオリンポスの集会にも現れず身を隠した。

穀物の神が仕事を放棄した現世は台地が荒れ人々は飢えに苦しんだと言われている。

ゼウスがペルセポネを連れ戻そうとしても彼女はザクロを口にしていたためこの冥界の住人になっていたのじや。

そこで彼女が実家に戻つて暮らす時期はデメテルが仕事を始め現世は春を迎える。

穀物が育ち実りを迎えるまで彼女は母の傍にいる。

妻の居ない時期のハデス神は洞窟の奥にこもつてしまわれた。

その時を見逃さなかつたオルファは計画を進めた。

まず行人が来た現世とこの世界を行き来できるんじやないだろうか？

昔から数十年に1度はこの世界に鬼が現れたという記録がある。

彼らが何者でどこから来たのか神官が調べるつちに、疑問が沸き起

こつた。

神以外の者もいろんな世界を行き来できるんじやないだろうか？

当り前のことと誰も疑問に思わなかつた事に疑問を持つた。

鬼が暴れるのは元の世界に戻りたいという本能なのじやろう。

どういう方法を使ったかそつちの方の研究は分からんが彼らが現世から来たということが分かつた。

あの圧倒的な力に脅威を感じ、領地を広げようなどという考え方から交流してその力を手に入れる計画に代わつたのじや。

息絶えた鬼の身体からゴナゴナに砕けた紅い石が見つかつた。

これこそが現世の技術、これを作り出せれば世界を行き来できると神官たちは色目氣だつた。

そこで砕けた赤い破片調べると共に行人を使って実験が行われた。ある時偶然にも鬼の持つていたものと同じ紅い石を手にした行人がこの世界に現れた。

彼は現世に送り返すことができた。現世では死者が蘇つたと大騒ぎしたことだらう。

紅い石に現世の者が同じような研究を進めていくというメッセージが込められていると確信した。

不完全じやが紅い石は冥界の住人による石榴の実を無力化してしまう力があることが分かつた。

おかげで人の運命を司る女が神モイラの眼を欺く事が出来たのじや。神官たちは紅い石と行人に絞つて研究が続けられた。

しかし地獄や天国の死者より行人を使う実験の中止及び禁止を強行に言い渡された。

繋がっている全ての世界のバランスを崩すとな。それに行人を送り出すベイカの街の存在意義も失つてしまつ。

そこで危険を省みず鬼を使つた実験に踏み切つてここまできた。

これがよいはずはない！

この世界が狂いだしたことそのままでいいわけじゃない。
神がこもつていて我々の祈りが届かない時期ならば我々自身で計画を止めなくてはならん。

そこで力でもつて阻止する作戦、我々と同じ想いをもつ科人を見つけること、対抗する研究を続けていたのじゃ。」

「科人・・・やはり鬼と同じように実験に？」

高木は博士の顔色を見た。

「そんなことはせん。

鬼と科人は同じ現世人、同じ力を手にしようとしたが違う。
鬼は神と同じ力を手にしようとしたが科人は神の目前に仕えること
で神に近付こうとした。

だからヘルメスの印が身体にあるんじや。

ハデス神と話せるのは国王と特別な力を持つ科人しかいない。

「コナンくん、わしは思いを共にする仲間を代表して君に託したい。」

「それってオレにこの世界を託すこと？」

コナンは身構えた。

高木は思いもしない状況を深刻さに額から汗が滲んでいた。
そして隣にいる少年が科人だという事実にチラチラとコナンの顔を見ていた。

「・・・そうじゃ。君が現世の工藤新一ならばその資格があるとわ
しは思う。

神が科人となつた新一を呼び寄せるたのじや。そうとしか考えられ
ん。」

違う・・・でも・・・呼び出した君の悪い声は・・・ヘルメス神・・
・?

オレはその行動の甘さからヤツらに薬を飲まされて時間の流れに逆らつた。

あの薬は毒として作用せずにオレの身体を幼児化させた。

・・・待てよ・・・美國島での芳名帳にアイツの名前があつたつ。確か人魚の肉・・・永遠の命・・・若返り・・・時間に逆らう魔法。あの薬の作成にはそんな研究テーマも含まれていたのかもしれない。オレは・・・その罪の償つために来たんだ。

償うべきものは何か？

それを知らなくちゃならない。

「博士教えてくれないか？宮野博士の研究つて何なんだ？」

「・・・紅い石の製造じや。」

哀が囚われたのはアポトキシンを作ること。

あいつにまた苦しみを背負わすわけに行かない・・・

「彼は元々は医学者だったのじや。行人を使った実験に強制的に協力させられたんじや。

わしが調べていた神を巡る世界論で見つけたバラケルスス理論によると、

紅の石によつてアルカナという万能薬が出来るらしい。

彼は万能薬の研究を続けるために神官に志願して紅の石の研究を進めたのじや。」

コナンは「毒を作つてゐるつもりはない。」という哀の言葉が頭に浮かんだ。

「国王の宝玉とはフーラメルの紅い石とも呼ばれてゐる。

これを持つた科人である君なら『エリスの迷宮』を抜けられるはず。

「

「・・・わかつた。オレ行つて来るよ。だからその間は計画を進めさせないでくれないか。」

「それは僕の仕事でもある。警備隊だからじやないさ。」

この世界は絶対に壊させない。守らなきやならない人がいるから。」

高木は言った。

今まで少年と一緒にいて彼を科學だと思ったか？

服部くんも信頼していた少年もある。僕だって同じ。そして・・・

「君が帰つてくるまでは必ず。」

「ああ、間に合わせるさ。」

コナンは一人闇の先へ走つて行つた。

35・舵を取るもの

それぞれの意志や希望とは関係なく同じだけ刻は流れ
自分の為にだけに時間があるわけではない。

この国の本流を賭けた戦いは氣勢を上げる城内で密かに続いていた。

「そろそろ返事を貰いましょうか？」

サングラスの男が言った。

「わたしの願いはこの国の民が幸せであること。」

窓際のベットに横になりながら男は答えた。

「幸せね・・・我々と手を結びたいと言つたのはそつちだぜ。神に反旗を翻すんだつ。この条件は飲むつてことでいいんだな。」

「無論だ。神を恐れて立ち止まつていては時間が無くなる。」

男は歯を食いしばり、その瞑つた目から涙が流れた。

「俺たちはこの国にとつて悪だとでも言いたいのかい？」

「ここは神から任された行人に判定の下す地。

その長であるあんたが悪と言おうと我々は我々の仕事をしているだけ。

「無理にどうこうしたつもりはないんだがな。」

「もちろんだとも。国の代表が愛する民を悪の道に誘うわけがなかるべ。」

「ほお・・・この条件でも商談の意思ありか。」

決裂と考えていたのだろう。

意外な答えにサングラスの男は口笛を吹きながら言った。

「聞いた通りだ。」

サングラスの男は自分を部屋に通した将軍に言った。

「形式的にスジが通つたわけですね。」

国王は病魔に冒された身体。

「後はわたしが代わつてお話をお受けします。・・・」さういへん。

「じゃあな王様っ。命あつてのモノダネだ。養生しろよ。」

将軍の案内でサングラスの男は出ていった。

扉が閉まる大きな音がした。

部屋にはそれより大きな声無き叫びが響いていた。

軍に連行された鈴木会長ら4人は城の南塔に隔離されていた。
長い階段を昇つた先にある意外と広い部屋に、

表情を変えない鈴木会長の周りに震える園子と綾子の姉妹と蘭の4人。

ぼんやりと灯るロウソクの炎が揺れ4人の影を壁に映す。
その黒い影は氣味が悪いうねりをあげ、まるで悪魔に囮まれたかの
ように思えた。

入り口の扉の前には見張りの兵士が付けられていたが、
強制的に連れて来られたのに鉄グツ輪もはめられず自由に動くこと
が出来た。

鈴木会長は彼らにとつても重要な人物であるのだろう。
部屋には格調高い調度品が置かれ、

花まで飾られてたテーブルにはお茶まで用意がされていた。

園子や蘭にはその理由が全く分からぬ。

ろつそくの炎が揺らめくたびに、

壁に掛けられた他の神々から忌み嫌われ冷酷非常な決定を行つてき
たというハーデス神の絵が、

不気味な笑みを浮かべ睨みつける。

絵画であつても疾しいことがない身に押し潰されるようなプレッシ

ヤーがかけてくる。

「温かいものを飲めば少しは落ち着く」とも出来よつ。」

震える園子たちを前にイスにどつしりと座つた会長は、置かれていたポットでお茶を入れた。

「わたしがやりましょう。」

蘭は立ち上がりポットに手を伸ばした。

「待つてつパパも蘭も。」

ここは軍の用意した部屋よ。毒が入つてゐかもしないぢやない。園子は急いでポットを取り上げた。

「心配はいらんよ。」

殺すつもりならこんな部屋に連れて来やしないよ。」

会長はお茶を飲んでみせた。

それを見た3人も顔を見合せながら口にした。

「月が見えるな。かなり高くまで昇らされて疲れた・・・わしも歳なのかな。」

会長は立ち上がり窓の景色を見た。

視線を下げ町の様子を見る。

町には火の手が上がつていいない。

この一件で怪我人は出たのだろうか?

しかし最小限で済んだことにホッとしていた。

「でもどうこうことなのつー。」

落ち着くと怒りがこみ上げてくる。

「わたしたちは善良な民ぢやないつー!」

連れ去られた時は蘭の腕にしがみ付いて離れなかつた園子は声を張り上げた。

「園子・・・落ち着きなさいつ。」

綾子は歳が上だから少しは分かつてゐるのかもしけんが、まだ詳しくは園子には話していなかつたな。

これは鈴木財閥の宿命なのだよ。

しかしかたしたちは民に後ろめたいことはしていない。

これだけは胸を張つて言える。

・・・しかし蘭さんまで巻き込んだのは・・・申し訳ない。

「いっいいえ。」

蘭は何もいえなかつた。

鈴木財閥の宿命・・・

鬼が現れたこの国では想像つかない何かが起こつてゐるのは確かなこと。

しかしこの頃から一緒に過してきた親友がそのウネリの中心にいるなんての信じがたいこと。

でも・・・あの新一が何も言わずに姿を消したのは・・・やはりアイツも巻き込まれてゐるのだろうか?

・・・きっとそうに違ひない。

こんな大事件に気が付かないはずがない。

蘭はそう思えずにはいられなかつた。

クリスが資料を整理していると部屋のドアが開いた。

「御客人ですね。お茶をお持ちしましょ。」

「いや酒にしてくれ。」

そう言つと将軍は客人を奥の椅子に案内した。

「はい。」

連れの男は厳つづいかにも怪しい。

しかしクリスは気にもせずにカウンターに並ぶ酒に目を向けた。

「・・・地ノ獄の男か。」

クリスの本当の顔。ベルモットとしてその顔は何度か使わせてもらつてゐる。

この手の顔をした兵士は「ロロロ」といふものだと堂々と素顔で城内に乗り込んでいた男。

厳つい押しが強い顔はわりには記憶に似た顔が重なつて浮限定されないため化けるには打つてつけ。

ホント重宝させてもらつていた。

今日は饒舌になつてもらおうとアルコール度の高いものをチョイスした。

クリスはチーズとグラスの横にウオッカを置くとワゴンを動かした。

「こちらを！」用意しました。」

「いいじゃねえか。」

サングラスの男は瓶を手にして言った。

「そうですか。・・・ああ君は悪いが席を外してくれ。」

將軍はクリスに席払いを命じた。

「・・・はい。」

クリスは戸惑いつぶつた素振りを見せながら部屋を出た。

「良い女だね。」

「手に余るところもありますがね。」

「ほお・・・その暴れ馬を飼いならすあんたはやはりやつ手だねえ。」

「そんなことは。」

將軍は笑いながら返す。

「戦争より政治のほうが向いてるんじゃねえか。」

さて・・・そろそろホントの返事を聞かせてもらえねえか？」

「わたしも國の重責の一部を担つていても全ては王様が決定されます。」

もう返答を聞かれたでしょう。今更出過ぎた真似をしては民が許さ

ないでしょ。」

将軍は態度を崩さなかつた。

「あんたが人払いをしたんだぜ。もつが居は止てもいいんじゃねえのかい。

それともあれが本物の王だと騙せるとでも思つてゐんじゃねえだろうな。」

ウォッカは語句を強めた。

「騙してゐわけじゃない。

この国の民を不安から落ち着かせる為に国王と言つ象徴は必要なのだ。

民の拠り所になればそれが本物であつても良いのではないか。

しかし今はアレで充分かもしけないが時間は待つてくれない。」

「事を起こす準備は出来てゐる。モッタイつけて時間が無いのはそつちの勝手だぜ。」

「城内まで下調べしてゐる貴殿方も分かつてゐるのだろう?

天ノ国の皆様に知れたら貴殿方が戦争になるのでは?」

「天秤に掛けるつもりなら止めておいたほうがいいぜ。ここが戦場になるだけだ。」

「そんなこと想定内ですよ。」

絶対に呑む条件ではないと考えていた。

将軍の口調は変わらない。

やつぱり一筋縄ではいかないことは分かつてゐた。

ジンの兄貴から直接任された仕事だけにこの交渉も慎重に進めなければいけない。

「まだ手札が揃つたわけじゃないだろう。」

ウォッカは力マかけて見ようと誘つてみた。

「我々の手持ちのカードはご存知の通りです。貴方も城内を調べられたのでしよう。

城内に転がりこんだ行人を一匹始末したようですね。

それに今頃下の方で騒がしくなつてることでしょう。
足りなければ新しくカードを作ればいいのですよ。」

「専門分野には抜かりはないってわけだな。」

記憶を取り戻した行人が存在するってことは科人がいるといつて。
まだヤツの底は見えない。

「こちらは条件を受け入れるということです。

我々がエリスの迷路を突破する鬼の部隊を作る、貴方は紅い石を手に入れる。

我々は現世という新しい土地を手に入れる、貴方はご神体を通さずに行入を地ノ獄に連行できる。

それはそのまま天ノ国の弱小化につながる・・・お互いウインワインの関係ですね。」

「いや違うぜ。条件はそれだけじゃねえはずだ。」

「成功報酬は結果が出なくては話になりませんよ。」

「テメエ、初めっから。」

ウオッカは感情を押し殺しながら言った。

「どうでしょ? まずは十三夜に一報を期待してますよ。」

「迷宮を解く鍵でも見つけたのか?」

「さあ?」

ウオッカの問いに将軍は笑みを浮かべて答えた。

「・・・分かったよ。」

ため息交じりの返事をする。

任された以上手ぶらは許されない。

しかしふイカを掌握した男の前に今は退くしかない。

保険をかけといてよかつたぜ・・・。

悔しそうな眼を隠すサングラスがプライドを守る唯一の救いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349a/>

エリスの迷宮

2010年10月16日02時27分発行